

相川亮一

ザ・サツカーコーチ



相川亮一コーチ（2009年）

相川亮一

相川亮一（あいかわ りょういち 1946年 - 2011年）は神奈川県横浜出身のサッカー指導者。私立栄光学園卒業、早稲田大学卒業。FIFA 公認コーチ。2011年1月心不全のため永眠。

【人 物】

神奈川の受験進学校出身の変り種。独自のサッカー観を持ち、独学でサッカー理論を学ぶ。1971年に日本サッカー協会主催第2回公認サッカー・コーチング・スクールを受講し、平木隆三（日本サッカー協会主任コーチ）に師事。

1973年にテヘランで開催された国際サッカー連盟（FIFA）主催公認アジアコーチング・スクールを受講。デットマール・クラマー（西ドイツ）主任コーチに師事。

翌1974年から当時は珍しい存在だったクラブチーム、読売サッカークラブとコーチ契約。以後、ユースコーチおよびトップチームのアシスタントコーチ、ヘッドコーチを経て監督に就任。当時の日本リーグ1部に昇格、JSLカップ優勝、天皇杯出場などを経験する。

読売サッカークラブの時代にジョージ与那城、ラモス瑠偉らを率いて読売旋風を巻き起こしたが、1982年に監督を辞任後は、主に高校生の指導者として活躍。

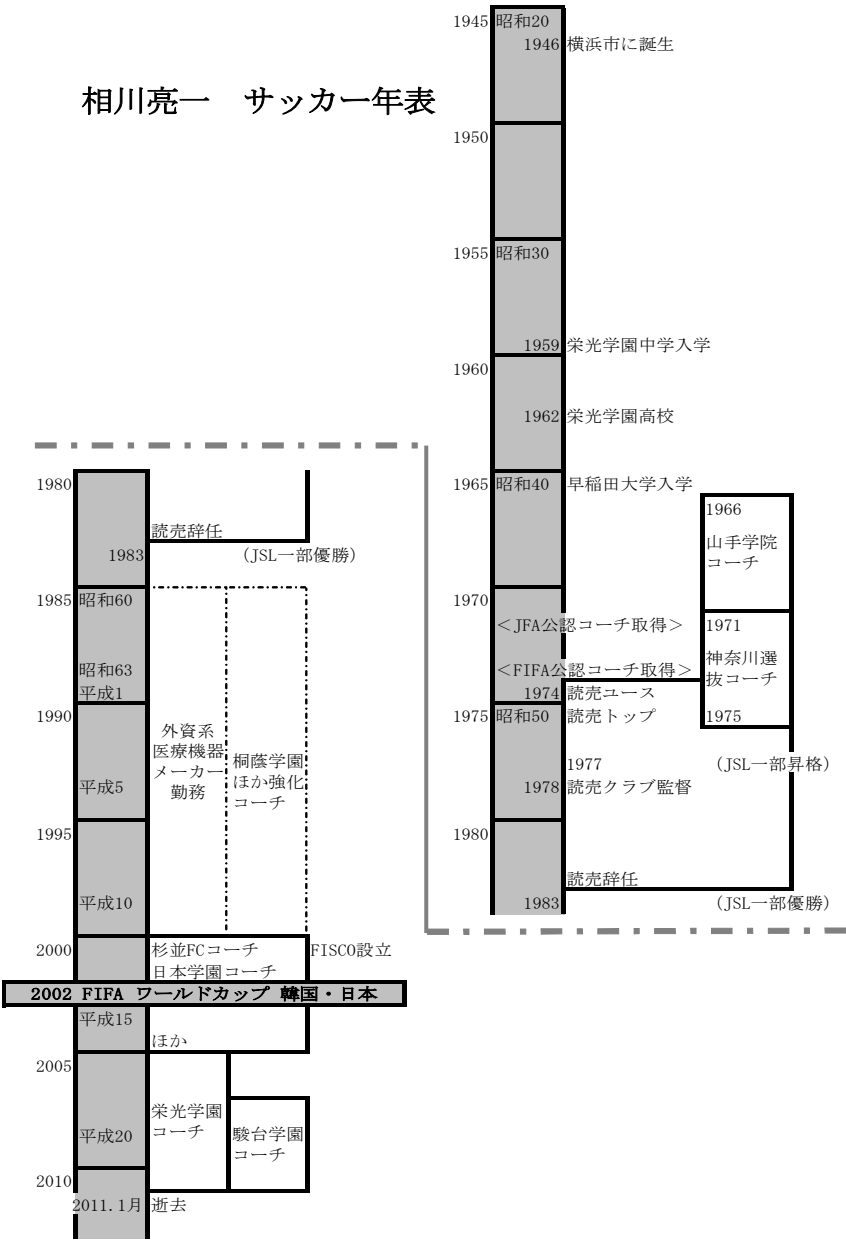
全国高校サッカー選手権を目指し、桐蔭学園、國學院久我山、日本学園、駿台学園などのサッカー部強化に貢献。また就任わずか2年で駿台学園高校を初の関東大会東京予選優勝に導く。

晩年は、フットサル場開設支援およびサッカー指導者を派遣するスポーツ業務営業会社などの設立にも参加する傍ら、数多くの少年チームや中学高校チームの指導にあたる。2005年より母校栄光学園のサッカー部強化にも努めた。

【サッカー履歴】

1946 年	神奈川県横浜市に生まれる
1959 年 - 1965 年	神奈川県私立栄光学園中学／高校
1963 年 - 1967 年	高校 2 年から栄光サッカー部の指導にあたる
1965 年	早稲田大学第 1 政治経済学部政治学科入学
1966 年 - 1971 年	神奈川県私立山手学院サッカー部コーチ
1971 年	JFA 公認コーチングスクール受講 (主任コーチ：平木隆三)
1971 年 - 1975 年	神奈川国体選抜コーチ
1973 年	FIFA 公認 ASIA COACHING SCHOOL (於テヘラン) 受講 (主任コーチ：D. Cramer)
1974 年 -	読売サッカークラブ・ユースコーチ
1975 年 -	読売サッカークラブトップチームコーチ
1977 年	(読売サッカークラブ日本サッカーリーグ 1 部昇格)
1978 年 - 1982 年	読売サッカークラブトップチーム監督
1985 年 - 1995 年	外資系医療機器メーカー勤務
1986 年 - 1996 年	桐蔭学園高校サッカー部ほか強化コーチ
1997 年 - 1999 年	國學院久我山高校強化コーチ、ほか
2000 年	FISCO 創設
2000 年 -	杉並 FC 強化コーチ、 日本学園高校サッカー部強化コーチ、ほか
2002 年 -	ワールドカップの東京開催を機に、数多くのサッカーレポートを執筆。
2005 年 - 2011 年	栄光学園サッカー部強化コーチ
2007 年 - 2010 年	駿台学園サッカー部総監督就任、ほか
2011 年 1 月	永眠 (享年 64 歳)

相川亮一 サッカー年表



別れの言葉

神奈川県サッカー協会 名誉会長
元神奈川県立湘南高校サッカー部監督
鈴木 中

相川君、君と初めての出会いは、四十数年前湘南高校のグラウンドだったと思う。学生服を着てグラウンドの上から練習を見ながら盛んにメモをとっている姿が印象的だった。早稲田の学生だったと思う。

その後話をするようになり、神奈川県の高校生の国体選抜のコーチをお願いするようになり、その中からその後教師の道に進んだ者が何人もおります。小柴、大友、西塚、青木、那須野先生他数名、そして選手として活躍した、植木、早野、尾崎、大友、菅野、都並、戸塚、君らの名前が思い浮かびます。

国体選手にまつわる色々な思い出話も思い出されます。昭和四十六年和歌山国体・四十七年鹿児島国体では監督とコーチとしての楽しかった遠征話、藤沢体育センターでの夏の合宿が思い出されます。

その後イランで行われたクラマーさんのコーチングスクールへの参加。また二〇〇二年ワールド

カッパの時のクラマーさんの講演の通訳等、いつも君の真面目な生き方が思い起こされます。

その後読売クラブでの活躍・桐蔭学園高校の指導、最近では東京の高校での指導、そして母校栄光学園の指導と聞いていました。サッカー界での功績はまだまだ沢山あると思います。

◇ 葬儀の際の弔辞（全文）

Detmar Cramer

Alte Grenzstraße 19
83242 Reit im Winkel - Germany
Telefon 08640/1468

HERRN USHIKI SOKICHIRO

LIEBE FAMILIE, LIEBE FREUNDE UND
LIEBE STUDENTEN VON RYOICHI AIKAWA,

MEIN FREUND "THE COACH AIKAWA - SAN"
WAR EIN GEBORENER "MASTER and LEADER".
TALENT UND FLEIß WAREN SEINE
ÜBERZEUGENDE EIGENSCHAFTEN.
ER ÜBERZEUGTE, WEIL ER ÜBERZEUGT
WAR.

ER BEGEISTERTE, WEIL ER BEGEISTERT
WAR.

ER WAR EIN VORBILD, WEIL SEIN VER-
ANTWORTUNGS GEFÜHL IHN DAZU ANTRIEB.

ER WAR EIN MENSCH - "EDEL, HILFREICH
UND GUT".

DER JAPANISCHE FUßBALLSPORT HAT EINEN
GROSSEN SEINER ZUNFT VERLOREN.

WIR VERBEUGEN UNS VOR

"THE COACH AIKAWA - SAN"

Respect Detmar Cramer



(クラマー氏弔辞 訳)

相川さんのご家族、友人、そして指導を受けたみなさま

私の友人、「ザ・コーチ、アイカワーサン」は、生まれつきの「教育者」であり「リーダー」でした。その資質と勤勉さは、誰もが認める彼の特質でした。

彼は、彼自身が確信しているからこそ、人に確信を与えることができました。

彼は、彼自身が感動していたからこそ、人を感動させることができました。

彼は、強い責任感を持ってことにあたった点で模範的でした。

彼は「高潔で、優しく、良い」人間でした。

日本のサッカーは偉大な仲間を失ったのです。

「ザ・コーチ、アイカワーサン」のために、
深く頭を垂れて、

デットマール・クラマー

Date: Fri, 29 Apr 2011
From: Frans van Balkom
Dear Mr. Ushiki,

I was deeply saddened to hear that Mr. Ryoichi Aikawa passed away.

I remember him as a very good, conscientious young coach who was very eager to learn and his well mannered approach was very much appreciated by me and the players alike. On and off the field he was a very good example for the Yomiuri players and other coaches. He had a well balanced character in comparison with my more aggressive style of coaching which was a great benefit to the team. He was a big help in the development of the young players.

Please give my heartfelt condolences to his family.

If you require any additional information please do not hesitate to contact me.

Greetings in Sports,
Frans van Balkom

(バルコム氏弔文 訳)

相川亮一さんの逝去を知り、深く悲しんでいます。

知り合ったころ、彼は非常に優秀で、まじめな若いコーチでした。

彼は熱心に学び、真摯に取り組みました。その姿勢は、私からもプレーヤーからも高く評価されていました。

フィールド内でも外でも、彼は読売クラブのプレーヤーたちと他のコーチたちにとって非常によい模範でした。

私のコーチングのスタイルは激しすぎるところがありましたが、それに比べて彼はバランスのとれたコーチでした。それがチームの大きな利点となりました。

とくに若いプレーヤーを指導するとき、彼の存在は大きな助けになりました。

心からの哀悼の意をご家族にも、お伝えください。

(もっと詳しい話が必要であれば、遠慮なく連絡してください)

元読売クラブ監督
フランツ・ファン・バルコム

目次

相川亮一 ザ・サッカーコーチ

わかれの言葉

相川亮一 サッカー経歴書

相川亮一 サッカー年表

生れながらの指導者

読売の若いプレーヤーの模範

神奈川県サッカー協会名誉会長 鈴木中

デットマール・クラマー

フランツ・ファン・バルコム

「ザ・サッカーコーチ」の残した業績

二〇年か三〇年早かった

プロサッカーコーチのパーソナリティ

テヘランでの思い出

牛木素吉郎 26

石井義信 38

湯浅健二 46

松本光弘 53

第一部 相川コーチに捧ぐ

一章 栄光学園関係

※一九六〇年代～一九七〇年代(学生時代)、二〇〇〇年～二〇一一年

母校サッカー部コーチ

望月晴文(栄光サッカー部OB会・後援会会長)

60

相川さんのこと

押本俊明(栄光サッカー部後援会幹事長)

64

突然の知らせ

村田譲二(同期)

68

相川君を偲んで

佐藤純一(同期)

70

相川亮一君の思い出

戸田忠澄(同期)

73

相川君との思い出

渡辺幸男(同期)

75

人生を変えたひと言

大住良之

78

相川コーチとの出会い

高橋正明

81

酔狂な師匠、相川さん

高山智

89

サッカーの美しさ

中田守

93

相川コーチの指導

出口尚宏

96

ナイスボール

相川コーチの思い出

柴野明彦(サッカー部部長)

円福寺恭司(サッカー部顧問)

99 102

二章 山手学院関係

※一九六七年～一九七一年(サッカーコーチ人生の黎明期)

相川さんと山手学院サッカー部の思い出

加藤 滋(一期生)

106

相川さんの思い出

小林淳一(二期生)

111

相川さんの思い出

田川 誠(二期生)

113

相川亮一コーチと私

西村 周(二期生)

114

相川さんとともに四十二年

市橋 晶(三期生)

118

相川さん追悼座談会

山手OB会座談会(まとめ 田所俊文三期生)

143

三章 神奈川県サッカー協会関係

※一九七一年～一九七六年（プロサッカーコーチへの志）

鬼才

三村恪一（神奈川県サッカー協会技術委員会委員）

相川亮一君を偲ぶ会（報告）

鈴木 中（神奈川県サッカー協会名誉会長）

無言のアピール

早野宏史（元神奈川県選抜選手）

相川さんの思い出

小柴健司（元神奈川県選抜選手）

相川さんの思い出

八木啓太（元神奈川県選抜選手）

偲ぶ会資料（鈴木 中）

184 180 177 174 171 170

四章 読売クラブ関係

※一九七四～一九八三年（JSLへの挑戦）

読売サッカークラブでの相川亮一氏の功績

竹本一彦（元読売クラブユースコーチ、元ベレーザ監督）

ジョージ与那城インタビュー

（読売クラブ選手・監督 記録 竹本一彦）

201 190

選手としての「男氣」を大事に

加藤 久（元読売クラブ選手） 210

元読売クラブトップチーム座談会

（司会 竹本一彦・田所俊文

出席者 小見幸隆、瑠偉ラモス、戸塚哲也、都並敏史）

相川さんから学んだこと

岡島俊樹（元読売クラブ選手）

別れの言葉

大友正人（元読売クラブ選手）

相川さんが教えてくれたこと

千野 徹（元読売クラブコーチ）

読売U-22座談会

（司会 矢作典史 出席者 寺田幸一郎、斉藤芳行、渡貫大志、足達勇輔）

Dea 相川さん

野田朱美（元読売ベレーザ選手、日テレ・ベレーザ監督）

マラドーナの売込みを断った話

佐藤英男（元読売クラブ職員）

相川さんとの四十二年

竹本一彦

五章 ユース世代関係

※一九八七年〜二〇〇〇年ころ（埋もれたダイヤモンドを求めて）

相川さんを偲んで

澤井光彦（サッカースクールパートナー）

別れの言葉

宗形 弘（サッカースクール受講者）

278 276

265 263 260 241 236 233 229 214

私と相川さん

相川さんに教わったこと

追悼文

相川さんと過ごした四年間

相川さんを偲んで

生涯一コーチ

相川さんとの出会い

李 国秀（元ヴェルディ総監督、元桐蔭学園監督）

藤原英吾（元國學院久我山高校サッカー部監督）

石塚理人（日本学園高校サッカー部監督）

浦田尚希（駿台学園高校サッカー部監督）

武田 淳（埼玉県立福岡高等学校サッカー部顧問）

田中泰子（FC和光キッカーズ代表・監督）

工藤雅彦（FC希望ヶ丘ライオンズ副代表）

301 297 293 291 288 283 280

第二部 相川亮一遺稿集

※ 一九七十年代に始まるプロサッカーコーチの黎明期において「少年サッカー王国」を築くことを夢見た相川は、着実にその夢を追い続けた。後年二〇〇〇年代になってからの寄稿文と比較すると、何十年経ってもその目標がブレていない事がわかる。

一、山手加藤主将への手紙

二、山手コーチ辞任メッセージ

三、神奈川県サッカー協会技術委員会レポート

四、サッカー王国を目指して

五、クラマー講習会レポート

六、YOMIURI WINGS 創刊号（広報誌寄稿文）

七、読売クラブのサッカー ― 総合クラブをめざして ―

（読売クラブヴェルディ四十周年記念誌から転載）二〇〇九年

八、コーチの中のサッカー風土に出会いに行く

栄光サッカー部創立五十周年記念誌 相川寄稿文 二〇〇一年

第三部 付録 相川亮一遺稿集（電子版）

※ 相川は、雑誌寄稿文、ワールドカップ技術レポート、コーチング日誌、など多くの原稿を残したが、あまりにも分量が多くまた独特の難解な表現が随所にあり印刷した紙面では読みにくいため、一部を抜粋し、残りは磁気媒体にして原文資料を多数収録した。

相川亮一「コーチの目」 電子版 目次

編集後記

「ザ・サッカー・コーチ」の残した業績

サッカー・ジャーナリスト

牛木素吉郎

相川亮一は、プロのサッカー・コーチであることを誇りとし、コーチに徹することを生きがいとした。「サッカー・コーチそのもの」だった。

そのThe Soccer Coachが残したものを二つあげてみたい。

一つは、読売サッカークラブのチームを日本のトップレベルに押し上げたことである。

もう一つは、デットマール・クラマーの「コーチ学」を独自の方法で実践したことである。

ほかに、さまざまな仕事を残している。ユース年代のクラブのサッカーの道を切り開いたこと、神奈川県の高校、ユースの指導で実績を残したこと、読売クラブで女子サッカーをはじめたことなどである。そのすべては「クラブのサッカー」と「クラマーのサッカー」の二つのキーワードで括ることができるように思う。

■読売サッカークラブで

読売サッカークラブに入った「いきさつ」は、『クラブ・サッカーの始祖鳥、読売クラブ（ヴェルディの四〇年）』（東京ヴェルディ一九六九フットボールクラブ、二〇一〇年）に相川自身が書き残している。（本書資料の32ページに再録）読売クラブとの出会いは偶然のようであるが、必ずしも偶然とは言えない。

一・プロ・コーチとしてのスタート

よみうりランドにあるグラウンドの真ん中を東京都と神奈川県が走っている。つまり読売クラブは東京のクラブでもあり、神奈川のクラブでもあった。トップチームは創立当初から東京都サッカー協会に登録し、ユース・チームは神奈川県サッカー協会に登録していた。神奈川県の高校・ユースの仕事を引き受けていた相川が読売クラブに現れたのは偶然ではない。

読売クラブは「将来のプロ」をめざしていた。当時は日本体育協会の偏狭な「アマチュア規程」が加盟団体を縛っていて、日本サッカー協会はプロを認めることができない立場にあった。しかし、読売クラブは、その網の目をかいくぐって、実質的にプロ化への道を歩み始めていた。

笹浪永光事務局長は選手やコーチに報酬を支給していた。表向きには名目をつ

け、内部的には公然と規程違反をしていた。当時、日本のサッカーの主流だった大学や実業団（企業）のチームは、そういう読売クラブを苦々しく思っていた。

相川は早稲田大学の学生だったが体育会系の運動部とは関係がなく、大学選手としてアマチュア規程に縛られる立場にはなかった。また、欧州の事情を知っていたから「プロアマ共存」がサッカーの本来の姿であることを知っていた。

したがって、当初は学生アルバイト程度であったにしろ「プロのコーチ」として読売クラブから報酬を受けることに抵抗はなかったに違いない。

神奈川県サッカー協会が、そういうことに理解があった、あるいは無関心であったことにも助けられたかもしれない。

いずれにせよ、読売クラブとの接触は、相川亮一の「プロ・コーチ」としてのスタートだった。

二．ヘッドコーチ就任のいきさつ

そのころ、読売クラブの監督は、オランダ人（国籍はオーストラリア）のフランク・ファン・バルコムだった。相川はその下でユース（高校生年代）を担当していた。

バルコムは、コーチとしての相川の才能を評価していて、辞任するとき後任に

相川を推薦した。

しかし、笹浪事務局長は、すぐには相川を監督にしなかった。理由は二つあっただろう。

一つは、ブラジル出身のジョージ与那城らを含む個性の強いチームをまとめることができるかどうかに不安があつたことである。

もう一つは、当時の日本リーグを構成していた会社チームのなかで、読売クラブは白い目で見られていたので、その風圧を避けられる人物が必要だと考えたことである。

そこで笹浪事務局長は、日本サッカー協会の実力者だった小野卓爾（中央大学監督）に、後任監督の推薦を依頼した。

「小野さんの推薦で松丸貞一さんに監督になつてもらうことにした」

笹浪事務局長がこう電話してきたとき、筆者（牛木）は、びっくり仰天した。

読売クラブの選手たちは「個性が強い」といえば聞こえはいいが、当時の日本サッカーの主流からは「はぐれ者」の集まりのように見られていた。そういう連中を集めてプロ化を目指しているチームにとっては、もつとも不向きな監督のように思ったからである。

松丸は慶応大学出身で、一九三四年極東大会の日本代表選手だった。また、慶

応大学が関東大学リーグで一九三七年から四連覇した黄金時代の監督だった。戦後は日本サッカー協会の常務理事だった。経歴、肩書ともに重みがある。

しかし、そのころは精神力を強調する話をすることが多かった。また慶応ではダイレクトパスをつなぐ組織のサッカーを指導したと聞いていた。読売クラブには個人技にこだわる選手が多く、そのテクニックを生かさなければならぬから松丸監督が適任だとは思えなかった。また協会常務理事としては審判担当で技術の現場からは離れていた。名門慶応大学の長老ではあるが、日本リーグの運営をしている戦後派の慶応OBとは世代が離れていて、影響力が大きいとも思えなかった。

筆者（牛木）は、松丸監督案に反対し、相川コーチとコンビを組むのに適当な監督を求めることを提案した。

松丸さんは監督に就任するつもりで、そのころすでに「よみうりランド」に様子を見にきていたらしい。そのことを後になって知った。松丸さんの人柄の良さを知っているのです、個人的には、まことに申し訳ない気持ちである。

三・西邑監督とのコンビで一部昇格
代わりの監督候補として西邑（にしむら）昌一を推薦し、一九七六年から西邑

監督、相川ヘッドコーチのコンビが実現した。

西邑監督を推薦した理由は、いくつもあった。

ベルリン・オリンピックの代表チームのメンバーだった経歴の重み、

関西学院の監督として、テクニク重視のチームで優勝した実績、

関学と早大の二つの大学出身で関東と関西の両方に顔があること、

などである。

関西在住だったので「ときどき、東京へ出てきてアドバイスしてくれるだけでいいから」と話をして引き受けてもらった。

サッカーについての自分の考えを、しっかり持っているが、それを無理やり押し付けてチーム作りをするような指導者ではなかった。選手たちの特徴と相川コーチの立場を理解したうえで適切な指導ができる人柄だった。

結果として、西邑監督を引つ張り出したのは大成功だった。

「ときどきでいい」と頼んだのだが、毎週末に東京に出てきてグラウンドに出た。

しかし、練習も選手起用も相川コーチに任せていた。相川が一人一人の選手の特徴と自主性を生かして試合に臨むのを黙って見ていた。相川は「今から思うと西邑さんなりにやりたいことがあったかと思う」と言っている。だが、相川コー

チの基本的なやり方に口は出さなかった。

そのために「監督としては、なにもしなかった」という当時の選手もいる。だが、ベンチで観察できる立場にいた人は「試合運びについて適切なアドバイスを相川コーチにしていた」と証言する。ハーフタイムのアドバイスで戦況が一変したこともあるという。

西邑監督の豊富な実戦経験が、相川コーチの持たないものを補った。

西邑ー相川のコンビで読売クラブは、日本リーグの二部から一部へ昇格し、日本のトップへの道を登り始めた。西邑監督が辞任したあと一九七九年に相川が監督に昇格した。

公式に監督として在任した期間は四シーズンだが、実質的には西邑監督の時代も含めて七シーズン、読売クラブの指揮をとった。

西邑監督の協力と相川コーチの業績は、ともに評価しなければならない。

■クラマーの弟子として

相川亮一は「クラマーの弟子」を自任していた。いま、彼の業績を振り返ってみると、まさに、彼は「クラマーの弟子」だったことが分かる。

相川亮一は、二つの意味でクラマーの弟子だった。

一・クラマーのコーチ学を実践

第一に「コーチ」として、クラマーが教えた考え方と指導法を実践した。それによって主として神奈川と読売サッカークラブで若い素材を育てた。

デットマール・クラマーは、一九六〇年代に、日本のサッカーを指導したコーチである。一九六四年の東京オリンピックを控えて日本代表チーム強化のために日本サッカー協会が招請し、当時の西ドイツ・サッカー協会から派遣された。

クラマーはオリンピック・チームのレベルアップを日本での自分の使命として来日した。その仕事は、東京オリンピックでのアルゼンチンからの勝利と一九六八年メキシコ・オリンピック銅メダルになって実った。

しかし、クラマーの最大の功績は、日本のサッカーを全面的に、根本から改革したことにある。

その一つが、コーチが指導する方法、いわば「コーチ学」を教えたことである。

そのころの日本のサッカーは世界のレベルから大きく遅れていたので、トップの代表選手を指導するだけでは、大きな進歩は望めなかった。

そのために、技術や戦術を直接指導するだけでなく、コーチが指導する方法、いわば「コーチ学」を教える必要があった。それまでの日本では考えられていな

かったことだった。

クラマーの「コーチ学」は協会のコーチング・コース（講習会）を通じて、あるいは協会の機関誌や専門誌を通じて、たちまちのうちに全国に広まった。

しかし、多くの理解は「表面的」だった。たとえば、正確にパスをつなぐためにクラマーがインサイドキックを指導すると、インサイドキックの重要性だけが強調された。

相川亮一の理解は、そうではなかった。サッカーがボールを扱うスポーツであり、ボールをつなぐスポーツであり、相手のゴールを陥れ味方のゴールを守るスポーツであることを知り、それを実現するための実際的な方法としてクラマーの「コーチ学」を実践した。

クラマーの「コーチ学」の本質を理解した実践であるということもできるし、クラマーの「コーチ学」を超えた指導だったということもできる。

それによって、神奈川からも、読売クラブからも、多くのすぐれたプレイヤーを送り出すことができた。

二、サッカーの構造改革

クラマーの業績を詳細に取材した中条一雄の『デットマール・クラマー、日本

サッカー改革論』（ベースボール・マガジン社、二〇〇八年）を読めば、クラマー自身はオリンピック・チームの強化を自分の業績として第一に評価していることが分かる。

しかし、クラマーが日本に残した業績としては「日本サッカーの構造改革」の提案のほうが、より重要だと思う。

一九六四年の東京オリンピックが終わったあと、クラマーは日本を去るにあたって「日本のサッカーのための提言」を残した。それは「日本サッカーの構造改革」の提案だった。その重要な考え方の一つは「クラブ組織」である。

単一の企業の会社員による「実業団チーム」と、単一の大学の学生だけによる「大学チーム」が、当時の日本サッカーの中心だった。クラマーは、社員や学生という「身分」を超えたチーム、あるいは大学生や社会人という「年齢」を超えたチームの在り方を紹介した。それは欧米ではふつうの「クラブ」のサッカーである。

クラマー構造改革のもう一つの重要な柱は「リーグ組織」である。

そのころ、日本のトップレベルを支えていたのは、実業団（企業）チームと大学チームだった。この二つが、それぞれ別のグループで試合をしていた。「高いレベル同士の試合ができないのは不合理」というのがクラマーの考えだった。

また、そのころの大会は短期（一週間程度）の勝ち抜きトーナメントが中心

だった。「一回戦で負けたチームは一試合しかチャンスないのは不合理」というのがクラマーの主張だった。

簡潔に言えば「同じレベルのチームによる、リーグ戦（総当たり）方式の導入」がクラマー改革の考え方の基本だった。

相川は、この考えを読売クラブと神奈川のユースで実行しようと考えた。

一つは、クラブユース全国大会の開催である。

一七歳以下のチームの全国大会として高校チームの大会はある。しかし、読売クラブのユース・チームは、同じ年代だが参加することのできる大会がない。そうであれば、クラブユースの大会を自力で作ろうと考えて実行した。

リーグ組織については、神奈川で、高校とクラブユースによるリーグ戦を考えた。多くのチームが、日常的に試合ができるシステムである。

どちらも、クラマーの「構造改革」を、自分の足元の実情に合わせて実行したことである。技術や戦術だけでなく、サッカー組織の構造改革を実行したところに相川の「クラマーの弟子」としての優れたところがある。



相川亮一の仕事は、関係者以外にはあまり知られていない。当時は、それほど評価もされていなかったように思われる。

一九八〇年代までは、日本のサッカーを動かしていたのは、主として伝統のある大学サッカーの出身の元名選手だったから、大学体育会系サッカー部の出身でなく、名選手でもなかった相川の仕事を、日本サッカーの主流は認められなかったのではないだろうか？

プロのサッカー・コーチとして、相川の生きる道は、学校や会社のチームにはなかった。「クラブ」として創設された「読売クラブ」にしかなかった。

そのころ、読売クラブは「反主流」であり、相川亮一も「反主流」だった。

二〇年か三〇年早かった

元フジタ監督、元日本代表監督

FC東京アドバイザー

石井義信

私は一九七五年から八〇年まで日本サッカーリーグ（JSL）一部のフジタで監督を務め、八一年から八五年まではJSLの常任運営委員という立場だった。名目上の監督は関西在住の西邑昌一さんだったものの、実質的には七六年から読売サッカークラブの監督となり、七八年の一部昇格を経て八二年のシーズンまで指揮をとった相川くんとは、「ライバル監督」という立場だったことになる。

私の在任中、フジタは七七年と七九年にJSLで優勝を果たした。七七年はブラジル人コンビのマリーニョとカルバリオを軸に一八試合で六四得点（JSL記録）という破壊的な得点力で勝ったが、読売クラブが一部に昇格し、力をつけてきた七九年の優勝は、よりバランスの取れたチームにできていなければ達成されなかっただろう。それほど読売クラブの成長は急激だった。

当時の読売クラブには、個人的な能力が高く、理屈では抑えられない選手がたくさんいた。そうした選手がひとりなら抑えるのは可能だ。しかし何人もいると

非常にやっかいだ。ジョージ与那城、ラモス、ジャイロ、小見幸隆、岡島俊樹、橋本好章、戸塚哲也…。それぞれの選手の育ち方もさまざまで、本当にやりにくかった。たしかこの年、読売クラブはJSLカップを取ったと思う。

外から見ていて、こうした選手を使って戦ってみたいという思いがあるのと同じ時に、「読売クラブの監督だけは絶対にやりたくない」とも考えていた。個性的な選手たちは、監督にとって頼りになるとともに、非常に難しい存在でもあるからだ。

当時のフジタにもうるさい選手はいた。今井敬三、古前田充、マリーニョ、カルバリオ…。それぞれの「サッカー哲学」といったものをもっていて実力もあつたから、戦術などについて遠慮することなく意見を言ってきた。それをなんとか説得してプレーさせることが監督としての私の仕事でもあった。

ところが読売クラブの場合、うるさい選手がフジタ以上にたくさんいて、しかも大学まで学校でサッカーをやっていた選手などほとんどいない状況だったから「体育会」的な上下関係もなく、その大変さは、私など想像できないほどだったに違いない。そんなチームを実質的に七シーズンも率いてきたという事実だけでサッカーコーチとしての相川くんの力は十二分に証明されるに違いない。

JSLを中心とする当時の日本サッカーのトップクラスの監督たちは、Jリーグ時代の今日とはまったく違っていた。ライセンス制度などなく、選手を引退した人が指導者になり、監督となるのが普通だったからだ。そういう形であれば、サッカーコーチとしての説得力とは、選手時代の実績とほとんどイコールになる。日本代表、オリンピック出場……。そのなかで相川くんはまったく異質だった。

相川くんが正式に読売クラブの監督として登録された七九年の他チームの監督の顔ぶれを見てみよう。

三菱は横山謙三。立教大卒で、東京、メキシコ両五輪の正GK。古河は鎌田光夫。中央大卒で、これも東京、メキシコの両五輪に出場、スイーパーとして活躍した。ヤンマーは釜本邦茂。早稲田大卒、東京、メキシコの両五輪に出場し、メキシコでは得点王。東洋工業は小城得達。中央大卒で、これも東京・メキシコ両五輪で中心的存在だった。日立は野村六彦。中央大卒で、五輪出場経験はないが代表歴はあり、第一回JSL（六五年）の得点王。新日鉄は宮本輝紀。これは大卒ではなかったが、東京とメキシコの両五輪で活躍している。日本鋼管は上田稔。代表歴はないが、京都の山城高校から関大とサッカーの名門でプレーし、鋼管でも守備の中心としてJSLで長く活躍した人。日産が加茂周。代表歴はないが、

名門関学卒で、ヤンマーに在籍し、初期のJSLでプレーした。そしてフジタが私。大卒ではなく、東洋工業に在籍し、初期のJSLで3シーズンプレーして引退した。ただ、代表には選ばれたことがある。

このなかで少し異質だったのは、加茂と私だっただろう。加茂は「選手として実績はなくても、コーチとして日本一になりたい」という強い気持ちをもっていた。私には「体育会」的な先輩後輩の人間関係の意識が薄く、「全方位」で人づきあいができる立場だった。東洋工業のサッカー部から引退した後、藤和不動産から熱心に誘われて新しくつくられたサッカー部のコーチに就任した（その藤和不動産が後にフジタとなる）。加茂もヤンマーから日産に移ったが、当時としては非常に珍しい例だった。当時の日本サッカーの「主流」からすれば、加茂や私は、後の相川くんのように見えただけに違いない。

それにしても相川くんの「異質」ぶりは群を抜いていた。もちろんプレー歴はあり、高校選手権にも出場したというが、JSLはおろか、現在とは比較にならないほど重視されていた大学リーグでのプレー経験もない。デットマール・クラマーさんから直接指導を受けたFIFAコーチングコースでの経験と、自らの勉強、研究だけで日本のトップクラスのリーグに挑んだのだから。

私が「面倒なチーム」の監督を退き、JSLの常任運営委員になって一年目の八一年、フジタと読売クラブが優勝をかけて最終節で対戦するということがあった。会場は名古屋の瑞穂球技場。勝ち点差2でフジタがリードしていたが、得失点差はフジタが+17で読売クラブが+16。総得点は読売クラブが圧倒的にリードしていた。読売クラブは1点差でも勝てば逆転優勝という、相川くん時代の読売クラブが最も優勝に迫ったシーズンだった。

力としても、読売クラブが優勝しておかしくなかった。しかし相川くんと読売クラブにとっては運もなかったのだろう。フジタが全員守備でかろうじて0対0の引き分けに持ち込み、三回目の優勝を飾った。

現在のJリーグの監督で相川くんとイメージが重なるのは、大宮アルディージャ、コンサドーレ札幌、ヴィッセル神戸などの監督を歴任し、二〇一一年にはヴァンフォーレ甲府を率いている三浦俊也くんだ。三浦くんも選手としての経歴は相川くん程度で、ドイツで勉強し、Jリーグでも理論家として知られる監督となった。

しかし一九八〇年代はじめの日本のサッカー界には、相川くんや現在の三浦くんのような「異質」を仲間として受け入れる空気はなかった。JSLの監督会議

では、たとえば釜本が話し始めると、誰も異論をはさむことなどなかった。そこには体育会的な上下関係が厳然と存在していた。相川くんが監督会議に出ても、他の監督たちはほとんど無視していたように思う。

現在、三浦くんが活躍しているのを見ると、相川くんは二〇年か三〇年早かったと思えてならない。いまなら、彼の能力がトップクラスのチームの指導でもっともつと生かされたのではないかと思う。メディアとはしよっちゅう対立したかもしれないが…。

八二年のシーズンが終わったころ、読売サッカークラブのリーグ運営委員をされていた下条英夫さんという人から電話をもらった。当時の私は七人のJSL常任運営委員のひとりとして、中立の立場にあった。

「うちの相川がサッカー界の人とつきあわず、孤立した状況になっている。いちど話をしてやってくれませんか」

そんな内容だった。もちろん快諾した。

下条さんに連れられて、相川くんが千駄ヶ谷のフジタ本社にやってきたのは、八二年の暮れのころだったと思う。

そのとき何を話したのか、あまり覚えていない。釜本など気にせずに、気楽に

話したほうがいいなどとアドバイスなどをしたかもしれない。

当時、監督会議があると、相川くんはかならずトレーニング姿のままやってきた。それがプロコーチとしての「仕事着」で、指導現場から会議の時間に間に合うよう飛んできたのだろうが、他のチームの監督たちは（大半がサラリーマンなのだから当然だった）、当然のように背広、ネクタイ姿で、相川くんは服装でも異質だった。

「服装なんてどうでもいいことだけど、みんながそうしているなら、同じようにしてみたらどうだろう」

そんな話をしたことだけは、不思議によく覚えている。

「できるだけ努力して、とけ込むようにします」

言葉少なに話を聞いていた相川くんは、最後にとつとつとそう語った。だが新しいシーズンが始まる前に監督を辞任した。

グラウンドで何度もライバルとして対戦し、間違いなく才能あるコーチだった相川くんと会ったのは、このとき、八二年暮れ、フジタ本社の応接室が最後だった。だから相川くんについては「若い」というイメージしかなく、六四歳だったということを知って愕然とした。

心からご冥福を祈ります。

◇石井義信（いしい・よしのぶ）

一九三九年三月一三日生まれ、広島県福山市出身。県立福山葦陽高校から一九五七年に東洋工業に入社、サッカー部で活動。一九六二年に日本代表に選ばれ、A代表一試合。六五年に始まった日本サッカーリーグでは六七年までプレー、MFとして三年連続優勝に貢献。引退後、六八年に藤和不動産（後のフジタ）にコーチ兼選手として移籍、七五年に監督となる。七七年、七九年に日本リーグ優勝、八一年から八五年までは日本リーグの常任運営委員、八六年～八七年にかけて日本代表監督。ソウルオリンピック予選では最終予選にまで進んだ。二〇〇一年以来F C東京のアドバイザーを務め、二〇〇四年から二〇〇八年まで日本サッカー協会技術委員も務める。

アイカワは、日本人としては変わっている方なのか？

元読売サッカークラブコーチ、
神奈川県立湘南高校卒業生
プロサッカーコーチ
湯浅健二

「まあ・・・見方にもありますが、たしかに、日本的な枠組みからは、ちよつとはみ出した。パーソナリティーと言えるかもしれないですね・・・」

何年か前、ドイツのフライブルクで行われたサッカーコーチ国際会議でのこと。ドイツ（プロ）サッカーコーチ連盟が主催し、毎年七月に行われる世界規模の情報交流イヴェントである。私も毎回招かれているのだが、そのときは、デットマール・クラマーも出席していた。

久しぶりの再会。インタビューも兼ねてホテルの部屋を尋ね、サッカー談義に花を咲かせた。そこで、冒頭のように、相川亮一さんも話題のテーブルにのつたというわけだ。

「アイカワのパーソナリティーは、とても優れていると思う。彼とは、私がインストラクターを務めたイランでのFIFAコーチングスクールで初めて会ったのだが、常に進歩のヒントを探しつづける積極的な姿勢に感銘を受けたことを覚えていいる。とにかくチャンスがあったら、どんどん質問をぶつけてくるんだよ。その質問は、おしなべて高度なモノだった。こちらは、質問の内容や、そのしゃべり方などで相手を判断するわけだが、明らかに彼はトップレベルだったな。また一人の受講生として周りの仲間をうまくまとめるなど、オレの仕事を助けてくれもした。懐かしいな・・・」

そのFIFAコーチングスクールのことは、私も相川さんから聞いていた。

「オレは、クラーマーから、コーチとしてのパーソナリティーの重要性を学んだと思う。人を引っ張っていくチカラ・・・まあ、リーダーシップともいえるかな。一度こんなことがあった。食堂でのことだけれど、受講生全員がそろってランチを取っていたとき、クラーマーが連絡事項を伝えるために食堂ホールに入ってきた。そのときのことだ。まあ皆が、あれは変なヤツだよな・・・なんて感じ

ていたある受講生が、雑談を止めなかったんだよ」

そこで一度、懐かしく思い出すように言葉を切った相川さんがつづけた。「そのときだった。まさにカミナリのような大声がホールに響きわたったんだ。『シャット・アップッ!!』ってね。もちろんクラーマーがブチかましたわけだけれど、その後が素晴らしかったんだ。次の瞬間には、何事もなかったかのように、例の低い声で、それもゆつくりと、連絡事項を伝え、スタスタとホールから出ていったんだよ。いや、ホント、いま思い出しても爽快な体感だったね」

もちろんサッカーの戦術やコーチングの学習がメインだったとはいえ、相川さんは、そんな「成文のコンテンツ」とは全く次元の違う「心理マネージメント」の根源的なファクターをも、しっかりと感じ取っていたということだろう。そうサッカーコーチとしての優れたパーソナリティー。

私が、ドイツプロサッカーコーチ養成コースで勉強していたときもそうだった。

「成文」の方は、そこそこに、「時間外」で交わされる元プロ選手や現役プロコーチ連中との様々なタイプのディベートこそが、私にとって、かけがえのない学習機会だった。そう・・・「行間」の情報収集。

コーチングスクールは単なる「形式的な機会」にしか過ぎない。そこでは、自分主体の（本物の）学習能力が問われる。積極的に考えつづけ、勇気をもつて決断し、実行していくチカラこそが問われるのだ。私は、そのことを相川さんから学んだと思う。

相川さんと初めて会ったのは、忘れもしない、横浜の「国際スポーツ」を尋ねたときのことだった。私の湘南高校時代の恩師、鈴木中先生から紹介された。早稲田大学の政経学部というエリートコースを卒業した相川さん。でも、そんな学歴にこだわることなく、すぐに、自分はプロコーチになると宣言し、（日本的に言う！？）ヤクザの道を突き進んだ。そんな彼は、当時の私の目にも、とても魅力的なパーソナリティーとして映った。

彼とは、色々なテーマのディスカッションを交わしたことを覚えているが（実際には、様々なテーマをブチかまされ、いつも深く考えさせられていた！？）、それら全てのテーマに共通していたのは、型にはまらない・型にはめられない・というフィロソフィーだったように思う。そう、サッカーコーチとしての独立性、独自性・・。

その後わたしは、ドイツへサッカー留学し、深い、深いカルチャーショックを受けつづけたわけだが、そこで初めて、相川さんが言っていた「自分が囚われている枠組みから解放される」ということの重要性を体感しはじめたと思う。

私が、ドイツの国家試験に合格し、ドイツサッカー協会公認のプロサッカーコーチライセンスを取得したのは一九八一年のこと。とはいっても、当時の日本にプロコーチとしての仕事などあるはずがない。そんな折、ドイツ語の技術翻訳などで細々と生計を立てていた私に、相川さんが声を掛けてくれた。読売サッカークラブのコーチの職を紹介してくれたのだ。

最初はサテライトチームの監督からはじまった。その後ユースチームも受け持ち、最終的には、トップチームの監督に招聘されたドイツ人プロコーチ、ルディー・グーテンドルフのアシスタントとして一九八六年まで読売サッカークラブに在籍した。

その間、私を読売サッカークラブに引っ張ってくれた相川さんは、トップチームの監督を辞し、クラブを去った。とても潔い態度だった。そんな、プロの仕事人（相川亮一の美学！？）としての基本的な生き様があったからこそ、保守的な日本サッカー界から見れば「はぐれ者」が多かった当時の選手たちを、「正しいプロの方向」へドライブできたのだと思う。

日本サッカーを世界トップクラスへ脱皮させるという大志半ばにして読売サッカークラブを去った相川亮一さん。そのことで、目的を成就させるプロセスが少し後退することになったわけだけれど、それでも、彼の為した「仕事」が、「J」開幕当初にプロ集団として抜群の存在感を発揮したヴェルディ川崎の重要な礎になったことは確かな事実だった。

たしかに、オフィシャルなカタチで日本サッカー（協会！？）史に刻み込まれることはなかった相川亮一さんだが、実質的に日本サッカーの発展を支えている（支えていた）人々は知っている。彼が日本サッカーに残した素晴らしい功績の内実を知っている。それは、確実に、後世に正しいカタチで伝わっていくはずだ。

いま考え直してみると、私が相川さんから学んだことのなかで最も重要だったものは、『創造的な破壊』というフィロソフィーだったと思う。次のターゲットイメージがしっかりしているからこそその「創造的な破壊」。その底流には、理想マイナス現状イコール課題・・という、進化を支える絶対的な「構図式」がある。

そんなことを考えながら、相川亮一さんに関わった、楽しくも厳しい日々思いを馳せていた。

相川亮一さんのご冥福を祈るとともに、改めて、彼に対する心からの謝意を表したい。

合掌・・

テヘランでの思い出

(財)日本サッカー協会 参与
筑波大学名誉教授 平成国際大学特任教授
松本光弘

今日は二〇一一年五月二〇日 日曜日 朝四時四五分。朝日が輝き始め、木々は柔らかい新緑をそよ風に揺られながら心地よさそうに空気を腹いっぱい吸い込んでいるように感じられます。私は去る四月二十一日で満七〇歳となりました。只今の私は多くの課題に関わらざるを得なく、忙殺されています。このような中で青春の真っ只中で出会った相川亮一氏の「思い出ばなし」を記すことにいささか戸惑っています。兄の会社の清算手続き、息子家族と嫁の実家家族の福島原発二〇キロ圏内からの避難、大地震による義母の福島からつくばへの移住そして入院介護施設入所、新大学設置申請、定年最後の平成国際大学での授業等々時間がいくらかあっても足りません。しかし二三歳から始まったサッカー指導の忙しさと困難さに比べればまだまだやりようはあるように思えます。

そのサッカー指導の原点となるサッカーに対する考え方の集大成ともなったテ

ヘランでの第三回FIFAアジアコーチングスクール。そこでの相川氏との三ヶ月は半端ではありませんでした。二人とも「徹底する」性格なのかも知れません。まさしく一日一日を積み上げていく、そんな三ヶ月の合宿生活でした。

相川氏との最初の出会いはこのコーチングスクール参加のため羽田空港に行ったときでした。今では日本サッカー界の多くの方々と同様顔見知りになっていますが当時はまだ選手生活を終えたばかり、その上私は東京教育大学の監督から福島大学教育学部に転任してそうあまり時間は経っていませんでした。「相川亮一」、はじめて聞く名前であり、どのような経歴の持ち主かも全然分かりませんでした。

今になって思い返すと中央大学と筑波大学の定期戦で毎年お会いしていた三村格様、私達東京教育大学の先輩鈴木中先生などの強烈な後押しでこのテヘランの第三回FIFAコーチングスクール参加を果たしたことが理解できます。

その当時はこのような国際舞台の行事に推薦されるには日本サッカー界で多少なりとも活躍した実績が必要でした。当の私がこのコーチングスクールに推薦されるに値する実績を有していたか定かではありませんが少なくとも選手としては関東大学サッカーリーグ、全国社会人サッカー大会等の出場、指導者としては東

京教育大学蹴球部監督の経験がありました。

それに比べ相川氏は早稲田大学出身とまでは分かっていたがサッカーで活躍したとはあまり聞いていませんでした。また彼自身も当時自分のことはあまり語りませんでした。

しかし、いざテヘランに到着し、活動を開始するとその食欲ともいえる学習意欲でいつでも、どこにでも出没し、何でも吸収してやろうという積極さは目を見張るものがありました。

二人は同じ部屋で三ヶ月の合宿生活をしたのですが、私達の部屋はどちらも居ない、あるいはどちらかが居ない、この二つの状況がほとんどでした。両人とも好奇心旺盛、活動力満点、他人にあまり干渉しない性格等々の原因からか互いに認めながらもあまり深入りしないという暗黙の了解が今思うとできていたように感じられます。

このテヘランでのコーチングスクールを終え、私は日本サッカー協会の指導者養成のインストラクターとして中央に関わり、相川氏は神奈川県を中心とした活動を経て読売サッカークラブの中枢に入り、クラブ発展の起爆剤として日本サッ

カー発展に大きな貢献をしました。独特のキャラクターで、先輩や同僚に話す話し方とは全く違った話し方で選手に接する彼の姿が今も印象に残ります。

相川氏が読売クラブでの活動を終え、次に彼の指導実績に出会ったのは私が筑波大学に転任してから続いている獨協大学の非常勤講師の授業のときでした。あの年の新年度が始まって間もなくのサッカーの実技の授業中、えらくボール扱いがうまく、その上独創的なプレイをする学生がいました。

その学生に出身高校を尋ねたところ東京北区にある私立の高校の名前をいいました。先生は誰と尋ねたところ相川亮一氏の名前が出てきました。やはり彼の教え方は独特でこのように教え子のプレイを見ただけで彼の姿が思い出せるそんな気がしたのが今から十年ほど前のことでした。

その学生がいうには、相川コーチは身体を悪くしてあまり無理ができないことも私はそのとき聞きました。心の中で心配しながらも会う機会も無く時間が経ってしまいました。

そうこうする内に私の東京教育選手当時の監督で順天堂大学サッカー部の監督

部長を歴任されました故小宮義久先生のお別れ会の席上、ばったり相川氏に会うことができました。その時久しぶりにいろいろ話をし、身体の具合等も尋ねました。

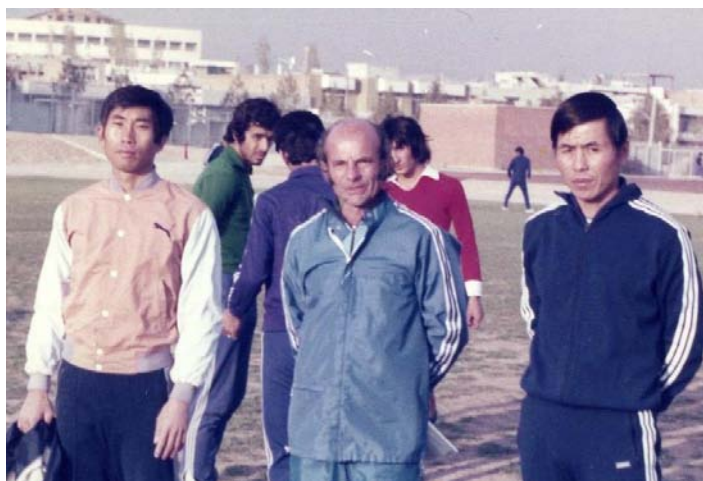
あれから三年、相川氏は六〇歳半ばにして逝ってしまいました。

私の彼に対する率直な感想は「もっと日本サッカーの中心に出てきて良かったのではないですか！！」という思いです。

いつも控えめで、無口で、ユニークな角度からのものの見方、そして本質を逃さない。私が会った多くの仲間の中でも大変興味深い人物でした。彼の年では早すぎる永遠の別れ、お母様の姿が気になります。

ご冥福をお祈りいたします。

◇ 松本光弘氏は一九七三年にテヘラン（イラン）で開催された第三回 F I F A アジアコーチングスクールでのルームメイト。



1973年 テヘラン FIFA アジア コーチング スクールにて
(左から:相川、クラマー、松本)



1973年 テヘラン 同期生と相川(左)

第一部 相川コーチに捧ぐ

一章 栄光学園関係

※ 一九六〇年代 ～ 一九七〇年代

サッカーコーチへの志を立てた頃

※ 二〇〇〇年 ～ 二〇一一年（没年）

1945	昭和20	
	1946	横浜市に誕生
1950		
1955	昭和30	
	1959	栄光学園中学入学
1960		
	1962	栄光学園高校
1965	昭和40	早稲田大学入学

相川亮一は、神奈川県私立栄光学園中学に入学し、サッカー部へ入部。WMのレフトハーフとして活躍。神奈川県大会優勝。高校の新人戦優勝。高二的関東大会に出場し一回戦で敗退するも、最後の全国高校サッカー選手権大会への出場を果たした。

早稲田大学第一政経学部に進学し、当時新設された山手学院サッカー部のコーチとなる。これが以来四十年以上にもわたる相川のサッカーコーチ人生の始まりとなる。晩年は母校栄光サッカー部のコーチとして回帰。

母校サッカー部コーチ

栄光学園サッカー部OB会・後援会会長

栄光学園サッカー部十六期

望月晴文

二〇〇二年に栄光サッカー部が創立五〇周年の記念すべき日を迎えた。サッカー部OB会有志を中心として記念の本を刊行した。関係者は大変な苦労であったが若き日の熱い想いが蘇るには十分な刺激がそこにはあった。

そのころから五十代以上のシニアOBの中で、かつて神奈川県の高豪チームの一つでもあった母校のサッカーチームが、時代の流れの中で、県の地区予選も勝ち抜けなくなっている状況を何とか打開させたいという議論が始まった。

特に熱心にOBが支援する必要性を説いたのが十七期生の押本君であった。押本君を中心に幾人ものOBと機会を見つけては議論をした。時には学校の先生たちを交えて。その心は、「俺たちは今考えても熱い思いを持って、限られた時間ではあったが、全身全霊でサッカーに打ち込んでいたのではないか？ 人生におけるそれはそれは貴重なものを得ることができたのではないか？」という思いであった。いつしか志をともしにするものがボランティアで後援会を作ることになっ

た。

そして、その輪の中の特別なところにいたのが十三期生の相川さんであった。一九六〇年東京オリンピックを控えた日本代表を指導するため、コーチとして招聘された「日本サッカーの父」と呼ばれるデッドマール・クラマー氏に師事し、日本を代表するクラブチームを教え、長い間プロのコーチとして活躍、大きな実績のある相川さん。我々の議論が始まるころから、先んじてボランティアベースでコーチを始めてくれた。

二〇〇五年五月二十二日、長い堂々巡りのような議論を乗り越え後援会設立総会の日を迎えた。参加者のコンセンサスは、「もちろん強いチームを作りたい。そのために努力をする若者を鼓舞したい。そのためには技術や戦術を正しく学ばせたい。その環境づくりをしたい。」であったと思う。

我々の構想の中心軸は、初めから終わりまで相川さんであった。世界のサッカーを知り、若者を教えるすべを知り、そして栄光学園という進学校で部活動サッカーをする意味を知っている相川亮一という人に我々の想いを託すしかなかったし、それがベストな策だと我々みんなが知っていた。

後援会の活動は発足こそしたものの、口で言うほど簡単ではなかった。二〇〇

人ほどの会員を集めキチンと集金すれば回ると思ったものの、会議をするたびに会員増加キャンペーンと相川さんにまともなコーチ料は払えないという報告が続いた。そんなことはお構いなしに、ボランティア的コーチは続いた。

二〇〇八年一月、新人戦湘南地区予選を勝ち抜き、久々に本大会に出られることになった。それは後援会活動開始以来の朗報となった。その後、成果は一進一退のものとなっている。部活のサッカーは毎年毎年メンバーも変わり、本当に定着するためにはチームの中に良いものが蓄積していくかということであり一朝一夕には本当の成果と言えるものとはならないということかもしれない。

相川さんはそんなことを含めて、もつとも冷静に、淡々と受け止め、指導に通ってくれた。時には鋭く刺すような一言を発し、時には熱く精神論を若者に語っていた。

彼が逝ってしまったいま、もはや尋ねることはかなわないが、いったいなぜプロコーチとして最先端のチームで教えていた彼が、時間を割いて大船に通ってくれたのかという疑問が残る。

我々、母校を離れて何十年もたち、ある日人生を振り返り、あの田浦や大船のグラウンドに置き忘れてきた何かを思い出し訪ねる。そこで球を蹴っている若者

に、かつてと同じような熱い思いを見てみたい。そんな気持ちの共有が、後援会活動の原点であるような気がする。

ただそれは我々の場合である。相川亮一という人はサッカー漬けの人生を一心に走ってきた人である。彼が何故、いまやサッカーのローカルのチームをあれほどまでに熱心に情熱をこめて指導したのか。

もはや、もう問うことはできない。彼が大学生の頃、頻繁に栄光に来て後輩を教えていたことを思うと、もしかしたら最初に作った作品のその後の修繕をしたという気持ちに駆られたのかもしれないと私は思う。

追伸：後援会活動は相川コーチの情熱を胸に新しい発想で再出発します。

相川さんのこと

栄光学園サッカー部後援会幹事長
栄光学園サッカー部十七期
押本俊明

初めて会ったのは昭和三十八年の九月だった。

僕らが中一で彼が高二、十三歳と十七歳のことだった。場所は田浦の高校の教室。

「十三期のアイカリーヨイチ、君らの指導をする」と教壇の上で短く言っ
こっちはついさつき先輩部員の前でしどろもどろの自己紹介が終わったばかりで
まだ制服にトレパン姿なのに「さっそくだがボールの蹴り方を教える」と始まっ
た。「基本はインステップキックといって足の甲で蹴る。立ち足は最後の一步を
大きくしてボールの真横にこのように踏み込む。もつとも俺らは「蹴り慣れ」し
てるから実際はもう少し浅いけどな」と、アレヨアレヨのうちに師弟関係がス
タートした。

キツネ目で細身、ほんとに栄光生？と疑うような不良っぽさを臭わせて、それ
でも音に聞こえた栄光サッカー部に入りたいというほどの少年たちにはそれが一

種しびれるような感じで、皆みるみるたらしこまれてしまった。

色んなことを教わった。

なかでも後年、自分が中学生を教える立場になったとき、「押本、おまえが例えば今日なら今日の練習を指導したとして、選手が『ああ確かに練習前と後ではここが良くなった』と思えるほどの指導ができなきゃ、いいコーチとはいえない」と言われたことは忘れられない。いま曲がりなりにも経営者として人の上に立っていて、これほどの厳しさを自分に課し続けているだろうか・・・？

ところで、去年の秋、私は栄光サッカー部関係者に以下のようなメールを流した。ちよつと長くなるが引用する。

『諸先輩ならびに諸大兄

唐突にお便りします。

ある経緯があつて人に紹介され、きのう奥寺康彦氏（達）と飲みました。

彼は昭和四〇年の中学の県大会で我々に大敗した（夏冬いずれも準決勝にて栄

光 四対○舞岡中、栄光 五対○舞岡中）ことをよく覚えていて、「ドイツ人のコーチがいるらしいとは聞いていましたが、とにかくパスをチンチン回されて、どんな練習をすればあんなパスサッカーができるのかと思いました。」と私に語りました。

酒が入っていました。歳のせいでもあるでしょう。が、万感胸に迫り不覚にも泣きました。』

このメールに色んな人が反応した。

相川さんの反応を紹介しよう。例によって、栄光の国語の恩師、阿部忠も真つ青の全く句読点なしの独特の文章だが、これが彼から貰った最後のメールとなった。

『だから栄光のサッカーは誰がそれを指導したかということとは無縁に後々ケルンでブンデスリーガ選手になったような偉大な選手の少年時代に彼のたましいをふるわせたんだとそのくらいの誇りを抱いていいのだとなにか欠けていたものもあったろうがサッカーのサッカーらしいところを横須賀の片隅から発信してい

たというのが相手から今にして学ぶ心地よい評価でしょさあその伝統をどうするかとOBはその脈絡のなかに生きているわけだ』

相川さん。こういう感じて今の現役にわかるかねえ。

彼らにもこういう「ちよっといい話」、人に語れるほどになって貰いたいよねえ。

相川さん。長い間お世話になりました。

いずれそちらでお会いしましょう。それまで、さようなら。

『秋暮れて　とほきいくさの手柄かな』

突然の知らせ

栄光学園サッカー部十三期(同期)

村田讓二

今日もギリギリの電車で白楽で飛び乗って、横浜駅では一番外れの東横線から反対側の京浜急行にラッシュの人を掻き分けて走り、ホームへの階段を駆け上がる。丁度特急電車が到着、それに滑り込みセーフ。特急だから京浜田浦は止まらない。一つ手前の追浜駅で降りて、又々階段を駆け足で上り下り。駅前のタクシー乗り場へダッシュ。来たタクシーに乗り込んでホット一息。やれやれこれで何とか遅刻にならずに済みそうだ。大概一緒になるのが相川君。他の人も相乗りで、割り勘でタクシー代を払ったつけ。乗ったタクシーの運転手さんが栄光の先輩のお父さんだったこともしばしば。もう少し早い電車に乗ったらと諭されたりして。

練習が終るとさっさと帰るグループと最後にやっと帰る連中とに分類されるが相川君は必ず遅い方でしかも一番最後。別に部室の戸締まりを担当していた訳ではないが。そして横浜駅で途中ちよっと寄り道。家に帰る迄に腹に何か入れないと持たないと。田浦近辺では先生、先輩、後輩、父兄の眼がうるさくて。

私は高校二年でサッカー部引退。その後は全くと言っていい程サッカーとは縁がなかったが、彼はその後もサッカー一筋。その活躍ぶりは皆様先刻ご承知の通り。丁度彼が読売クラブの監督をしていた時はクラブの面々と撮った写真の年賀状を送ってきてくれていた。息子がサッカーに興味をおぼえだしたころだったので、「お父さんの友人は凄いだろう」と人の禪を借りて親父の威厳を保ったりした。

ドイツに駐在していた時、たまたま乗ったタクシ―の運転手がやたら日本のサッカー通。クラマーだグーテンドルフだと話しだした。最後には俺も日本からコーチの声がかかったなんぞと言いつつ始末。そこで俺の一番の友人はクラマーの一番弟子だぞと言って話を締めくくったこともあった。サッカーというのは世界中でこんなにも人と人をつなぐ手段なんだなと実感した次第。

それにしても何とも突然の知らせ。私も葬儀に参列したが、我々以上に後輩の教え子の数の多かった事。その事こそ彼の人柄そして彼が一番力を入れていた事の証明ではないだろうか。あの細い身体、細い顔、細い眼で若干口をとがらせてサッカーへの情熱を語っていた姿にもう会えないのは何ともやりきれない。

相川君を偲んで

栄光学園サッカー部十三期（同期）

佐藤純一

相川君とは栄光学園サッカー部にて中学、高校通算五年間を一緒に過ごしました。（栄光学園の場合は高三になると受験準備の為、原則部活動から引退する事が慣習となっており、高三の一年間は活動しなかった為）同君は背番号6を着け今で言えばボランチのポジション、私は背番号8で今で言うゲームメーカーのポジションで、二人で中盤の核を担っていました。同君は決してテクニシャンと言う訳ではありませんでしたが、細い体の割には人との競り合いに強く、又走力はチーム一と言っても過言でないぐらいに走りまくってくれました。例えて言うならオシム監督時代の代表チームの中盤を務めた鈴木選手のような存在だったかも知れません。

同君との最大の思い出は高二の冬に出場した全国高校サッカー選手権の一回戦でのシーンです。

対戦相手は三重県代表の上野高校でしたが、試合が始まって直ぐに感じた事は

これまで経験したの事が無いぐらいに走り回るチームだった事です。短距離ダッシュなら人には負けないと思っていた私でしたが相手チームが走り回るので、試合開始から十分ぐらいで息が上がり、試合終了まで持つかなと心配したぐらいでした。（私がこう言う様状態であつた事は、結局誰にも打ち明けませんでしたが）そう言う状況にあつて、敵と対等以上に張り合ってくれたのが相川君で、その時には大変頼もしく感じ頼り切つてしまいました。

相手が一点を先行し、我々も何とか同点に追い付こうと懸命にチャンスを作ろうとトライしたのですが、決定的チャンスが中々訪れないまま時間が経過した後半三〇分ぐらいの時に、今思えば唯一無二の得点チャンスが訪れました。競り合ひの中からボールが私と相川君の中間ぐらいに落ちたのですが、数センチボールに近かつた私がシュートをした所、無常にもボールはゴールのバーを超えてしまいました。

その時、側に居た相川君から「ばーかー」と怒鳴られたのですが、その時の相川君の表情と共に忘れられないシーンとなりました。結局試合は一对〇のまま終了し、我が栄光学園は一回戦負けとなつてしまいました。

もう一つの思い出は私が三菱電機に勤めて居た時の事です。突然「栄光のサッカー部で一緒だった相川です」と電話が掛かって来ました。

彼が始めた医療関係販売の為のセールスエンジニアをリクルートしたいのだが三菱電機関係者で推薦出来るスタッフはいないかとの問い合わせでした。

同君は早稲田、私は上智だった事もあり、栄光卒業後は没交渉だったのですが卒業後十数年経ったある日の事でした。何人か推薦出来たのですが、結局双方の条件等が合わずに採用には至りませんでした。私としては同君が私を頼つて来てくれた事に若干の驚きと頼つてくれたと言う嬉しさを覚えた事を思い出します。

相川亮一君の思い出

栄光学園サッカー部十三期(同期)

戸田忠澄

相川亮一君との付き合いは中学・高校のサッカー部でのことなので、ちょうど半世紀前になる。相川君はなかなかの戦略家だった。中学三年の夏休み、サッカーの練習の合間に私は彼に何かユーモア小説を読みたいと言ったらしい。彼は面白い全集があるから譲ってくれるということになった。夏の暑い日に山を越えて彼の家まで自転車で全集を受け取りに出かけて行つた。すると彼は全集の一冊だけを出してきた。「これが読み終わったら次を渡すから」と言いわれてその一冊を受け取って帰つた。番号を見て、全集の第一巻ではないことを不思議に思いながらも読み始めてみると、面白くて一気に読み終わってしまった。そこで又次を受け取りに行つて、また一気に読んで、また次を受け取りに行つた。都度番号はばらばらだった。こうしてその夏のうちにユーモア全集は全部読み終わってしまった。最後の方は読むことが習慣化していた。全部読み終わった時に、中学生ながらになるほどと思った。最初に全集全巻をどさっと渡されていたら、あるいは初めの方に超面白い本が続いていなかったら、最後まで読みきらず、ただ本棚に飾って終わっていたかもしれない。彼のそんな作戦に中学生ながら舌を巻いた。

彼の口癖は「よ、行くか」だった。高校の時、試合が終わって藤沢の県営グラウンドからの帰り道、横浜駅に着くと「たん麺のうまい店があるから行くか？」と最初に声をかけたのは彼だった。それから試合の後は、横浜駅で降りて、西口の地下の路地の奥にある狭いカウンターの店「一品香」の暖簾をくぐってたん麺を食べるのが横浜方面に帰る我々一群の習慣となった。「おじさんテレビつけてよ」と店長に頼んで、カウンターの奥のテレビで日本リーグの試合に見入った。ヤンマーの釜本、三菱の杉山、東洋工業の小城などなど。

最後まで部活にいたのも彼だった。高校二年の全国大会を最後に同学年の大部分が休部した。私もそうしたが、彼は渡辺幸男君と共に三年生でもプレイを続けていた。彼のサッカーへのこだわりがまばゆかった。

最近六十雀のチームでプレイをしているが、そのチームメイトの一人から、「元読売クラブのコーチの相川さんから、コーチの研修会で教えてもらいましたよ。」と嬉しそうに言われた。その人は私が相川君と知り合いだとは知らずに話してくれたのだった。私の知らないところで彼は尊敬される人になっていたのだと知ったのだった。

相川君との想い出

栄光学園サッカー部十三期(同期)

渡辺幸男

私と彼とは昭和三十四年四月栄光学園入学時から半世紀強にわたり、サッカーを通して長い付き合いを続けてきました。私をサッカーに引きずり込んだのは彼です。当時の私はまだ野球に熱中しており、サッカーには全く関心がありませんでした。中学二年になる時、彼からサッカー部への入部を強く勧誘されたのですが、決め手は栄光でスポーツを楽しむにはサッカーしかないと言う一言でした。

当時の栄光サッカー部は県下では常に上位にランクされ、全国大会出場も夢ではなかったのです。このサッカーへの転換が私自身の人生を大きく変えることとなったのですが、そのきっかけを与えてくれたのが彼でした。以後五十年以上サッカーにのめり込みサッカーから離れられない人生を送ることとなりました。

中学・高校で五年間一緒にプレーし、彼の華麗ではないが細身ながら縦横に走り回る献身的なプレーが今でも思い出されます。週二回の練習時間を補うため殆ど毎日二人で壁に向かいボールを蹴っていたことも懐かしい想い出です。成績的

にも中学県大会優勝、昭和三十九年正月の全国高校選手権出場等楽しい思い出をたくさんつくることができ、サッカーに転向した当初の夢を達成することも出来ました。高校三年になると大学受験準備のため部活から足を洗うのが慣例ですが二人で話し後輩をサポートし夏まで続けることにし、栄光としては最後の関東大会出場を成し遂げたことも懐かしい思い出です。

大学時代は別々でしたが、私は体育会でサッカーを続け、彼は同好会でプレーしながら、指導者への道を進みはじめていました。時たま私の練習を見に来て、帰りにコーヒーを飲みながらのサッカー談議も楽しみでした。当時は、釜本・杉山・森・宮本輝等を中心としたメキシコオリンピック銅メダルの時代でした。その後彼は、そのチームを率いたクラマー氏のコーチングスクールで学び、本格的にプロコーチとしてのキャリアを積み上げていきました。

社会人となってからも、よく私の自宅を訪ねてくれて酒を飲みながら一晩中サッカーオンリーの話をし翌朝帰っていくことも度々ありました。私の妻に言わせるとサッカー以外頭がない人でした。停滞する日本サッカーの再建を如何にしたら成しえるかが大きなテーマでしたが、クラブチームによるプロ化が不可欠で

あるが彼の持論でした。読売クラブの強化に尽力し、ブラジルからジョージ与那城、ラモス等の優秀な選手を入団させ、日本リーグ・Jリーグでの読売時代の礎を築いたのも彼の功績でした。またユースチームの強化にも努め松木・戸塚等の日本代表選手を輩出しました。

何回か私が所属する会社のチームを読売ランドに招いてもらい、ユースチームと試合をしました。が、今思うに松木・戸塚・大友等そうそうたるメンバーに、飛び入りでラモス選手が参加したりで忘れられない思い出になっています。

晩年も赤坂・四谷等で酒を飲む機会を得て、彼のサッカー持論を拝聴しましたが、まだまだ現状の日本サッカー界には満足せず改革を口にしており、彼としては志半ばで去ったとの思いが強いと思います。

彼のご冥福をお祈りするとともに、次に再会したときもまた一緒にボールを蹴ることを楽しみにしています。

人生を変えたひと言

サッカージャーナリスト
栄光学園サッカー部十八期
大住良之

栄光学園中学三年生の九月にサッカー部にはいった。三カ月間ほどは入部した
ての中学一年生のチームにはいつての基礎技術の練習だった。

当時は小学校のときにサッカーをしていた子供などほとんどいなかったから、
みんなへたくそだった。私も同じようにへたくそだった。技術の進歩は亀のよう
に遅かったが、体力面は急激に伸びた。毎週毎週、ぐんぐん体力がついてくるの
がわかった。

冬を迎えるころ、ようやく中学三年生のチームで練習することを許された。
キックも何も恐ろしくへたくそだったが、走ることにかけてはひけをとることは
なく、「そのうち技術はつく」と、楽しく部活動に取り組んでいた。

春休みになって、私たちは相川さんが指導する高校チームに加わって練習する
ことになった。練習は合理的だったが、同時に非常に厳しかった。そしてものす
ごく恐かった。

練習の最後にインターバルランがあった。グラウンドを回りながら、ハーフラ

インからゴールラインまでダッシュする。これを三〇分間もやるのだからたまらない。相川さんはダッシュの直前になると列の最後尾に回り、笛で合図をする、もがきながら懸命に走る私たちを楽々と追い抜いていく。しかも背後からなんとも形容し難い叫び声を上げながら迫ってくるのだ。私は恐怖に駆られて走った。

一九六七年の春の話である。

相川さんは私たちに新しいヘディングを教えた。クラマー流のヘディングで、それまでのヘディングとはずいぶん違うものだった。

中学生のときに教えられていたのは上半身を固定し、いわば野球のバットのようにはボールを打つヘディングだったが、相川さんが教えたのは、体をしなやかに使い、ボールを打つ頭の一点に全身の力を集中するというもので、今日では小学生でも当たり前のようになっている方法だ。

みんな必死に練習した。しかし三年間使い慣れてきたヘディングから新しいヘディングにするのは大変なようだった。ところがどうしたことか、私はすぐにコツをつかんだ。凝り固まったものがなかったおかげだろう。

二人一組となり、ひとりが投げて、もうひとりがヘディングするという練習。相川さんが回りながら、「ここが違う」などと指導している。私のところに近づ

いてくるのがわかる。

「パーフェクト！」

相川さんの口から予想もしなかった言葉が飛び出した。私がヘディングしたときだった。周囲のみんなが驚いたように振り向き、私のほうを見た。もう一本ヘディング。

「完璧だ」

そう言って、相川さんは次のところに回っていつてしまった。

それだけだった。しかし私は天にも昇る気持ちだった。サッカー部にはいつてから技術面でほめられたのは初めてだったからだ。

足のほうの進歩は一年たっても二年たっても遅々たるものだったにもかかわらず、相川さんのひと言が私にサッカーを続けさせる力になった。公式戦などほとんど出られずに高校生活を終わってしまったても、結局サッカーと離れることのない人生にしてしまったのは、思えば、このときの相川さんのひと言だったような気がする。

相川コーチと出会って

栄光学園サッカー部十九期
高橋正明

相川コーチとの出会いは、一九六四年の東京オリンピックの時に初めてサッカーという球技をテレビで見て、そう言えば学校でも球を蹴飛ばしている連中が結構居るなど初めて気付いて以来である。今時のようにサッカーが一般に定着していなかった事もあり、それまでサッカーと言う競技の存在すら知らなかったが他の世界で勉強だ何だとうるさく言われてむしろくしゃしていた少年が、球を蹴飛ばしてスカッとしてその魅力に取りつかれてサッカー部に入学した時に、グラウンドに立っていたコーチが相川コーチだった。途中で入学したために、最初は他の同級生とは別メニューで、上級生の指導者がサイドキックやインステップキックを教えてくれていると時々相川コーチがキックの立ち足の位置、蹴る足の部位角度、インパクトの瞬間などの詳細な解説を交えながら蹴り方の見本を見せてくれた。合理的な理論でわかりやすかった。

グラウンドでは無愛想な人だったが、様々な質問をすると、熱心に解説してくれた。徐々に「蹴り方」だけでなく、フエイントや、目の配り方、戦術、体力ト

レーニング方法など多岐にわたる質問となるが、それを同じ様に非常に丁寧に理論的に解説してくれた。サッカー合宿と称して何人かの同級生と共に自宅に泊まり込み、一晩中、模造紙にマジックで次々と解説図を書きながら多くのテーマを学んだ事もあった。例えば、今から四十年以上も前、自分達が高校生、相川コーチがまだ大学生の頃の話だ。相川コーチのサッカー知識はどこから来たのだろうか？ 当時、サッカーの専門書などまだ余り無く、わずかに「チャナデイのサッカー」という英語の専門原書があるくらいで、雑誌やムックのサッカー雑誌などが日本語で出版されてた訳ではない。どこからか英語のサッカー解説書を手して来て、すべて相川コーチは自分で大学ノートに独特の文字と表現でびっちり書き込んで翻訳していたのだ。その相川ノートのコピーを大切に持ち帰り、学校で回し読みしたりした。

それだけでは飽き足らず、たまたま入学した慶應大学で迷い無く体育会サッカー部に入った。ようやく本物のサッカーに触れる事となるが、大学のサッカーはそれまでの理論先行のサッカーの知識とはまた別世界で、授業よりも優先して毎日グラウンドを走り回り、考える余裕も無く、練習や部の行事、公式戦に追われた。体力があつて当たり前、技術のある者が正選手となつて行く実力主義。部員

は選手を目指して練習するが、高校でちゃんと鍛えていない体は、グラウンドを走るだけで関節がすり減り、気を抜くとすぐに捻挫する。しかし、当時のサッカー部には大学生で全日本代表に召集されるような選手がたくさん居たので、同じグラウンドでまざまざと実力の差を見せつけられた。レギュラー選手だけが一目置かれる環境に、これがサッカーなのか？　と違って、随分反発した時期もある。そう言う時に、また相川コーチに質問する。しかし、その度に、サッカーの選手になるための必要な要素や超えなければならぬ試練を説かれた。またサッカーという競技に関わる様々な裏方の存在にも気付いた。大学サッカー、アマチュアサッカー、プロのサッカーのそれぞれの特徴やハードルを解説された。さらにチームのマネジメントの重要性も教えられた。

当時の相川コーチは、すでに読売クラブのコーチになっていて、時々読売ランドなどで大学のチームと練習試合をやった。その時の読売の選手達に混じってジョージ与那城やカリオカらのブラジル勢が居た。那須の藤和不動産のグラウンドで合宿の時に、デビュー前の来日直後の精悍で細身のセルジオ越後が居た。本場のプロチームでリベリーノとポジション争いをした日系人というだけあって、そのプレーの素晴らしさは忘れられない。しかし、相川コーチは淡々とそれらの選

手の特徴とレベルを比較しながら彼らの解説をしてくれた。思えば、その時に初めて「ワールドクラス」という言葉を聞いた。すでに相川コーチは、中学高校生の少年のレベルから、大学、日本リーグの大人の選手レベル、そしてプロの世界レベルまでの違いをきちんとクラス分けしていて分析していたのである。

その頃から時代は多少前後するが、相川コーチが読売クラブのコーチに就任する前に、FIFAのアジアコーチングスクールに三ヶ月間参加した。当時の主任コーチがクラマーコーチで、そこでプロコーチのライセンスを取得していた。つまり、相川コーチは、世界レベルのサッカーをクラマーコーチから学んでいた。その間、山手学院のサッカー部のコーチの代役を仰せつかったが、それが私のサッカーコーチデビューとなった。その代償として、帰国後の相川コーチから、クラマースクールの内容を聞かせてもらったが、その時すでに相川コーチの頭には世界地図が描かれていた。そして、日本サッカーの現実の環境を見つめながらそのコーチング理論を日本でも実践しようとしていた。その後、神奈川県国体選手のコーチも経験していたが、その時に日本の高校生の全国レベルを体験しながら、そこで通じる選手の強化にも努めた。早野選手らその時に発掘された皆さんの選手が後のJリーグで活躍した。読売でも戸塚選手や都並選手、松木選手

ら多くの次世代選手が出現した。

いつの日か、相川コーチとサッカー問答をする事が習慣的になっていた。私は大学卒業後はサッカー選手の道は真直ぐ歩けなかったが、お互いに違う世界でサッカーの経験と教訓をベースに、それぞれの観点から議論する事が常であったしかし、相川コーチが、いつもこだわるのは、このワールドクラスの選手と話題の対象選手の比較であった。常に出会った選手の分析をしていて、特長と欠陥などを整理して、選手のランク付けをしていた。また、偶然の機会に見つけた逸材が居れば、それが田舎の高校生であろうと、アマチュア選手であろうと目を輝かせて磨けば光ると熱心に語っていた。そして、プロコーチという職業にこだわったのも、泥に埋もれたダイヤモンドの選手を発掘し、それを磨きあげてワールドクラスに育てるという夢を語った。現場至上主義で、選手を育てあげて勝てるチームを作ってなんぼの世界である。

それが故に、テレビなどでマスコミに踊らされたにわかサッカーファンや評論家を好まなかった。グラウンドで勝負しろ、と。ただし、残念ながらも肝心な試合に負けてしまった。読売クラブが天皇杯の決勝に臨んだ時にも、負けた。勝負師としての敗北というより、勝負に勝つためにまだ隠れて居た思わぬ要因が

あつたと、苦笑いしながら後でいつも負け惜しみを述べたが、自己流に対する厳しい現実を怨む事はなかった。

晩年になるが、相川コーチがもう一度母校栄光のサッカー部をコーチしてみようと言いつ出した。昔から栄光には時々コーチとして通っていたはずなのに、「もう一度」と言つた。考えてみると、栄光のグラウンドでコーチをしても見返りがある訳でもなし、逆に一部の関係者から誤解され余計な事を教えるなど対立もあったが、ほとぼりが冷めるとまたグラウンドに立っていた。何をいまさらと思つたが初心に戻つて、また積み木を積み直すあくなき挑戦だった。プロの世界でのサラリーマンコーチには興味を示さず、自分でアマチュアの中からダイヤモンドを拾おうというのであつた。原石探しの行脚は小学生にも及び、いくつもの少年サッカーチームにも顔を出していた。ただ相川コーチが母校に求めたものは、ダイヤモンドではなかつたのだろう。

湘南地方の田舎からプロの世界でも通用する選手を発掘しようとした訳ではないだろうが、サッカーにはある程度のインテリジェンシーを持った選手が必要でそういう選手達が構成するチームが、体力的にも練習量でも勝る他校にどこまで食い下がるのか、どこまで試合を制すことができるのかを証明したかったに違

いない。従って、その思いは、母校だけにこだわるものでもなく、言わば神奈川県湘南地方という出身地へのこだわりだったかも知れない。どこかあか抜けた湘南ボーイのサッカーでもワールドクラスの世界でも優位に立てる可能性があると思っていたが、その思いは、湘南高校の監督であり神奈川サッカー協会の重鎮である鈴木中先生との交流の中でも発揮されていたと思う。常に、サッカーの世界でマイナーからメジャーに這い上がる努力であり、決してあきらめないアウトサイドダーならではの独学のエネルギー消費が原動力であった。そして、むしろそのようなマイナーな環境を好み、そこからワールドクラスに挑戦する不屈のゲームに挑んだ。

結果的には遺稿集となってしまったが、相川コーチの残した「コーチング日誌」は、二〇〇二年のワールドカップの日本開催という快挙の前後に盛り上がったエネルギーで書きまくったコーチングメモである。一時インターネットでも公開した事もあり、見知らぬ少年サッカーチームのコーチなどからも時々質問が届いたりもした。相川コーチの信念は、プロ・アマに限らず本質は同じで、日本サッカー界の父と呼ばれた「言葉の魔術師」師匠クラマーコーチの言葉をそのまま実行していた。多くのクラマー名言集の中でも、特に、「サッカーは、子供を

大人にし、大人を紳士にする」「サッカーには人生のすべてがある」の実践そのものであった。そして、「ボールは丸い」も好きな言葉だった。何事もやってみなければわからない。

一昨年、突然の心臓病に倒れ入院した際に、どこで聞き付けたのか、師匠クラマーコーチから「ネバーギブアップ」と書かれた見舞いカードが届いた時に、大切に仕舞い込んでいて見せてくれたが、その時にはさすがの相川コーチの目も珍しく潤んでいた。さすらいのサッカーコーチとして、まだやりたい勝負が残っていたはずであるが、その願いは成就できなかった。この結果は、相川コーチの人生を象徴しているのかも知れない。そして、師匠からまた弔文メッセージが届いた。“The Coach Aikawa-san”で始まり、生れながらの有能なコーチであり、日本サッカー界は惜しい人材を無くした、と結んであった。相川コーチも、このメッセージがどんなにか嬉しかっただろう。

またいつか、どこかでサッカー問答お願いします。

酔狂な師匠、相川さん

栄光学園元サッカー部二十三期

高山 智

相川さんを紹介してくれたのは十三期の先輩だった。若い女性三人を呼んで合コンしようという企画に、その先輩が相川さんを連れてきた。ホテルオークラで会って会食、二次会はカラオケ。九年前だった。

二〇〇二年のワールドカップ全試合のコメントをメール配信してくれたことをきっかけに、栄光のサッカー部の先生たちと、品川の居酒屋で会ってもらった。そこから、栄光サッカー部のコーチとして相川さんの活動が始まった。

前述の先輩が国会議員パーティー券があるから市ヶ谷に来いと言うので、話のタネにでかけて、その先輩と赤坂まで歩いていたら、立ち食いそば屋から出てきた相川さんに出くわした。ご自分の自転車を指差して「おれのベンツ」と言った。赤坂のスナックでカラオケ。

江戸文化伝承の会企画の「屋形船花見会」で、相川さんと会った。カラオケタイムで英語の歌を相川さんが披露したら、会のメンバーで、芥川賞作家で画伯

だった亡き夫をもつバイオリニストが酔ってからんだ。「江戸の集まりで、アメリカの歌なんて」と。その女性が、イタリア語のアリアを地声で歌うのを見て、相川さん「バカ女」とつぶやいた。

私の企画する異業種交流会でも講演をしてくれた。私の六本木ヒルズでの一〇〇回記念講演にも、私の会社の創立十周年パーティにも来てくれた。議論をふればかならず応じてくれたし、電話してお会いしたいと言えば、会ってくれた。相川さんを知った私の知人友人はみな、相川さんの人柄と知性にほれた。しかも、洒落たユーモアがあった。

サッカー部五十周年記念誌に投稿するつもりではなくそれとなく書いた文章を相川さんが編集部に推してくれた。後援会に入っていないが、現職の先生たちとのつながりがあったことから、部のミーティングにオブザーバーとして参加させてもらった。

大病で入院された際、相川さんのベッド脇に、クラマーコーチからの激励メッセージがあった。「ネバーギブアップとクラマーさんに書かれたら、ぐずぐずし

ていられない」ととてもうれいそうな笑顔だった。

今年の元旦に「十日に柴野先生と会う予定のメールをもらったが、それを大みそかに削除してしまったらしい」とメールが。大病の経緯を知っている私は、「メールはいただいていません。十日の予定もあります。相川さんの病状が心配です。お大事になさってください」と返信。「慈恵入院を機に人生の生体的なピークはこれですぎた後はダウンスロープのなかでなにがきてもふしぎはないって覚悟はできたようなきもするからここはあがこうとはしないだろう福井での精神錯乱というか見当識脱落というのか大脳領域での異常がどうなるのか狂人になるのか廃人になるのか運命ならばしかたがないと思います。まあありがとうございます」と句読点なしの相川節。最後のメッセージだった。

その後、神奈川芸術劇場のこけら落としの落語に誘おうとメールしたが返事がない。私からの連絡に応答がないことがなかったので、事務局の高橋さん、柴野先生に電話して、相川さんの異変を伝えた。二月十九日霊安室で相川さんと会った。お変わりなかった。

二十四日の葬儀に参列した先の先輩から「高山よう、お前がいてくれたから、相川は早く見つけた。参列した同期に説明したら、みんなが、その高山つて奴に、相川が世話になったと伝えてくれと。ほんとお前には感謝してる。ありがとよ」と。

私は、そのあと号泣した。酔狂な師を失ってとてもさみしいが、今度、相川さんが昔栄光で英語を教わったカーリー上智大学元学長先生のピアノ弾き語り会に先輩たちを呼ぼうと思う。

サッカーの美しさ

栄光学園サッカー部五十六期（二〇〇八年三月栄光卒業）

中田守

私たち五十六期は、高校の練習に参加するようになってから高三の最後の大会が終わるまでおそらく最も長い間、相川さんのご指導を受けてきたのではないかと思います。

ぴりつとした緊張感に包まれる練習、いつもなにか悪巧みをしている少年のようなギラギラした雰囲気を纏っていた相川コーチ。

そんな相川コーチが練習を始める前に短いお話をされることがよくありました。

お話の内容は様々です。サッカーのプレーについてはもちろんのこと、ご自分のコーチとしての海外での経験や他の学校でのできごとなど。練習中の厳しい表情からは想像もできないような、本当に楽しそうな、清々しい顔で、「サッカーってすごいんだぜ!」「おまえらにその素晴らしさを伝えたいんだよ!」と言わんばかりに。

そんな相川コーチのお話を聞くと我々も自然と士気が高揚してくるんです。わ

くわくが止まらない。ずっとそのお話を聞いていたいと何度も思いました。

その中でも特に私の心に強く残っている言葉があります。

卒業生を送る会で、皆が集まった部屋で相川コーチが静かにこうお話されました。

「サッカーは一瞬のスポーツ、そのプレーは今そのとき、その場所、で生まれたらもう二度と生まれない。その一瞬のプレーの儚さといったら。その一瞬のためにサッカーは美しい。」

それは、アマチュアだろうがプロだろうが関係ない。芝だろうが土だろうが砂利だろうが関係ない。戦慄が走るようなそんな一瞬の煌めきのプレーはもう二度と生まれない。ビデオにとったってそんなものは味わえない。なんて儚いものか。

この言葉が頭から離れません。

リズムの違うボール回し、ワントラップ目のフェイント、サイドの崩しや人数のかけ方、逆とりをするための工夫など数多くのことを習ってきましたが、相川コーチと言ったら自分のなかでこの言葉なんです。

相川コーチはきつとその一瞬の美しさを常に追い求めていたんでしよう、長い間、いろいろなチームを率いてきた相川コーチ、その根底にはこういう満足されない欲求があつたのでしょうか、それは満たされたのでしょうか。

ボールを蹴っているとなにか少しでもその魅力を感じられるような気がして、最近はこの言葉ばかり思い浮かべてます。

このサッカーの美しさにとりつかれてしまったらもうやめられません。

たくさんのことを伝えてもらった相川コーチに伝えたい。

あなたが人生をかけて追究した「サッカーの美しさ」は、孫世代の自分達にまで受け継がれています。そしてこれからも伝えられていくでしょう。

偉大なコーチであり、サッカーにとりつかれた仲間である大先輩のご冥福をお祈りして、追悼文とさせていただきます。

◇ 五十六期は、相川コーチが「もう一度」栄光サッカー部を本格的に教え始めた時の直接の教え子世代で最初の卒業生です。

相川コーチの指導

栄光学園サッカー部五十六期（二〇〇八年三月栄光卒業）

出口尚宏

私が相川コーチから指導を受けたのは中学三年生の秋から高校三年生の夏までの約三年間でした。相川さんから教わる以前の私はサッカーというスポーツを深く考えておらず、頭を使うにしても局所的な場面での打開策をみつめることくらいで、マクロな視点からサッカーを考えることは全くありませんでした。そんな折、相川コーチがやってきて我々栄光サッカー部になげかけたテーマは「栄光生なら頭を使って勝て」というものだった。これまであまり頭を使わずにプレーしてきて、そういうことを言うコーチに教わったこともなかった私はこの発言に驚きました。

相川さんがどのような指導をするのか私は楽しみだったのですが、期待を裏切るように相川コーチの最初の指導は「浮き球への競り合い」でした。「頭を使うとはこういう意味だったのか？」と指導内容に疑問を持ってしまったのですが、その疑問は全体の練習を見てすぐに解消されました。上手く競り合えている者が

ほとんどいなかったのです。この状態では確かに「頭を使つて考えるサッカー」の指導どころではなく、作戦を立てる上で重要な最低限できうるプレーの基盤が全くなかったのだから、まずは肉弾戦を恐れずに飛び込んでいくことを最初の指導のテーマとした相川コーチは、やはり、チームやプレーヤーを見る目が優れていると感心しました。

次に相川コーチがテーマとしたのは「まずは前（裏）へ」という考え方でした。サッカーは局所的に見れば足元にボールを出す方が良い、というか無難なことが多い。裏にボールを出すのはゴールに近づく代わりに相手にボールを奪われる可能性が高くなる面もあり、リスクを負うことになります。しかし、どんなにボールポゼッションが完璧でもいつかは裏に出なくては勝機はないわけで、むしろ裏を狙うことを最初に考えていた方がチャンス逃さないということが相川コーチの主張でした。物事を考える時には軸になる考え方が必要になるが、私が相川コーチから指導を受けてサッカーを考えるようになってから、その考え方の軸は常に「裏を狙う」になりました。それくらいこの考え方には共感できて、それをうまく言葉にして教えてくれた相川コーチには感謝しています。

相川コーチから教わったことはまだまだいくらでもありますが、総じて「サッカーを考える姿勢」を学んだと思っています。サッカーは日々進化し続けていて今持っている考え方が一〇年後に通用するかわかりません。しかし、サッカーを考える姿勢は永遠に変わらないと私は思います。プレイヤーを見て、チームを見て、対戦相手を見て、様々なことを考え、向上、打開していくことが大切。そこに様々な工夫を凝らすのはこれから我々が考えていくべきことだと思っています。

最後に、多くの方にサッカーを教え、日本のサッカー界に大きく貢献されたこと。私個人としてはサッカーに対する姿勢を教えてくださいましたことに感謝の意を表し、相川コーチのご冥福をお祈りいたします。

◇ 五十六期は、相川コーチが「もう一度」栄光サッカー部を本格的に教え始めた時の直接の教え子世代で最初の卒業生です。

ナイスボール

栄光学園教諭・サッカー部高校監督

柴野明彦

相川コーチが最後に栄光学園のグラウンドへ来られたのは二〇一一年一月十四日新年になって三回目で、翌日の土曜日は新人戦中央大会一回戦があった。

前年の九月以降、各月の初めに来て選手を指導しチームに課題を残していくことが続いていた。相川コーチが来た後は、キックやヘディングの基礎練習とコーチが出した課題をテーマにしたゲーム練習を重ねて試合に臨む。試合結果を携帯電話のメールでレポートする。翌月には新たな課題が示される。そして県の中央大会へ進むことができた。

十二月末に冬休み中の試合結果をメールした。Aチームは失点もしなかったが無得点に終わることが多かったと報告した。

一月十四日、相川コーチは練習が始まる間にグラウンドへ来た。選手が始めたアップをスパイクに履き替えながら観察し、ピッチに立つと指笛を響かせる。選手が集まってくると、選手に問いを投げかけながらこの日の練習の主旨を説明する。

「相手が体を張ってくる、組織的に守ってくるところで、どう相手をやっつけたらよいのか。これを世界のどこでも、ヨーロッパのプロでも考えている。昔も今もこのことに取り組むことがサッカーを追求すること。湘南の田舎にある小さなチームでもこれを考えて、サッカーをやるからには世界に通じることをやっていく」ということで練習が始まる。

練習の形は、ゴール正面のペナルティーエリアの外にFWが入り、ハーフウェイライン手前にトップ下が入る。トップ下が斜め後ろからのパスを受けて、FWへパスを出し、FWがゴールを目指す。相川コーチは一つ一つのプレーに細かいことは言わない。時々プレーの合間に「半身で受けること」や「ナイスボール」という声をかける。次第にトップ下の選手のパスがするどくなり、FWがシュートを決めるようになる。すると、球出しの選手がトップ下やFWをサポートする動きやトップ下がシュートすることも付け加わる。その後のゲーム練習は自由にプレーすることになっていた。コーチは時々「ナイスボール」という声をかける。しかし、サイドが自由に攻めるとトップ下がフリーになり、ボランチャやDFが前を向いた時にトップ下がフリーならパスをつける。段々とトップ下からFWの動きに合わせたパスが増えてシュートが増えていく。

ゲームしている選手を見ると、FWがゴール正面で相手の守備ラインを抜け出して点が取れる試合は楽しいと感じた。急に指笛が吹かれ一時間一〇分ほどの練習が終わった。コーチがスパイクを履き替えているところへ選手が集まり、練習でやった課題について話を聴き、選手が終わりの挨拶をする。いつものように「じゃあ、また」と片手を小さく上げてグラウンドを後にしたが、相川さんは課題を残したまま逝ってしまった。

栄光学園のような小さなチームにおいても、プレーする選手も見ている人も楽しいサッカーをやり、強くするのが「相川コーチ流」だった。

最後に相川コーチが残した課題は、第一は「トップ下の選手ならばゴール正面でもゴールへ向かうパスをねらってみろ！」だろう。この七年間、選手に求めることは一貫していた。技術の向上と攻撃サッカーを追求すること。戦う意識を高めることだ。「世界で活躍している選手みたいにやってみろ！」であり、そして一人一人が、同時にチームとして取り組むことは、最終的には「サッカーの神髄を追求しようじゃないか！」だろう。

相川コーチの思い出

栄光学園教諭・サッカー部顧問
円福寺恭司

相川コーチは六年間ほとんどボランティアに近い状態で栄光サッカー部を見続けてくれました。OBとして特別な愛情を本校サッカー部に注ぎ続けてくれました。

相川コーチのお話はいつも深みがあり、サッカー部について新鮮な気持ちになれる新しい着眼点を示してくれるものなので、部員はいつも集中して聞いていました。練習は定型的でない工夫されたもので、目標も明確なメニューでしたので部員も生き生きと練習に取り組んでいました。練習の進行中に、タイミングよく話してくれるコメントは、練習への理解と集中を高め、意欲的に練習に取り組めるようになる絶好のものでした。それらが自然に、恒常的に行われていた有り難さに今、改めて深い感謝の気持ちがわいてきます。そして失われたものの大きさに呆然としています。

相川コーチは栄光サッカー部をOB、父母が大きな輪になって支えていく、部

員の人生の土台造りの場、人間形成の場にされようとしていました。サッカーを知り尽くしている方が部活の理想形を、本校サッカー部において実現されようと努力していただいたことにどれほど感謝の言葉を述べても足りません。その夢がいまだ途上にあるうちにコーチは亡くなれました。この先は、少しでもその夢に近づくべく、残された者が一步一步努力を重ねていくしかありません。

相川コーチは練習時間より前にグラウンドにいらしているときがありましたが、そのときは部員はいそいそと支度をし、グラウンドに飛び出したものです。それぐらい相川コーチの指導を心待ちにしていました。「相川さんはサッカーの楽しさを教えてくれる」と部員が言っていました。相川コーチの過去の実績の偉大さは彼等が実感として分かるものではないと思います。いつも心に響く、納得のいく話をしてくれるので、どんな反骨心旺盛な部員でも、コーチの前では耳を澄ませて、一言一句聞き落とすまいとしていました。それが六年間、まったく変らない情景でありました。このような恵まれた時間をすごした部員はサッカーから一生離れられなくなるでしょう。事実、大学に進んでもサッカー部で活躍する卒業生が明らかに増加しました。

これからは、相川コーチの遺産を受け継ぎ、栄光サッカー部の発展のために、誠に微力ながら、私も力を尽くしていきたいと思っています。幸い、優秀なFWを有する？ 世代が現れ、若いサッカー部OBの教員も採用されました。後援会の支援をいただきながら、活力あるサッカー部を育てていくことが何よりのコーチへの恩返しであると信じて頑張っていきたいと思っています。

第一部 相川コーチに捧ぐ

第二章 山手学院関係

※ 一九六七年～一九七一年

サッカーコーチ人生の黎明期

1965	昭和40	早稲田大学入学	1966	山手学院 コーチ
1970		<JFA公認コーチ取得>	1971	神奈川選 抜コーチ
		<FIFA公認コーチ取得>	1975	
	1974	読売ユース		
1975	昭和50	読売トップ		

早稲田大学に進学した相川は伝統の稲穂キッカーズに入部するが、サッカーコーチに魅せられ独学でコーチ学を研究。それを実践した最初の職場が山手学院サッカー部だった。山手学院のコーチは比較的短い期間であったにも拘らず、文字通りゼロからの出発点であり当時の生徒にも大きな影響を与えた。その後山手OBの中から読売クラブ創成期に何人ものアシスタントコーチやJリーグのコーチを排出した事を考えると、すでに当時からコーチの道をまっとうしていた事がうかがわれる。

相川さんと山手学院サッカー部の思い出

山手学院中・高等学校サッカー部（一期）

加藤 滋

山手学院中等部で、我々一期生が創部したサッカー部の始まりは部員数十七、八名でのスタートだった。体育科の先生が監督と言う名目で指導を始めた。しかしその体育課の先生も、本来はサッカーとは縁の無い先生で、最初に始めたのとはかくボールを蹴るだけだった。

つまり、キック アンド ラッシュだけのサッカーだった。練習は校庭の半分をラグビー部との共有で、半面ずつを使つてのクラブ活動であつたが、山手学院はラグビー部が校技としてスタートした為、練習ではラグビー部五十名の所帯に對抗する規模ではなかつたサッカー部はなんとなく肩身の狭い雰囲気があつた。ラグビー部がスクラムから出るボールを追いつながら、サッカー部の練習に使つてゐる部分に怒涛のように入り込んでくるのである。そのたびにサッカー部の練習は一時的にストップすることを余儀なくされた。

一期生が中学一年から二年への変わり目に、練習を受け持っていた体育課の先生が退任し、当時サッカー部部長兼務であつた小林三二先生から新しいコーチが

就任すると言う話が伝えられた。

確か二月から四月頃の間だったような記憶である。白っぽいジャンパーにスポーツバックを肩に引っ掛けて、やせた身体に日焼けした顔、大学生といった感じのお兄さんっぽいスマートな印象であった。

当時、我々はサッカーなどはただ球を前に蹴ればよい、と言った位の指導しか受けておらず、今考えると本当にお粗末なレベルのサッカーしか知らないサッカークラブの活動であった。

相川氏の指導はそんな私どもには新鮮で真新しいものだった。サッカーの戦術の移り変わりの話、ボールを各個人が「支配」（相川氏独特の言い回しで、とても新鮮な感じがした言葉である。）できる為のドルブルの練習やフォーメーションを決め、各自の役割を端的に教え始めた。サッカー雑誌を持ってきて、イギリスのサッカー選手の写真から、いかにその選手がバランスを取る為に身体を鍛えているか、写真から読み取れるその選手のキャラクターなど、まさにサッカーを知る手ほどきを始めてくれたのである。

それまで体育系の先生が「ボールを前に蹴れ」といったサッカーから、サッカーとは想像力とインスピレーションであり、それにインテリジェンス、相手の

やることを見抜くセンス、ボールを支配できる技術、ドリブル、フェイントで相手を翻弄する個人技の力、決められた戦術を実行する組織、そして仲間をカバーして、目的達成のために協力し合う友情などが発揮できる素晴らしい競技であることを教えてくれたのである。まったくそれまでとは次元の違うサッカーを持ち込んでくれたのである。

それまで体育系の怒鳴り声を中心であった雰囲気は姿を消し、知的なゲームを学び始めたのである。サッカーの練習が本当に面白いものとなったのである。それはまったく新鮮で独特なものであった。我々はテレビ東京が放映した「世界のサッカー」を欠かさずに見るようになり、ワールドカップの伝説に残る試合を何度も見erようになった。

赤い小悪魔と言われたジョージ・ベスト、イギリスの代表チームの中盤を思うがままに支配するボビー・チャールトン、ドイツの闘将、ベッケンバウアー、など数限りない有名選手に憧れ、現代サッカーの戦術は4・2・4か、4・4・2かといったデイスカッションまで始まったのである。まさにサッカーにのめりこんでいったのである。

その後も二期生、三期生のサッカー部員が入部し 部員数は増え、部は大きくなっていった。同時に相川氏の目指す個性のあるサッカーが始まったのである。すべては相川氏がコーチとして山手学院に赴任されてから始まったのである。

練習は当時の私どもにはとても科学的に思われた。サーキットトレーニング、筋力トレーニング、ミニゲームなどである。練習は厳しいものであったが体力づくりがチームづくりでは基本であった。

それでも、雨の日にずぶぬれになる練習より、体育館の中で行うミニサッカー（今で言うサロンスoccer）や手を使わないサッカーバレーなど行い、丸いボールの不思議さに我々の誰もが惹きつけられたのである。

こんなに面白いスポーツが世の中にあるんだということを教えてくれたのが相川氏であった。

それが高校サッカーになると、別のレベルを目指す練習が始まった。

山手学院独特のサッカースタイル、それは相川氏の目指すサッカースタイルでもあったのだが、フォーメイションの基本を仕込まれ、アタックは個人技を活かし、中盤はボール回しが巧みで、奪い取った瞬間から攻撃に移れるすばやい動き守備は相手の動きを追い込んで封じ込めるインテリジェンスを使ったゾーンディ

フエンスを目指す、そういったサッカーであつたと思う。

おそらく理想には程遠かつたかもしれないが、我々はそのようなサッカーを目指したのである。それは同じ、共通の夢を持った仲間の集まりで、先輩後輩などといった壁を乗り越えたところにあるサッカーだったと思う。

相川氏の午後三時に、山手のグラウンドに現れる姿は格好よく、誰もが同じ格好を真似るようになった。トレーニングスーツにカバンを肩から引っ掛け、少しニヒルな、誰が見ていようがお構いなく、「俺はこうなんだ」と言う格好である。

個人指導においても、各選手に手書きのメッセージや言葉を選び、何を目指すべきかを教えてくれたのである。個人の持つキャラクターや特性をいかに自分で生かすかを教えてくれた。それはまさに現代サッカーの基本であると思う。

四十数年前に、既に相川氏からそういったサッカー指導を受けていた事が実に誇らしいと今でも思っている。

合掌

相川さんの思い出

山手学院中・高等学校サッカー部（二期）

小林淳一

私が相川さんに初めて会ったのは中一の終わり頃だったと思います。コーチのことを何と呼んだら良いでしょうかと尋ねたら、「相川さんでいいよ」と言われました。当時中学生の私達を一人前の大人とし、尊重もして扱ってくれました。けっして押しつけでなく、物事の考え方をさらりと教えてくれた事を覚えています。

一番の思い出は、サッカーの考え方。特に私はゴールキーパーだったので相川ノートの中で、当時イングランドのサッカーリーグ（現プレミアリーグ）のチーム名は忘れましたが、ロニー・シンプソンと言うゴールキーパーの写真（サッカーマガジンの切り抜き）が貼ってありました。

「君はこの写真を見て何を感じるだろうか？」そこにはボールを左手で小脇にかかえ、これから攻撃に移るさっそうとした姿でした。決してフラインセーブした時のものでは無かったし、有名なゴールキーパーの写真でもなかった。

今でもはつきり覚えているのは、口元をしつかりと結んだゴールキーパーの写

真を指して、「ゴールキーパーとは、絶対に入れさせないぞ、ゴールを守りぬくんだ、と言う気迫を持ちなさい」と言う事でした。

相川さんからは、サッカーの技術より、サッカーの考え方、接し方、そしてそれを通して人生の生き方を教わった気がします。私が大学に行っても時々会ってもらい、色々な話を聞きました。今から思うと、それを少しでも記録として残しておけば良かったと思います。今、相川さんの教えを少しずつ思い出して、子供に伝えたいと思っています。

二年程前に久しぶりにお会いした時、糖尿病との事でしたが、相変らずの、話し方、接し方を見て変わってないなと思いました。それが最後の別れとなつてしまいました。

引き際が素晴らしく早く、鮮やかでしたが、人生の幕引きも早すぎた様に思えます。

相川さんの御冥福をお祈り致します。

合掌

相川さんの思い出

山手学院中・高等学校サッカー部（二期）

田川 誠

相川さんは、高校時代のサッカーのコーチであると同時に、私にとっては、青春時代の人生の師でありました。たった二年間でしたが、その二年間は、毎日、寝ても覚めても、二十四時間相川さんの言葉を追いかけて、過ごした二年間でした。相川さんの言葉に一喜一憂し、何でも真似をして、居残り練習も、毎晩のダンベルも、兎に角、相川さんに少しでも近づきたくて、努力しました。相川さんが山手を去られた日に、心に穴が開いたようになったことを今でも鮮明に覚えています。

高校を卒業し、大学時代、社会人となっても、相川さんの言葉を良く反復し、自分を鼓舞して生きて来ました。あれから四十年、企業経営や後輩を指導する立場になった今、相川さんがあの時見せてくれた指導者としての一挙手一投足を、いまだに思い出しながら仕事をしています。

相川さんのご冥福をお祈り申し上げます。

相川亮一コーチと私

山手学院中・高等学校サッカー部（二期）

西村 周

山手学院へ入学した中学一年時は「合気道部」に所属した。秋田への夏合宿など結構楽しいクラブだったが、二年に進級する春、部を指導していたコーチの退職によって廃部となった。道場となっていた部屋から見えるグラウンドで、活動していた「サッカー部」を「面白そうだな」とみていたことが、サッカー部への入部にきっかけだった。

それまで運動らしいことをしていなかった私は、サッカーのイロハも知らないまま入部し相川さんと出会った。「持久力なし」「瞬発力なし」「知識なし」の私がクラブの活動についていくのが、非常に辛かったのは言うまでもない。しかし、先輩や同級生、下級生と一緒に「チーム」で組み上げるゲーム、その結果が勝ち負けいずれであっても、その結果を共有する「サッカー」は、「皆と一緒にゲームをしたい」という気持ちを高めたのを覚えている。ルールがわかりだしたころ相川さんから指名がかかった。「西村、ラインズマン」と。

その時はチームの皆についていくために黙々とトレーニングに参加していたが

ゲームをより適切にコントロールするための「ラインズマン」への指名は、相川さんのひとつの教え方だったように思う。当時の自分にとって、ゲームに参加することと同じくらい「楽しい旗振り」だった。トレーニングは辛かったが、終わった後の爽快感は何とも言えなかった。他の部員についていくのに必死で、タックルの練習でも「思いつき」当たって皆に嫌われていた。が、全てが「皆についていくための修行」だった。上手くはなったが、そこそこ強い（反則？）タックルができる様になったように思う。

最後まで「ヘディング」「リフティング」はうまくならなかったし、ゲーム全体の組み立てにかかわる判断、どこへボールを出すか等、状況に応じた対応は最後まで向上することはなかった。ボールを追いかけることで精一杯で、状況を判断する視野と知識が多いに欠けていたことは当時から自覚していたことである。

いつからか覚えていないが、ゲームメンバーに指名されるようになった。三期生他の部員には、私よりもクレバーで身体能力やテクニク、視野の広い部員がいたから、必死にならざるを得なかった。いつそラインズマン指名のほうが良かったかもしれない。

私は現在「レジャーダイビング」業界に身を置いているが、ダイバー自身が自分の「身体能力・健康状態」を知らず、マニュアル化されたプログラムで「知

識」「経験」不足のまま認定され、「応用力(技)」が忘れ去られようとしている。

結果、同じ様な原因で死亡事故が起きる。身体活動と知識をもとにした「経験」の積み重ねで得られる「応用力(技)」は、マニュアルの行間に隠れてしまっている。これを伝えるのが指導者としての最大の役割ではないだろうか。

どの業界にもいえることだがマニュアル化された「形式知」には、本当の意味での「知識」は必要ない。しかし「その場で瞬時に判断、対処」するための「トレーニング(身体能力・知識・技術・経験)」に基づいた「応用力(技)」がなければ、目標を達成することはできない。そういう意味での「指導」本来の在り方、「基礎身体能力を高め、身体を使って覚え、知識を生かす」原点を、私に染み込ませてくれたのが「相川亮」コーチであった。

個人の「性格」「運動能力」「テクニク」「知識」を把握し、適時適切に「向上」させ、ゲームをする十一人をバランスよく配置し、十一人のより良い連携を作る事がコーチとしての「サッカー」指導の面白さではないかと手前勝手に思っている。コーチは自分の理想とする「チームの目標」にむけ「指導プラン」をたて実践する。中高生で指導を受けた私には辛かったが、当時の相川さんに

とってやりがいのある、その後の経歴への出発点であったのだろう。

山手学院を辞められた後の相川亮一氏の経歴は、恥ずかしながら葬儀の席上で聞くまで、全く知らなかった。唯一、休日にテレビをつけた時、桐蔭学園のベンチにいたのを見つけたぐらいである。

ずいぶん前になるが、横浜で相川さんと当時のサッカー部員の集まりがあったその際、私は相川さんに「基礎トレーニングがいかん重要であるか、指導の方法が理解できるようになりました」と言うと、相川さんは「こいつらに大きな声でどんどん言うてやれ」とボソボソつぶやきながらニコニコしていたのを思い出す。

これが相川さんにお会いした最後となった。「私にとっての相川さん」は、山手学院でのサッカー部コーチでしかなかったが、私の「今」へとつながる重要な出会いとして、決して忘れられない人である。

言葉は交わせなかったが「最後」のお見送りをできた事は、望外の幸せであった。相川さん、ありがとうございました。

最後に、山手学院在校中にサッカー部で私を励ましてくれた、先輩、同級後輩の皆に、そしてこの「追悼本」作成に尽力されたに皆様に、心からの御礼を申し上げます。

相川さんとともに四十二年 山手学院く読売クラブく山手学院

山手学院中・高等学校サッカー部（三期）
元読売サッカークラブコーチ、元山手学院中・高等学校サッカー部コーチ

市橋（旧姓水嶋）晶

◆中学生のときの出会い

自分がサッカーを始めたのは山手学院の中学一年生の途中。いまでは小学校からサッカーを始めるのが普通だが、当時は中学ではじめてボールを蹴るのは珍しくなかった。

小学生のときに東京五輪があつて、それがきっかけで第一次サッカーブームが起きた。そのときに小学校にサッカー部ができたが、いつのまにか、それが野球部になってしまった記憶がある。理由は指導者がいないから、だったはず…。

中学のときのコーチが相川さんだったが、その思い出は断片的なものしかない。

サッカー部に入ったばかりのころ、早くうまくなりたいと思つて、練習時間が終わったあとにグラウンドに居残つて、壁に向かってキックの練習をしていた。すると忘れ物をした相川さんが戻つてきて、足首の固定とか、立ち足の踏み込み

だとか、バックスイングの取り方だとかのキックの基本を教えてくれた。

当時の山手学院は中高一貫の全寮制の学校だった。寮の夕飯の時間（十八時～）になって、自習時間（十九時～）に入っても続けていたのでかなりの長い時間だったと思う。夕飯は食べ損なった。

それが個人的に教えを受けた最初の思い出だ。

その後も自分で居残り練習は続けていたが、相川さんに個人指導を受けることはなかった。自分は選手としては学年でもレギュラーになれるかどうかというレベルをさまよっていたので、あまり相手にされていなかったのだと思う。

◆サッカーノート

サッカーノートというのがあった。

同級生だった中心選手のサッカーノートにはびっしりと相川さんの書き込みがあるのだが、自分のには二、三行。子供心になんか差があるなと感じた記憶がある。まあ、自分の書き込みも一行ぐらいだから、当然と言えば当然だったのかもしれない。

技術と頭脳を駆使するサッカーという当時としては画期的な指導を受けていた

はずだが、練習メニューなどの記憶があまりない。チームについていくのがやつの選手だったから仕方がない。

ただ、たとえば右利きなのに左足でシュートを打てるようになったとか、左足でクロスを上げられるようになったとか、あるいはロングキックが体の大きな先輩たちよりも飛ぶようになったとか、ボレーシュートが上手になったとか、走力がのびたとか、自分なりに進歩の手応えを感じているときに、相川さんが、それを見てくれていることは子供心に感じていた。

そういうときにスタメンに抜擢されて試合に出してもらえることもあった。しかし、せっかくチャンスを与えられても、実戦になるとその成果を、まったく出せない。それで、またベンチを暖めることになったりした。

公式戦のとき。会場に着くところに名前を呼ばれると、試合に出してもらえるのではなく「紅茶とレモンを買ってこい」とかなんとか、そういう雑用を頼まれるだけ。しかし、子供にしてみれば、まったく名前を呼ばれないことに比べれば悪い気がしていなかったのは覚えている。

◆大ケガを治療してもらう

相川さんは山手学院ではサッカーコーチをやりながら、チューターという寮の

舎監をやっていた。

中学二年生のときに夜中に先輩のバイクをいたずらしていて大ケガをした。

夜だから保健室は開いていない。ひどい痛みの中、寮の相川さんの部屋まで担ぎ込まれた。膝から下は内出血で見る間にふくれあがってしまつて、まるで長靴を履いたかのようなだった。テーピングで固定をしてもらつて、何やら薬をもらつてその日は居室に帰つて寝た。痛くて朝まで眠れなくて、翌日は寝過ごして学校をサボつたのを覚えている。

午後になつて医務室に行つて、保健婦さん（看護師さん？）に見せたら「素人が治療なんて冗談じゃない」とひどく叱られた。なぜ救急車を呼ばなかったのだと問い詰められたが、夜中にバイクで遊んでいてケガしたなんて言ったら停学か退学だから言えるはずもない。

保健室では松葉杖だけ借りた。

そのまま相川さんの部屋に治療に通い続けて半年ぐらいで治つたのを覚えていゝる。相川さんの処置がよかったのか、若かったから治癒力があつたのか定かではない。

◆コーチ退任に大泣き

高校一年生の時に相川さんはサッカー部のコーチをやめた。正確には山手学院を退職した。その理由は知らないが、先輩、同級生、自分もみんな泣いていたのを覚えている。

相川さんの残した置き手紙があつて、それを先輩が読んでくれてみなでボロボロと泣いていたのだが、何と書いてあつたのかは覚えていない。

泣きながら何もかもが涙といっしょに流れ出して、なんで泣いているのかを忘れてしまうような空っぽの気持ちになったことを覚えている。

相川さんがやめたあとに、寮のその部屋に行くと英語のサッカー本がいろいろとあつた。

他にエリック・バッティの英語の本を手書きで半紙に写したファイルがあつた。どこかで借りて写したのだろう。コピー機が普及していない時代だった。

当時、日本で出版されているサッカーの本は少なく、大部の翻訳本の「チャナディのサッカー」が別格だった。自分は親に泣きついて「チャナディのサッカー」を買ってもらい、読んでいた。週刊誌が七十円とかいう時代に五千円以上した。自分はそういう普通でない、変な子供だったわけだ。

イギリスのサッカー評論家エリック・バッティを原書で読むというのは、かな

りの勉強家だったということだろうし、手書きで写本を作るなどは尋常な労力ではなかっただろう。

相川さんが山手を辞めたときに、自分もサッカー部を辞めてしまった。そのあとはふらふらしていたので、その後のサッカー部の仲間の苦労については知らない。

ふつうならそこで仲間とともに頑張るべきなのだろうが、あっさりと辞めてしまった。指導者を失った喪失感が大きすぎたのか、その状況から来る不安感に負けてしまったのか、その両方だったのかもしれない。

◆読売クラブで再び出会う

高三になって、仲間が受験で引退したときに、後輩に誘われてふつとグラウンドでボールを蹴った。端から見たらこれから受験というときに、あいつなにやってんだという感じだったと思う。担任の顔がひきつっていたのを思い出す。が、久々にボールを蹴ったときの感触は妙に充実していて、その後にサッカーに深入りするきっかけになったと感じている。

そのときに誘ってくれた後輩、そして出戻りを受け入れてくれた同級生、先輩顧問にはいくら感謝しても足りることはない。

大学受験で受かった学校には行かずに予備校通いをしているときに高校サッカー部のOBチームに参加した。

そのOBチーム行きつけのサッカーショップに張り紙で「サッカースクールコーチ募集（土日、読売クラブ）」とあった。聞けば、相川さんが読売クラブで仕事をしていて、サッカースクールのコーチを募集しているのだという。一緒にいた先輩がバイト代につられて応募するというので、浪人生だというのに応募した。

相川さんの面接があつて、自分だけ採用された。

約束通りであれば土日で二万円という当時としては破格のバイト代がもらえるはずだった。しかし、実際にもらえたのは、その四分の一。スクール生が増えたら額を上げるという、クラブの事務局長の話だったが、増えてもその約束は実行されなかった。

最初は土日のサッカースクールの指導だけ。対象は小学生。一応、チームもあつて六年生チームは読売新聞社主催の大会に春と夏に参加していたが、一回戦で0対10というスコアで負けるようなレベルだった。

それでも子供にサッカーを教えることは楽しかったので、受験生であることを忘れて通った。

平日のトップチームの練習に勝手に参加して、トップの選手の技を盗んでは子供たちに教えた。

相川さんに言われてスクールの選手たちのカルテを作った。それぞれの選手たちについてのコメントをコーチが書き記して情報を共有しようというものだった。そのころになると選手経験はさほどないのにサッカーコーチを目指すという自分のような変人が集まりはじめた。千野徹、吾妻俊治、遅れて竹本一彦らだった。

◆クラブユースの始まり

しばらくして、ユースチームを組織するという話になった。それまでもユースチームはあったが、組織としての形が整っていなかった。

そのころの日本のスポーツ界はアマチュアリズムが絶対で、目標はオリンピックだった。

欧州や南米のような、プロを含んだクラブは日本にはなく、プロチームの下のユースチームという概念自体が当時の日本サッカー界にはまったくなかった。

だから、中学校大会や高校選手権はあるが、クラブユースのチームが出場する

大会は影も形もなく、クラブのなかにチームは存在しても、外から見れば活動をしていないも同然だった。

そういう状況のなかでクラブユースを認知させようという計画である。

「予算はないが、やってよし」というのがクラブの方針だった。

安月給でも働く奴らがいるから手足はなんとかなる。あとから思うと、相川さんはそういう考えだったのだろうと思うのだが、読売クラブユースの始まりは日本のクラブサッカーの原初であり、そこに身を置けたのは至上の経験であった。

サッカーコーチは個人企業のようなものだ。チームを強くするために必要なものがあれば自分で作らなければならない。チームを作るのであれば、それが参加する大会を作るところから始めないとならない。そのように教えられた。

中学生年齢相当の「ジュニアユース」の担当になって、千野さんと大会作りの実務を手伝った。実際にはスポンサーをみつけるのが、一番たいへんで、その仕事は相川さんを始めた上のひとがやっていたわけだが……。

相川さんしてみれば、クラブ組織でプロを目指している読売クラブだから、ユースチームを作ろうという考えではなかったと思う。サッカーコーチとはチー

ムを強くするために、そういうこともするものだとか若いころから考えていて、それをたまたま読売クラブで実行したに過ぎないのだろう。

しかし、奇しくも読売クラブはそういった考え方を実行に移せる、当時としては日本で唯一の場所であつたのだ。

近くの中学生相当年齢のクラブチームを集めて「クラブユースリーグ」を創設した。

町田や相模原の方で中学生になっても、小学生のときに在籍していたスポーツ少年団でサッカーを続けるという選手が出始めたり、中学の部活と二股かける選手が出始めたりと、そういう時代だったのでいくつかのチームに声をかけて神奈川県を中心にリーグ戦を作った。

自分が山手学院サッカー部にいたときに通称「私立リーグ」と呼ばれる大会があつた。県内にある私立中学校サッカー部（当時七チーム）を集めて、当時としては画期的な年間を通じたリーグ戦をやるというものだった。

今でもその大会は続いているが、何もないところから各校のサッカー部の顧問当てに手紙を書き、交渉に行き、「私立リーグ」を創設したのは当時大学生だった相川さんである。

サッカーを良くするために、必要なものがなければ自分たちで作る。そういう考え方である。「私立リーグ」を作ったときの方法をクラブユースでも使ったわけだ。

◆全国クラブユース大会を創設

高校生相当年齢のユースのためには「全国クラブユース選手権」を創設した。協会の許可が下りないので当初は日本選手権と名乗れなかった。

中心は読売クラブユースと三菱養和SC。

三菱にはグループ企業社員の福利厚生のための「三菱養和会」という組織があり、東京の巣鴨にスポーツ施設を持っている。そこで子どもたちのクラブ組織として、一般の子どもたちも集めたサッカーチームを運営していた。企業内チームのトップ選手だったOBが指導者になるなど組織としてはとてもしっかりしているようにみえた。

三菱以外に歴史のある神戸FCや愛知FCなどが参加。年に一回夏休みの開催だった。

サッカー協会非公認で行われていたが、実際には、読売クラブとクラブOB、読売新聞社、日本テレビ、さらに一部の日本サッカー協会関係者などの後ろ盾があつてことが進んでいたようだった。が、現場の下働きだった自分がある程度の

ことを知ったのはかなりあとになってからのことで、当時はただただ凄いとしか思わなかった。

思い返してみれば「私立リーグ」創設にも後の神奈川県サッカー協会会長、鈴木中先生（当時の湘南高校サッカー部顧問）の後ろ盾があったのだろう。

相川さんは学生のときからそういうことを考えながら動ける人だったわけだ。

現場レベルで言えばチームを作り、大会を作り、スポンサーをつける。主審も地区の協会に頼んできちんと日当を払い、本格的に運営する。本格的な大会として運営することで子供たちのモチベーションを上げる。そして、ユースレベルでプロサッカーコーチになろうとする若い我々にもなんとか対価が出るようにする。

「プロサッカー」という言葉が日本サッカー界の中心にいたほとんどのひとたちから目の敵にされていた時代に、読売クラブの現場で一步一步、ヨーロッパと同じようなクラブユースの形、クラブチームの形ができていくのを目の当たりにした。

◆高校チームとの試合

高校チームをユースA、中学チームをユースBと名付けたのはこのときだったのちに小学生チームができて、それはユースSとした。

読売クラブ・ユースAチームの立ち上がりは近所の高校との練習試合だった。

試合前にミーティングもなく、アップをしたあとに「おまえらでメンバー決める」と選手を放り出し、相川さんは事務所にラインズマンフラッグを取りに戻って行った。

横で見ていた自分には顔がわかる選手の方が少ないという状況で口を挟める雰囲気でもない。相川さんが戻ってきたときには、ポジションなど、まったく決まっていなかった。

で、相川さんは「なんだ決まってるのか、それじゃウイングに笠井、ハーフに戸塚、左サイドバック都並であとはじゃんけん」と言ったように記憶する。

譲り合いだったり、奪い合いだったりが出てきて、ほかのポジションは、じゃんけんで決まり試合が始まった。

審判は「いちはし」（筆者）

当時の読売クラブのユース選手は、個人のテクニクは格段にうまかった。彼らとはじめて一緒に練習をしたときに、三対一をやっていると年上の自分が

全くボールに触れない。それぐらい上手くて、なんだこいつらと驚かされた。

当時の自分の知識では三対一であれば、パスコースを作るためにパスアンドゴーでパス角度を作るために開かなければならないはず。しかし、そうやって動く気配はまったくない。なのにボールを奪えない。

ところが、高校チームとの試合が始まったら、守りがまったく機能しないでロボロ。

開始早々に左サイドバック都並の裏にロングボールを入れられて、そこからのクロスでピンチの連続。なんせ、ポジショニングがめちゃくちゃ。

「都並、なにやってんだよ」とチームメイトからのクレームが飛ぶ。

正直、なんだこりやというのが印象。

◆戸塚、都並を見抜く

それで、戸塚が都並を呼び寄せてサイドバックのポジションの取り方をレクチャーしはじめた。地面に図を書いてああたこうだと教えている。

その後も都並の裏を狙われ続けたのだが、その修正が効き始めると五分もしないうちに左サイドを破られることはなくなった。裏にパスを出されることはなくなり、さらにウイングの足元のボールを都並が奪うようになった。

後の日本代表左サイドバックの誕生を目にしたわけだ。若いサッカーコーチとしては破格の経験をさせてもらったと思っっている。

都並を左サイドバックで起用した理由を、あとで相川さんに問い質すと「右サイドバックには松木がいるから」と言われた。

当時、すでにトップチームでポジションを獲得していた松木が右サイドバックにいたので、都並がトップチームでポジションを取るためには左サイドバックでないとならないという意味だ。都並、戸塚の黄金世代が中三から高一に上がったころの話である。

都並、戸塚らの才能に驚くとともに、それを見抜いていた相川さんの慧眼に感服するしかない。

しばらく後になって、アルゼンチンのサンロレンソが日本に来日したときにその監督が「ウイングで二番目の選手をサイドバックに抜擢する」という話をどこかで見たらしい。攻撃的サイドバックが活躍し始めた、当時の世界の流れで考えれば、都並のサイドバックも驚くにはあたらないう起用だったわけだが、そのときまで都並はウイングしかやったことがなかったらしいから、本人も周りも驚いたことだろう。

◆リーダースクールのほじまり

当時、現場で指導をすると言っても、自分が教わったことを子供にも教えるというだけだった。あるいは「チャナデイのサッカー」に書いてある練習をそのままやる。あるいはトップチームの選手のフエイントを真似てそのまま教える。あとは大半の時間が五対二とミニゲーム。

そんななかでサッカー協会がコーチングスクールを全国で始めることになった。当時はリーダースクールと呼ばれていた。その一期生として自分も神奈川で受講することになった。

神奈川の講師はむろんのこと相川さん。

実技は読売クラブのグラウンドか湘南高校のグラウンドまたは体育館。講義は湘南高校の教室。

読売クラブと湘南高校、自宅を往復する生活が続いた。三カ月ぐらいでかなりしっかりした内容だったという印象がある。

サッカー的な中身はあまり覚えていないが、怪我の救急処置とリハビリ、そこ

はしつかりと理解しておくべきだと教わった記憶がある。

いまでも思うのだが、コーチングスクールでは現場で必要な医学生理学の知識と救急法をしつかり教えて、サッカーの中身は自分で考えろでも構わないのではないか。コーチの数だけ、チームの数だけサッカーの形がある。サッカーとはそういうスポーツだと信じている。

◆またも大ケガで世話に

読売のユースチームを立ち上げたときに公式戦が少ないので神奈川の社会人リーグに登録した。社会人リーグなのでシーズン中は毎週やっているのだが、選手は高校の試験などで来られない時期もある。そのときには我々若手のユースコーチが試合に出た。

あるとき試合に出ていて、両サイドから同時にスライディングタックルを受けるといふひどい目にあい、着地ができずに左肘を脱臼してしまった。肘がどこかに飛んで行ってしまったかのような形になって目もあてられない状況だった。その脱臼をその場で整復してくれたのが相川さんだった。

開放性でなかったのが不幸中の幸いだったが、その日にあとから受診した整形外科医から「かなり上手いひとに整復してもらってラッキーだったね。そのひと柔道か何かやっているの？」と聞かれて驚いたことを記憶している。

自分はそこまではできないが、しかし、ユースレベルのコーチなんてそういうときの対応法を知っておくことが一番重要なのではと今でも思っている。
それにしても、相川さんには大ケガを二度も救われることになった。

◆ドイツへコーチ留学

そのリーダースクールで初級コーチの資格を取って、次は日本サッカー協会の研修でドイツに行かせてもらった。一ヵ月ほどの研修で費用は半分自分で、半分読売持ちだった。最初は全額自費でと言われたが、クラブが半額出す交渉も相川さんがしてくれた。

若いコーチをクラブで自前で育てようという考えを相川さんがもっていたのでクラブ側も納得してくれたのだと思う。

選手としてもコーチとしても実績は皆無だったが、日本協会に連れて行かれて当時の技術委員会のお偉方だった平木隆三さんの面談を受けて参加OKをもらった。

デュイスブルグのスポーツ・シュレーで三週間の合宿。初級コーチの資格をもらった。インストラクターが後にレッズの監督になったホルガー・オジェツクだったのが何とも微妙な記憶。スーパーバイザーはヴェルティ・フォクツだった。

現場で一から育ててもらって、資格も取らせてもらって、これから恩返しで奉公しなければならぬというときに家庭の事情で読売クラブを辞めることになった。

当時の笹波永光事務局長に伝えて、相川さんには伝えたのはそのあとだった。今にして思えば人間として順番を間違えているし、決断するよりも前に先ず相川さんに相談すべきことだった。思い出すと恥ずかしくなる。

◆山手学院のコーチに

それから大学に入り直して、卒業して、今の仕事（歯科医師）をするようになった。草サッカーを楽しみ、代表の試合を見に行くという程度しかサッカーとの接点がなくなつた。

やつと仕事で独立するという時期になって、山手学院サッカー部の同級生から電話がきた。高校サッカー部現役の指導をやらなかつたかという話だった。

総監督を相川さんをお願いして月一回ほど見に来てもらう。あとは自分と同級生の田所俊文で週に二回ずつチームを見に来て欲しいというものだった。

引き受けるときにかみさんに相談したときの言葉は「相川さんが本気でやるの

であれば、それに付き合うのであれば、おれは今の仕事（歯医者）を辞めることになるかもしれないけれど（「サッカーコーチが本業になるかもしれないけれど」、それでもいい?」というものだった）。

かみさんは「別にいいよ」と後押ししてくれた。自分にとっては相川さんというのはそれほど存在だったわけだ。

たとえ週末のパートタイムコーチでも、相川さんのもとで中途半端なやり方は許されない、と思った。

相川さんが、それでどう言う人ではないことは、分かっていたものの、自分自身の気持ちとしてサッカーで半端な取り組みを相川さんには見せられない。そういう考えだった。

読売クラブを辞めたときに信頼を裏切ることになり、しょうもない奴だと思われるたに違いない。そのときの借りを返さなければという気持ちがあった。

よく考えてみれば、自分が卒業した学校のチームの面倒を、他校（栄光学園）出身の相川さんに、見た目でもらおうというのだから、借りを作っているのはこちらの方だったのに…。

それから、途中の中断期間はあったものの、あわせて十一年の間、中学高校

サッカー部の面倒を見ることになった。

引き受けたころの山手学院は、大会に出れば一回戦負けが当たり前。年間の試合数が公式戦と練習試合をあわせて十試合足らずという状況だった。そのチームを神奈川県の一部リーグまで押し上げた。

市大会ベスト4、県大会ベスト8、選手権予選ベスト32というのが、自分が面倒を見たチームでの最良の結果。神奈川県のパイクを目指していたが、それは夢で終わった。

◆評価に減点法はない

相川さんにはその流れの中で幾度となくお世話になった。

サッカーコーチを目指す若い後輩のためにコーチングスクール受講のための推薦状を書いてももらったり、練習試合の相手をしてもらったりと有形無形のお世話になった。

若い後輩学生コーチとともに、ミッドナイトミーティングと称して毎週一回、町田のファミレスでチームについての話を重ねた時期もある。

相川さんがふだん指導している高校チームの試合や練習は何度となく見に行ったり、こちらのチームも何度となくみてもらった。

相川さんは、指導をしている選手に、たったひとつでも「切れる」ものがあれば、その長所を活かそうとしてくれる指導者だった。

ぶつきらぼうなところがあって、口を開けばかなりきつい台詞が出てくる。相川に誤解を受ける人なのではないかと思うのだが、そうやって振る舞うのを見ていても若い選手たちに対する愛情が見え隠れしているのが分かった。

相川さんは若い選手の評価をするときに減点法でないのだ。

ときに世間の評価が高い若い選手を「おれは良いとは思わない」と言葉では切って捨てることもあるのだが、それは、その選手が「下手だ」という意味ではない。ふつうのプレーヤーとしては、すぐれていても、サッカーで生きていくために必要な「切れる」ものを見せていないという意味だったのだと思う。

◆高校生の中村俊輔を評価

山手学院サッカー部を指導していたときに、公式戦で桐光学園とあたったことがある。

我々は相手にどんな選手がいるかなんて、まったく知らず、ただ単に強いことしか知らなかったのだが、相川さんは試合前から「おまえら、よく見て置けよ。きょうは将来の日本代表にギタギタにされるから」と笑いながら話していた。

試合は味方自陣ペナルティエリアに釘付けにされ、しかも、その狭いエリアでスルーパスを通しての失点が相次いだ。二回戦で○対九負け。そのスルーパスを出していた選手が中村俊輔だった。

それほど、高く買っていた中村俊輔がプロになって脚光を浴びていたころ、相川さんと話をするとき「どこがいいのかわからない」と批判を口にしていた。将来の日本を背負って立つ選手としては何かもの足りないということを言いたかったのかもしれない。

その試合で、山手学院がたった一回だけパスをつないで、相手ペナルティエリア付近まで攻め込み、シュートしたシーンがあった。そのとき相川さんはパスが一本一本通るのにあわせてうなずきながら、「うん、うん、うん、よし、それだそれをやればいいんだよ、この相手でもできるんだから」と嬉しそうに語った。チームの成長に眼を細める相川さんに選手たちに対する愛情を感じずにはいられなかった。

◆プロコーチへの道を切り開く
会えば延々とサッカーの話をする。

自分もいわゆる世間話が苦手で、誰とでも仕事の話か、サッカーの話ばかりをしている。いや、それしかできないから付き合いが狭いし、好き嫌いも激しい。で、指導をしているときはかなり言葉がきつい。なんか、そういうところは、このひとに似たのだろうかと思うことがある。

サッカーで困ったことがあれば、何か思いあぐねることがあれば相談に行く。

自分のサッカー人生においては常に道標となる偉大な先達者だった。

今でこそ、巷にはサッカーコーチになろうという若者が溢れているが、その昔企業サッカーが普通であった時代にプロサッカーコーチとしてメシを食うという道を底辺から切り開いた希有なひとであった。そして、後に続くとする我々のために道を作ってくれた人でもあった。

この人にしてもらったことを、後に続く若者たちに返したい。自分は志半ばで道を諦めたが、そう思い続けて週末パートタイムコーチとしての仕事を通じ、わずかながらでもその恩を返そうとしている。

相川さんとそんな話をしたことがある。

「恩ってなんだ。そんなふうに言われるようなこと、俺はお前に何もしてはいないよ」

そんなことはない、そんなことはないのだが…

「俺はサッカーには恩があると思っている。俺をここまで育ててくれたサッカーには恩があると。だから、何かしなくてはいけないと思つてやっているんだけど、それをお前がそういうふうにとらえるのであれば、俺は何も言わないよ。」

だから、そう、自分もその道を歩み続けなければならない。

永遠にサッカーの師であり続けてくれると信じていた。
なのに、こんなにも早く…

いつの日か、また、自分がグラウンドで笛を吹いていると、ポケットに手を突っ込み、辺りを見回しながら、遠くの方から歩いてくる相川さんの姿があるのではないか、そう思いながら週末をサッカーとともに過ごしていきます。

合掌

相川さん追悼座談会（山手学院中・高等学校サッカー部OB）

【開催】 二〇一一年四月十六日 【場所】横浜関内大徳寿

【参加者】 大島雅男（教諭・サッカー部顧問）・小林淳一（一期）・会田裕康（二期）

大平実（二期）・加藤滋（二期）・市橋晶（三期）・鈴木道子（三期）・三辻正仁（六期）

【司会】 田所俊文（三期）

田所 本日はお集まりいただきありがとうございます。昨年十二月に我々の母校山手学院サッカー部の忘年会に参加された相川さんが、一月に急逝されて皆さんも驚かれたことと思います。二次会のカラオケまで付き合ってくれて元気そうに見えたのですが、別れた後の電車の中ではやはり相当しんどそうだったらしいです。

今日は相川さんが早稲田の学生の頃にコーチングを受けていた皆さんに、若き日の相川さんにまつわる様々なエピソードなどを語っていただきたいと思います。

小林 相川さんは中学が出来た最初の年、一九六六年の冬頃に来たのかな。最初にグラウンドで見た印象は、「トップポかった。」なんだこの人、すげー人だなとは

思いました。まだ早稲田の二年生でしたね。一期生のサッカー部員は最初十五人ぐらいいたんだけど、そんなにひっちゃ気になってサッカーやりたくないしって相川さんがちゃんとコーチングするようになったら空中分解して最後は二人になった。

田所 大島先生は二年遅れてサッカー部の顧問になりましたが、どんな第一印象をおもちだったんですか？

大島 私はサッカーのことは何も知らなくて、レフリーはどうやるんでしょうかと聞いたたら、「ピーつと、強く笛を吹けばいいんだ」と一言。それではどうやって走るのかと聞いたたら、「ひざを上げて走るんです」と。それが一番印象に残っています。

田所 二期生は入学した時には既に相川さんがコーチでした。第一印象は？

加藤 いちばん最初にあった日、とっつきにくい感じがしました。一番印象に

残っているのは、練習にサッカースパイクを履いていったら、「お前何ふざけているんだ」と怒られて、その言い方が、中一だったからすごく傷ついたのね。サッカースパイク履いてつてなんで怒られるのかすごくへこみました。

当時はまだみんなで愚痴を言い合うほど親しくなかったので、一人で俺は嫌われたと思ってた。

まだ四月で、オリエンテーリングに出てサッカー部に決めて、新しいスパイクを買って、履いて行ったら怒られて…

会田 最初の練習の時に、俺のことを監督とかコーチと呼ぶな、相川さんと呼べと自分で言ったんですよ。俺はそんな身分じゃない。お前らと一緒にサッカーをやるんだと言ったんです。変った人だなと思って、歳を聞いたら大学生だということ、じゃあ兄貴的な感じで接するかなと思ったら結構気難しいのでとつきにくかったし、相川さんと呼べというわりには壁を感じてました。

小林 一期生が検見川で合宿をしたとき、すごい距離のクロスカントリーを走らされたんです。でも終わった後には部屋でおいちよかぶを教えてくれて、こうい

う一面もあるんだ、いい兄貴だなと。それからガラツと見方が変わりました。夏で、上半身裸でいいぞって、それで練習をしました。

市橋

僕は最初他の部活だったんですが、サッカーが一九六八年メキシコオリンピックでブームになっていたこともあって、サッカー部に替わったんです。サッカー部に入る前に、グラウンドの土手の上から見えていたら、練習終りで円陣を組んでミーティングをしているところで、一番偉そうに話してる人が一番小さくて誰なんだろう思っていました。

同学年は部員が二十二人いて、僕は体が小さかったんですが、一番小さい人がコーチというのにひかれて何も知らなかったけれどやってみようと思いました。最初の印象は、誰かが「相川先生」と呼んだら「先生じゃねえ」といきなり言われていたのを覚えています。

田所

マネージャーだったミチコの印象は？

鈴木

怖い人だなと。全然しゃべってくれなかった。

田所 僕は最初、相川さんを先輩だと思っていた。自己紹介も何もなくて、練習メニユーを英語で書いた紙を渡された時に始めてこの人がコーチなんだとわかったくらいです。最初の頃の練習はいい加減でした。なんとなく集まって、メニユーに書いてあることをやって、最後だけ集まってちよつと話を聞いて、帰るみたいな。ほとんどほったらかしだった。それが夏休みからいきなり厳しくなっただんです。みんな覚えてないですか？先輩のチームが夏の大会で大負けをして夏休み中に自宅に突然葉書が来て、休みだけ練習をやるって。それから突然練習が厳しくなっただんです。

小林 栄光学園に五対〇で負けた時かな。

田所 今思えば大負けしてなにか変化があったんでしょうね。相川さんの心に。

会田 俺が入った時は一期生がぎりぎり十一人いたんだけど、何度目かの練習の時にプールの横の芝生のところで一期生と相川さんと話をしていて、翌日の練習

には小林さん、加藤さんら四人しか出てこなかった。しばらくしたら渡部さんも川勝さんも来なくなつて二人になつた。

小林 言葉が少ないから誤解されてしまつたつてことがあるんだよ。とくに一期生とは。

加藤 すごくニヒルなんだよ。その印象がある。忘れもしない、第一回私立リーグで、慶応と桐蔭が同率で、両校が引き分けると山手が優勝つていうときがあつて、その試合を見に行つたんだよ。関東学院に。そしたら後半残り十分ぐらいの時に相川さんが、優勝したら喜ばいいんだつて帰っちゃつた。なんで相川さんは最後まで見ていかないのかな、きつと絶対どつか陰で見てるだろうつて話してた。あれはねすごく印象に残つてる。山手が優勝した瞬間にいなかったんだよ、グラウンドに。

田所 相川さんと加藤さんのエピソードはいろいろあるんですね。加藤さん三ツ沢での大切な試合サボつたでしょう。

加藤 違うよ。サボったんじゃない！ 三ツ沢球技場で、はじめて芝生のグラウンドで出来ることになって、小学生の遠足の前日と一緒に、わくわくして眠れないんだよ。眠れなくて試合に遅刻したんだ。で、後半少しだけ出してもらった。

会田 その試合は勝ったな。

田所 加藤さんが来なかったから僕はスタメンで出してもらったんです。いや、加藤さんはその試合結局来なかったんですよ。終わった後、みんなで連絡しなきゃと言っていたら、横で聞いてた相川さんが一言「加藤はくびだよ。」って言うって帰っちゃったんですよ。僕は加藤さんくびか！ オイオイって思ったの覚えてる。で、加藤さんは次の日来ただけど試合には出してもらえなくて、謝って、最後は許してもらったのを見てた。

会田 あの試合思い出すな。モンブランのシューズでつるつる滑って試合してたな。相川さんからはスパイクを絶対履くなって言われてた。中学生には履かせな

いつて。あの試合の後からスパイクが解禁になった。

田所 合宿にもよく行きましたよね。検見川、藤沢にもよく行きましたね、山中湖も。エピソードありますか？

会田 山中湖はタコ部屋だったけど楽しかったよ。

田所 途中渋滞で、着いたときは夕方六時近くで、もう今日は練習ないなってみんなで密かに喜んでいたら、夕食が終わって七時ごろ薄暗いグラウンドに出ろって言われて、それからめちやくちや走らされたんですよ。飯食ったばかりなのに。相川さんが先頭で一緒に走っているから何もいえない・・・終わった後にお前ら気を抜いているんじゃない！ と怒られた。

加藤 今日には練習なしだって、噂してたの聞こえたのかもしれないね。大島先生はずっと合宿に参加してましたね。

大島 うん、山中湖の合宿覚えてるよ。

田所 いきなり二〇〇mダッシュを始めたのはいつからでした？

加藤 おれたちが高校一年の時だと思う。やたら体力トレーニングがきつくなつて。雨の日とか走つてばかりでつらかったな。

田所 練習前、相川さんが時計を見ながらいきなり走りだしたんですよ。ゴールライン往復。相川さん変なことやってるな、何をやってるのかなって見てたら、二〇〇mダッシュのタイムを計ってた。

加藤 グラウンドに来るとき、手に何か持っているといいんだけど、何にも持っていないときは走りなんだよ。紙があるときはフォーマেশョンの確認とかなんだけど何もないときは絶対走りなんだよ。いやだったなあ。今日は手に何か持ってるかを最初にチェックしてたよ。

田所 相川さんって厳しかったけど怒らなかつたじゃないですか。怒鳴ったことなかつた。

大平 あの人は笑いながら怒るんだ。おもしろいんだよ。

田所 大平さんがミーティング中にふざけて腕を折ってギブスして練習に出ていた同級生の手をひねったら、相川さんが大平なにやっつてんだ！ グラウンド走って来いって。珍しかったですね。相川さんが大きな声で怒るのは。

市橋 相川さんてクールそうだけどちゃんと部員を見ていた。一度、みんなが練習終わってから一人でボールを蹴っていたら、忘れ物をして戻ってきた相川さんが一時間ぐらいずっと教えてくれたということがあつた。その後そういう個人レッスンみたいなのはなかつたけど、やつぱり見るところは見てるんだなど。見られてるってのは子供ながらにもずっと感じてた。

読売クラブでも他の高校でも、コーチの人が相川さんは何も教えてないとか、選手の中にもなにも教わってないって言う人がいて、俺も山手時代に直接何か言

われたのはその一回だけで、あとは雑用係だったっていう思い出しかない。

でもいつも見ててくれてたんだと思う。そういえば都並（元ヴェルディ）は相川さんに左サイドバックにコンバートされたんだけど、その日の試合のメンバーを決めるのに最初はじゃんけんでポジションを決めさせてましたが、そのなかで都並は左サイドバック、戸塚はセンターハーフと彼らを含めて三人だけは指名していた。相川さんは都並を最初から左のサイドバックにするつもりだったってその後に関きました。

俺なんか山手の試合でスタメンなんて数試合しかないんだけど、それでもちよつと練習でいいことをすると使ってもらえた。土曜日に山手で試合がある前日の金曜日にミニゲームをやったとき、二期生のレギュラーは手抜きをしてたんですよ。その横を一生懸命走っていたら次の日レギュラーのかわりにスタメンで試合に出されたんです。前半だけで代わったけど。選手をちゃんと見ていいところがあれば拾ってくれて、なんかそういう人でしたね。

田所 そういうところは厳しかったですよ。レギュラーでも一日でも練習休むと試合に出さないと。ただ練習内容からすると、今思えば、あんなに最初から

体力練習やられたらもう技術練習なんかできないよね。足がガクガクして。あのころの相川さんはまだコーチとしては過渡期だったのかな。

小林 大学生になって相川さんを訪ねて行ったときに横浜のハマボウルのうらの焼き肉屋に連れてつてもらったね。二人でビールガンガン飲んでさ、相川さんこれなんていう料理ですか？ って言ったら、これか？ これは朝鮮料理だつて言つてさ。焼肉屋なんだよね、今思えば。うまかったね。相川さんて肉が来るといっぺんにみんなのせちやうんです。五枚ぐらい重ねて下から焼けたから食えて。蒸し焼きなんです。

加藤 大船の焼肉屋にみんなを連れて行ってくれたよね。冬休みの練習の後。ボート出たとかでに全員にごちそうしてくれた。

大平 合宿の途中で鎌倉の海にも行ったな。モノレールに乗って。サッカーパンツで泳いだね。夏の合宿は暑くて辛かったけど、あれは楽しかった。

市橋 冬の雨の中散々走らされた後、肉まん買ってくれましたね。そういう氣遣いもあつた。

大島 私は一回勝手に試合組んだら怒られた。やめてくださいって。栄光と試合してたら途中で来て、怒られた。ちよつと困るつて。

市橋 コーチがいないときに試合をするなっていう人だったから。もちろん今思えば当たり前。私立リーグでキックオフの時間に相川さん来なくて、始めちゃつたら怒られたね。

田所 おれキャプテンだったからめちやくちや怒られた。

市橋 お前たちは司令官がいないのに戦争を始めるのかつて。

会田 俺はね、一回相川さんを恨んだことがある。高校選手権か、総体の予選時にベスト8になるつていうとき、会場の日大藤沢のグラウンドが大雨で水浸し

だった。ボールが浮いているんですよ。その時の相手は鎌学で、絶対勝てるってチーム全員思っていた。チーム絶好調で。これ優勝できるんじゃないかなって思ってた。試合前に相川さんが相手の監督と話してるのが聞こえて、相手の監督はこんなコンディションだからやめましようって言うてる。ところが相川さんはやるぞって。サッカーは雪が降ろうが檜が降ろうがやるんだ、どんなコンディションでもやるんだと言って試合を強行したんです。普通のコンディションでやらせてくれたら勝てたのに。最後に浮いたボールを入れられて負けた。我々も何度も何度もいいシュートを打つても止まってしまうんです。サッカーじゃなかったですね。止めててくれたらなあ。

会田 我々のサッカーは個人技でパスのサッカーだったのに、あのグラウンドでやれっていうことは…

大平 おれは最初体も小さくて運動神経もよくなって、二軍のゴールキーパーやらされたんだよ。なんで俺はこんなに小さいのにキーパーやらされるんだろうと思ってるんだことがあった。たぶんお前はもうサッカーやめてほかのスポーツやったほうがいいっていうことだったのかな。その時はそういう思いをしたね。

田所　でも相川さんってそういうところよく見てて、社会人になってからですけど、大平さんの話が出て、「大平もいろいろ苦労してるからな」って褒めていたんです。ちゃんと見てるんですよ。口は悪いけど。

加藤　俺は寮で後輩いじめて自宅謹慎や停寮になったことがある。実は寮長からも部活も辞めろって言われたことがあったんです。俺にとつて一番厳しいことは授業に出ないなんて事じゃなくてサッカーをやれないことで、その時の状況を相川さんに知らせに行っただけです。実は暴力事件で謹慎・停寮になりましたって言ったら、学業とサッカーは違うし、人間得手不得手があるんだから不得手だったら得手を伸ばせっていうようなことを言われて全く怒られなかったんですよ。その時、チームワークっていうものを、これで何かあったらみんなに迷惑かけてまづいになっていうことを子ども心に思ったんですよ。怒らないで話を聞いてくれたから嬉しかったし、大切なことに気がついた。

田所　僕は中二の時に実家が火事になって、いろいろ落ち込んでいて、その時に

相川さんに練習終りに呼ばれて、二時間ぐらい一対一でいろんな話をして、サツカーだけじゃなく人生の話とかになって、その時からこの人はすごいなと思ったんです。授業で尊敬する人は誰ですかって設問があつて、相川亮一って書きました。それ以来何十年も尊敬する人物なんて聞かれたことないけど、人生で一度だけ尊敬する人は、「相川亮一」って書きました。

市橋 田所はよく相川さんのところへ行つてたよな。田所、竹本いないなと思つて相川さんのところに行くと話している声が聞こえて、とてもこれには参加できないなつて思つてた。

会田 三期生はかわいがられてたもんな。

会田 これは相川さんの置手紙です。僕らが高校二年の秋に、これだけ置いて辞めて、いなくなつたんです。

田所 みなさんは相川さんが辞めたきつかけになつた出来事を知っているんです

か？

会田 事実は知らないけど、風の噂では体育主任のH先生とケンカしたって。

田所 そうらしいですね。酔ったH先生がお前の指導はどうかのこのうのってからんできて、激論になって辞めたらしいです。

小林 大島先生は何か聞いてませんか。どう思いました。

大島 何も聞いてなかったから「ああ、そうかな」って。

小林 止めるとか、説得に行くとか…

大島 天野くんが生物室に来て、もう一回顧問をやってくれって言われて。たぶんその前に顧問を外されてたんだよ。で、もう一回お願いしますって言われたんだよ。

大平 俺はアメリカの留学先で聞いてびっくりした。なんでなんだって？

加藤 なんでだ？ とか止めようとか？ とかそういう先生とか生徒はいなかったのかな？ 誰も。

会田 そんな時間なかっただろう。いきなりいなくなったから。相談も何もなく。

田所 サッカー部員みんなで教室に集まりましたね。

市橋 誰かがこの手紙を読んでもくれたのを覚えてる。みんなでひどく泣いた後で飯を食いに行つて、サッカー部が全員泣いてるよって言われて。

会田 みんなを集めてキャプテンが手紙を読んだんじゃない。その時のキャプテンは加藤だよ。

加藤 なんの行動もしなかったのかな。不思議だよな。

田所 加藤さんが感極まっていたのを覚えてます。二期生の井上さんが相川さんの自宅まで直談判に行こうと提案したり。松信校長は実際説得に行かれたんですよ。そうしたら相川さんがいなくてお父さんに会ったらお父さんすごく立派な人だったと、後年聞きました。

大平 卒業した後、よみうりランドで少年サッカースクールの合宿にスクールのコーチとして行ったことがある。竹本と市橋もいたよね。あれはどういう経路でそうなったのかね。大学二年か三年のころ。そのころ相川さんは読売のコーチをやってたんでしょ？

市橋 よみうりのサッカースクールじゃなくて、どこかのチームを預かったと思うんだけど。

大平 よみうりランドの夏合宿に来てたチームのコーチしてたのか？ 竹本と

市橋と、なんで俺が入っていたか？ 不思議だな。

田所 相川さんが山手を辞めて、サッカー部はずっと自分たちだけでやってたんだけど、時々連絡はとっていて、相談したらよみうりランドでの冬休みの合宿を組んでくれた。合宿の後でハマボウルに呼ばれて「またお前たちのコーチをやってやる」って言われた。金はないだろうからコーヒー一杯でいいって。それから時々ミーティングや試合に来てくれるようになったんです。

加藤 おれは辞めた後の付き合いはない。何年か前に竹本と小林さんと一緒に赤坂で久しぶりに飲んだことがあったくらいで。

会田 俺は卒業以来付き合いは全然なかった。

三辻 私は中一の時半年ぐらいだったから。どこの部活に入ろうかと考えていたら、朝、港南台のほうに走ってく人がいて、それが相川さんだったんです。誰だろうと思っていて、それが第一印象です。あまり見てもらわないうちにいく

なっちゃったから。

OBのチームでよみうりランドで試合をやったことありましたよね。OBのチームとジュニアユースの試合で当時中三の都並がいたかな。高二か高三の時に連れて行ってもらいました。

田所 それは市橋が絡んでるんじゃない。

市橋 おれはその時はユースチームのコーチを始めたころだったからね。

田所 では、最後に皆さんにとって相川さんはどういう人だったのか？一言ずつ聞かせてください。

小林 イングランドにロニーシン普森っていうゴールキーパーがいて、ロニーシン普森っていうひとは派手さはないけど、ボールを抱えた顔がすごいんですよ。相川さんがサッカーマガジンか何かの切り抜きをサッカーノート（※当時あった選手と相川さんの連絡ノート）に貼ってくれて、お前これを見ろって。

ゴールキーパーっていうのは絶対に入れさせないんだっていう気迫がここには満ち溢れている。お前もそういうゴールキーパーになれって。それがすごく印象に残っていて、それをいつでも思っていました。相川さんっていうのは私にとって兄貴みtainな存在だったね。私も息子のチームのコーチをしていたときに、相川さんをまねてこうやって動くんだって矢印書いてボールの絵を描いたりして子供に教えていた。精神的なものも、相川さんからの受け売りなんだけれど子供たちに教えたり、人生の師っていう人だったかな。

加藤 最後はプレーの話で締めくくりたいんですけど、俺はサッカーノートでは厳しく怒られることが多くて、その中で、チームを作る上でプレーでチームを強くするってこともあるけど、お前に求めているのはそんなことじゃないって書かれていたのを今思い出しました。お前に求めているのはチームを引っ張っていくことだっていうようなことが書いてあった。それとよく覚えているのは、俺はキック力があつたから、サイドチェンジを一発でやれっていうのを課題にされていた時期があつた。それで、やたらと頻繁にやったら、おまえそれじゃ意味がない、ここぞっていう時にやって初めてサイドチェンジが利くのであって、簡単に

手の内を見せるなって言われたことを覚えてるね。サッカーのプレーのことだけじゃなくて、自分の武器を常に見せてたら警戒される、ここぞっていう時に見せてはじめて有効なんだと。その時理解できていれば、今もつとすばらしい人間になつてたと思うんだけど・・・ありがたい人でした。

会田 あこがれの兄貴みたいな存在でしたね、かつこよくて。高校時代を思い出すと。僕が早稲田の政経に行きたいって思ったのは、相川さんが早稲田の政経だったんだよね、進学先を決める時に、担任の先生からなんで会田は国立を受けないんだって言われたときに、いや僕は絶対に早稲田の政経に行きたいんですって言い張った覚えがあります。結構あこがれていて、あの人みたいな生きかたをしたくなって、あこがれた時代がありました。辞めたときの置手紙にもあるけど自分が必要と思われるところじゃないと人は生きていけないってよく言ってますよね。そんな言葉を常に思い出しているし、社会人になつてからもその言葉は役にたつて、上の人間になつた時もよく使わせてもらつたことも思い出します。もう一つは、高い目標を持てと。高い目標を持つて自分に足りないところを見つければ、それをやるのが成長につながると言われたことがすごく印象に残ってい

て、今思うと僕の人生の師だったなと。大げさですけど、今だから言えることです。自分が必要とされるところに行け、とか自分を変えろ、とかいうことは会社の研修で同じことを言われて愕然としたんです。相川さんってそういう人だったなと感じたことを思いましたね。

大平 相川さんはサッカーに対する姿勢がすごくまじめで、こんなにサッカーのことを愛して勉強して、打ち込める人がいるんだとと感じてた。会田の場合はサッカーノートに一枚半くらい書いてくれてるけど、僕の場合は頑張れとかね、技術的なことはなくて一、二行だけ。でも山手祭でほかの学校と試合をやった時に、僕は出られるような選手じゃなかったのに後半五分か一〇分出してもらった思い出があります。ニヒルだけどそういう温情もあった。

市橋 今の太平さんのサッカーノートのことを聞いて安心しました。一行二行はおれだけじゃなかったって（笑）。竹本とか田所のサッカーノートはぎっしりなのに何で俺のはって、時にはゼロで戻ってきたこともあって、子供心にもひどいなって思っていた。それでもどこかで見ていて、どこかで使ってくれた。ある時

葉書をもらって、当時のシャルケにフィッシャーっていうボレーシュートがすごい選手がいて、そいつのまねをしてボレーの練習をしていたら、それはいつ完成するんだ、試合で使えるようになるのはいつだって書いてあって、自分だったらハーフをやっていたらミドルシュートの練習をするんだけど、それぞれの考えがあるんだろうからって書いてあった。

遊びでボレーとかオーバーヘッドキックの練習をしていただけなのにそういうのをちゃんと見ててくれたんだなって。

あとは、あの人がいなければ読売クラブにも行けてないしコーチの資格も取れてないし、そのあと山手の指導をしている時もそれ以外にも指導に行ってる時も必ず近くにいてくれた人だったので、人生の道標みたいなものだったんですね。消えちゃってどうしたらいいんだって感じですけど。

大島 私もう意外と影響受けてたんだよ。相川さんのまねをして結婚するまで腕時計をずっと内側に向けてしていた。結婚した時うちの母ちゃんに何その時計って言われて辞めたけど。もう一つ印象に残っているのは山手の公式ゲームがあると、必ず前のゲームも見ているんですね。あと言葉の使い方がすごくまいんだ

よね。

相川さんの残したいいくつかの言葉を今のサッカー部にも残してます。すごく考えさせるような言葉をあちらこちらに残してくれた。そういう印象がありました。

田所 「自分が必要とされるところに行け」とか「苦しいときに頑張らないでいつ頑張るんだ？」ってよく言っていましたよね。まだまだたくさん教えてもらえることがあったのに、お亡くなりになって残念です。ご冥福をお祈りします。

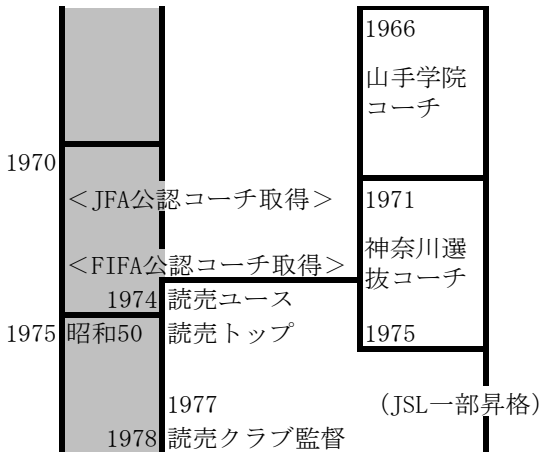
◇ 山手学院中・高等学校⇨横浜の私立中学・高等学校 当時は珍しく全寮制の学校で、相川さんが舎監を務めた時期もあり、学校創立の一九六六年から一九七一年までサッカー部のコーチを務めた。

第一部 相川コーチに捧ぐ

三章 神奈川県サッカー協会関係

※ 一九七一年～一九七六年

プロサッカーコーチとしての志



サッカーコーチに没頭した相川は、母校栄光学園の在る湘南地区での活動にも貢献し、当時の神奈川県サッカー協会幹部三村恪一氏や鈴木中氏に見い出され、一九七一年和歌山国体選抜から五年間にわたり選手の育成に努めた。当時の選拔選手の中から早野、大友、都並、戸塚、小柴ら後にJリーグでも活躍した選手を多数育てた。一方、JFAの主催するコーチングスクールに参加し平木隆三氏と、またテヘランで開催されたFIFAアジアコーチングスクールでクラマー氏と運命の出会いを果たした。

鬼才

神奈川県サッカー協会 技術委員会委員

三村 恪一

未だトレセンなど未発達の時代、

神奈川の果て地に遊ぶ原石を見つけ出した時の 頼み宛先が彼。

随分と迷惑をかけた。みんなが認めるいい選手ならまだしも、

サッカーはスライディングタックルだと思い込んでいた欲求不満児。

キーパーまでドリブルで抜けると思ひ込んでいたサッカー小僧。

土砂降り雨がなければ話にならない 水中心取り虫。

よくも日の丸を付けさせてくれたと 感謝いっぱい。

自称クラマーの弟子だが、アフリカの野生を引き出して世に出たフィリッパ・トルシェの相棒として、読売クラブの野人を率いた相川君を、彼と共に二〇〇二年のワールドカップで闘わせたかった思いが今でも残る。

ナイーブさをプライドの傘で包んだ神奈川の先人で、鬼才の残した功績は、「歴史の一ページとして記録に値するものだ」

相川亮一君を偲ぶ会（報告）

神奈川県サッカー協会 名誉会長
元神奈川県立湘南高校サッカー部 監督

鈴木 中

標記偲ぶ会を二〇一一年四月一日（藤沢のグランドホテル）三十二名で举行了。どちらかと言うと寂しいというより楽しい雰囲気の会であった。資料にあるように相川君がはじめて指導したメンバーで、昭和四十年代の神奈川県高校選抜選手を永い間指導して関東大会に臨み、代表権をとって本大会に出場したメンバーであった。自分のチームからはなれて一緒に生活した仲間と何十年ぶりの対面は、本当に懐かしい良い会であった。そして彼と交流のあった県協会関係者が出席者の約半数であった。

式次第にあるように最初に大震災の犠牲者と相川君の御霊に「黙祷」を捧げその後「三村恪一さん」の（挨拶）、「鈴木中」の（弔辞＋ε）「湯浅健二君」の（クラマーさんの手紙の紹介）、「松本光弘さん」の（テヘランの思い出話）、そして「宇野勝会長」の（献杯）でセレモニーはスタートした。

会の司会も私から青木君（神奈川県サッカー協会 専務理事・昭和四九年選手）にバトンタッチし、歓談に入り昭和四十六・五十年の指導者のスピーチ、国体神奈川県選拔選手全員のスピーチでアルコールも入り明るい雰囲気のお揃い会であった。

会場は（添付作品にある）正面中央に相川君の遺影、両側に最初と最後の彼との出会いであった「湘南高校グラウンド」と、合宿でよく使用した「体育センターグリーンハウス」の水彩画、（鈴木中作）、そして写真は「二〇〇二年六月二〇日クラマーさん講演会・県協会会議室」と「二七回・鹿児島国体の試合後の写真」を飾り、国体の選手たちは四十数年前の若き日の我が身を懐かしく眺めていた。

彼の評価は色々あるが私は素直なよい指導者だったと高く評価している。添付資料の五十・六十周年記念誌、に書かれた技術委員会の報告書を読むと、当時委員長が理解に苦しむ彼独特の文章で編集委員が困っていたのが懐かしく思い出される。

参加者は植木、早野、大友、・・・皆さん五十歳半ばでそれぞれの社会の中心の立場で活躍している頼もしい方ばかりだった。弔辞の中にも書いたが、多くの彼の指導を受けた神奈川県の高校・中学の教員として活躍している方、全日本選手として華々しくサッカー界で活躍してきた方のスピーチは素晴らしかった。そして最後に出席者の記念写真の撮影で幕を閉じた。

最後になるが、彼の行動力は神奈川県、いや日本のサッカー界においても大きな功績を残し、歴史に残る偉大なサッカー指導者として忘れられない存在であった事を記録しておきたい。

無言のアピール

サッカー解説者

元横浜Fマリノス、柏レイソル、ガンバ大阪 監督、元神奈川県選抜選手

早野 宏史

私と相川氏との出会いは約四十年前の高校一年の時でした。名も無い県立高校の右も左も分らない選手に指導をして頂いた事は今も鮮明に残っています。現在もサッカーに携わってられる事はその時の影響が多大であると思っています。

高一の国体選考合宿が善行体育センターで夏に行われた時の事は今でも記憶の中に残っています。肉体的にはきつく、しかし頭は楽しかった合宿でした。基本的なTRでしたが相川氏は多くを語ると言うよりやる事をしっかり見極めていた印象があります。（我儘な自分が聞いていなかっただけかも・・・）その中でもLook upは印象的でした。左右の背後を見てボールに寄ると言う作業ですがこの合宿で実感を得ました。それは大学生との試合で相手の動きやスペース、又考えま

で分った事で新しい何かが見えた事でした。

試合が終わって相川氏と話すと半笑いでアドバイスを受けた事を思い出します。

又その合宿でゴールラインからゴールラインを十六秒、戻りを四十五秒のTRでその当時やった事も無い中、合宿で体がきつい所我儘な私は、無理と考えていました。が相川氏は選手の先頭に立ちタイムを計りながら走っていました。無言のアピールは選手達には有無を言わせないものがありました。私がマリノスのファーム等で同じ行動をとっていた事を思うと影響は奥深くに残っていたのでしよう。

その年の国体は怪我で直前に辞退したが、翌年も相川氏の指導を受け千葉国体ではベスト8になりました。しかし本大会では相川氏の姿はありませんでした。FIFAアジアコーチングライセンス取得の為テヘランに同時期に言っていたと聞きました。県協会の方の今後の為にと言う事でかなり悩まれて決断したと聞きました。我々は初戦から相川氏を含め闘えと、実際その思いも持って闘いました。この様な情緒的部分は相川氏にとって本心は兎も角得意の半笑いの範疇になる気がします。

大学一年の時には手紙を頂きました。簡単に言うところ、ドリブルをするなら二人、三人を抜くつもりで、何なら十一人を抜く位で・・・と言う内容ですが、その

大学の一年がやった場合現在の顔とは別な物になっていたかも……。 (ジョークです。) その頃の大学を相川氏が知らない訳も無く、多分自分を忘れず、自分のプレーを見失わずというメッセージと伝わりました。

読売監督時代にランドで会った時、挨拶に行くところの得意の半笑いでクールに本当に頑張っているのか？ 俺はもう指導出来ないからなアと短い言葉だけでした。しかしその前にはたった一人の選手にシュート TRをしているのを見ていました。(多分FWの岡島選手だったと記憶していますが) その当時の読売クラブで全体練習が出来ない選手を自らTRさせる。俺も現状のベストをやっているぞ！ と。。。

昔話も無く短い時間でしたが大学に行った後もあの相川氏に変わりが無いと思えました。選手として初めての指導と言って良い物を受けた事は最初に言った様に私のサッカー人生に於いて濃く残っている。相川氏の総ては勿論見えていた訳ではないが、その一部分でも触れられた事は決して小さい事では無いと今でも感じています。

相川さんの思い出

神奈川県立鎌倉高校サッカー部 監督
元神奈川県選抜選手
小柴 健司

突然の訃報に驚きました。

相川さんのご逝去を悼み、謹んでお悔やみ申しあげます。
心からご冥福をお祈りいたします。

私が相川さんと始めて出会ったのは高校二年生の時でした。

（なんと四十年前になるのですね！）

ちやうど私が高校一年生の時から、国体少年の部は各県代表校一校出場から各県の選拔選手方式に変更となりました。私が二年生になり再び国体の選拔選手に選ばれた時、相川さんがコーチとして私たちの指導に参加することになりました。今で言うフィジカルコーチの役割も担っていたのではないのでしょうか。練習前のアップやブラジル体操など真新しい事がとても新鮮だったことを思い出します。そして、一番印象に残っていることが「走り」です。

相川さんは速いのです。

陸上の選手かと思いました。とにかく走るフォームがカッコ良く、そして速い。いつも練習の最後にインターバルトレーニングとして一〇〇mを十本走りました。一緒に走らなくてもいいのに、笛を鳴らしながらいつも一緒に走ります。それもトップで……。

そして我々選手に「俺を抜いたら終わり……」と、すごく嬉しい誘い。

だけど相手は速い。先輩から「お前、行け！」と命令されて、残された力を振り絞り挑戦するのですが勝てません。

次は「早野行け！」また勝てません。順番に違う選手がアタックするけど誰も勝てない。

結局、いつも十本走らされたのです。笛だけ鳴らして走らされるよりも一緒に走ってもらえたことを今とても感謝しています。だって気を抜けませんから……。

辛いながらもその時真面目に感じました。一緒におなじことがやれる事の大切さ……！見本を見せて納得させることの大切さ……！「走る」ことは誰一人として勝てなかった。きついから嫌だったけど、いつの間にか必死に走っていた。

悔しかったけど、すごいと思いました。そして、自分もいつか指導者になった
ら一緒に走ってやろうと…。

私の大学時代、そして日立製作所では、相川さんの所属する読売とよく試合を
しました。色々な所で出会い、相川さんの指導する姿を見てきました。まだまだ
これから、サッカー界の中心スタッフとして、今まで培ってこられたノウハウを
神奈川から日本全国に発信していただきたいと思っていましたので貴重な方を失
い、残念で仕方ありません。

少しでも相川さんの意思を継ぎ神奈川のサッカーを盛り上げて行きたいと思っ
ています。

相川さんありがとうございました。

相川さんの思い出

昭和五十年三重国体 神奈川県国体選抜選手

神奈川県立湘南高校サッカー部 卒業生

八木啓太

相川さんとの出会いは一九七五年、高校二年の夏であった。自分にとってはそれだけでも凄いことだった読売の天然芝。国体選抜の練習開始時に、理知的な顔、外人のような身振り手振り、その時相川さんがはいていたサッカーパンツの鮮やかな黄色とともに初対面のシーンとして強く記憶に残っている。その近寄りがない雰囲気は「先生方」とは異質のもので、これがFIFA公認プロコーチか！という畏敬が先行した。そしてその肩書きが本物であることをすぐに実感した。

決まり文句は「No! サッカー違う! (それはサッカーじゃない)」と「Goal! それはサッカー」。プレーや動き方の一つ一つがサッカーか、サッカーじゃないかという相川さんのプロの物差しで明確に評された。十七歳の少年には戸惑いもあったが、それ以上にワクワクしたことを懐かしく思い起こす。その「物差し」は世界（ヨーロッパ）のサッカーセオリーに通じているんだというこ

れまでとは異次元の刺激や満足感であった。

当時相川さんはほとんど笑わなかった。それだけに稀に出るニヤリというはにかみ笑いに妙に親しみを感じた。でもやはりキツネ目は常にクールで、高校生相手でもコーチと選手の距離は計算どおり（多分）にコントロールされていて、この関係も何だかプロっぽくて気に入っていた。集められた選抜チームは同じ二年生も多く、高校名に捉われない個性を重視していたように思う。しかし、相川さんの目指すところに我々はチームとして到達できず、関東予選で敗退。国体本大会に行けないという屈辱を味わった。神奈川に帰る前に古河市の食堂でご馳走になり、そこで相川さんは黙りこくる我々を前にこのようなことを話したのを臍げながら記憶している。「全責任はオレにある。コーチとはそういうものだ。やろうとしてきたことは間違っていない。オマエたちはよくやった。ただ時間が少し足りなかった。」

翌年は何とか関東を抜け、念願の国体（佐賀）に出場したが、そこに相川さんはいなかった、、、

ごく短期間であつたが受けた薫陶はその後の自分のサッカー人生の中で生き続けた。しかし実際にお会いすることはそれからずっとなかった。

再会は古河の敗戦から二十数年を経て、自分も四十を少し越えた頃だった。

互いにジュニア世代のコーチをやっていた土屋君（七五年選抜メンバーGK）とともに「相川講師」による単発のコーチング勉強会に参加し、終了後、酒を飲んだ。

高校時代は絶対的で近寄りがたい存在だった相川さんと盃を交わすことは想像外のことで初めは変な感じだった。ネクタイ鉢巻でカラオケを熱唱することもあり、昔のイメージとのコントラストがなぜか嬉しかった。

その後も、鈴木中先生と相川コーチを囲む会のような形で度々主席を共にさせて頂いたが、飲むほどに時間は往きつ戻りつ、相川さんのサッカー談義は昔のドライさは残しつつも、笑顔で熱っぽく常にサッカーの「今」を語っていた。相川さんは「理」に対しての「情」、スピリットの部分もかなり強調されていた。理にかなった精神の持ちようとも言おうか、お会いすればするほど情理併せ持った奥の深い方とあらためて尊敬の念を深めていった。

そんな有難いお付き合いも最近の間が空くようになり、かなりご無沙汰していた今年の二月。突然の悲報に接し茫然とした。早過ぎる。あの相川節で互いにもっと年寄りになるまで、時代時代の「サッカーの今」を聞き続けたかった。

「遺志を継ぎ」といつても自分がサッカー界に貢献できることはさしてない。せめて、相川さんは「それはもはやサッカーじゃない」と笑うだろうが、これから当時の仲間たちと一緒にボールを蹴り続けたいと思うばかりである。

来週、初マスターズで古河に三十六年振りに行つて来ます。

相川さん、本当にありがとうございました。

※ 資料

「相川亮一君を偲ぶ会」

開催日時：2011 年 4 月 14 日

司会 鈴木中・青木伸之

- 1 黙祷 (東日本大震災の犠牲者と相川君の御霊に対し)
- 2 挨拶 発起人 三村恪一
弔辞 鈴木中
- 3 クラマーさんからのメッセージ紹介 湯浅健二
- 4 献杯 宇野 勝
- 5 来賓挨拶 松本光弘(元筑波大学教授)
- 6 懇談 参加者から一言(司会者からお願い)

中締め 本木幹雄
閉会の言葉 城啓二

「出席予定者名簿」(順不同)

宇野勝、松本光弘、三村恪一、鈴木中、青木伸之、葛野泰男、
坂本紀典、田中利一、高橋康子、城啓二、高山健治朗、平野誠二
、本木幹雄、湯浅健二、柴野明彦、中野登美雄 河野雅道、清水
好郎

協会役員 18 名

那須野洋之、杉山嘉明、渋谷宗雄、八木啓太、唐井直、長瀬信也
、中村文則、高林敏夫、箭内力、大竹一寿、稲俣太 植木繁晴、
大友義教、曾我敏昌、西塚祐一、早野宏史

選手 16 名
合計 33 名

「国体・スタッフ選手一覧」

国体少年選抜記録（昭和45・46・47・48・49・50）

（相川君のコーチ 1971 年 26 回大会～ 1975 年 30 回大会）

開催都府県	スタッフ		選手							
25回 岩手 (遠野市)	監督 コーチ 主務	鈴木 中 瀬戸 哲 ****	石井 味岡 桃木 古川	鎌学 相工 鶴見 向岡	三富 平山 小柴 高林	相台 相台 鎌倉 相工	矢野 長崎 川井 田中	多摩 相台 鎌学 相台	冷泉 原野 広田	向岡 向岡 向岡
26回 和歌山 (新宮市)	監督 コーチ 主務	鈴木 中 相川亮一 平野誠二	小柴 高林 中山 猪俣	鎌倉 相工 相工 相工	長谷川 岸田 矢野 曾我	鎌学 鎌学 多摩 湘南	安田 小林 水島 梅沢	日藤 日藤 須工 西湖	箭内 井本 岩本	向岡 向岡 相台
27回 鹿児島 (鹿児島市)	監督 コーチ 主務	鈴木 中 相川亮一 平野誠二	小柴 中山 長岡 泉	鎌倉 相工 相工 相工	加藤 角津 国弘 曾我	相工 相工 相工 湘南	瀬戸 西原 植木 内田	湘南 日藤 新城 戸塚	大竹 竹岡 渋谷	向岡 鶴見 希望
28回 千葉 (市原市)	監督 コーチ 主務	高山健治朗 相川亮一 平野誠二	大友 松下 早野 志賀	港北 鎌倉 生田 慶應	斎藤 洪川 大江 桜井	鎌学 鎌学 相工 港北	大竹 坂本 佐々木 杉山	向岡 向岡 東 三崎	木村 坪井 川島	多摩 相台 相台
29回 茨城 (日立市)	監督 コーチ 主務	瀬戸哲 相川亮一 葛野泰男	西塚 青木 那須野 大江	相工 南 須工 相工	国弘 那須野 鈴木 須藤	相工 須工 希望 城北	渡辺 小柳 佐々木 杉山	茅ヶ崎 平沼 東 三崎	島崎 稲葉 山根	多摩 相台 鎌倉
30回 三重 伊賀上野市	監督 コーチ 主務	葛野泰男 相川亮一 鈴木猛	磯崎 大矢 宮治 唐井	小田原 厚木 鎌倉 緑丘	坂巻 寺田 鈴木 山本	相工 法二 希望 旭	長瀬 小柳 稲樹 川崎	南 平沼 平沼 東	八木 尾崎 土屋	湘南 日大 鎌倉



1972年度 鹿児島国体神奈川選抜



「思い出の湘南高校グラウンド(水彩画:鈴木 中)」



思い出の合宿所グリーンハウス(水彩画:鈴木 中)



2002年6月「クラーマー講習会」



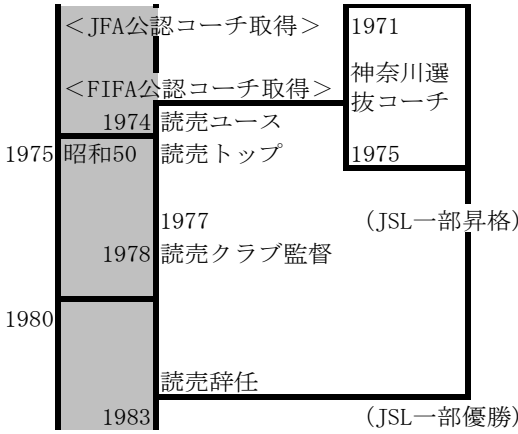
2011年4月「偲ぶ会」

第一部 相川コーチに捧ぐ

四章 読売クラブ関係

※ 一九七四年 ～ 一九八三年

J S L への二部からの挑戦 ～ 一部優勝戦線



一九七三年のテヘランでFIFA公認コーチとなり帰国した相川は、運命の読売クラブと出会い、当時トップチームのバルコム監督のアシスタントから、ユースチームの運営に努め日本で初のクラブチーム形成に貢献した。その後、トップチームのコーチ・監督としてジョージ与那城やラモス瑠偉らのブラジル選手を軸とした独特の攻撃的読売旋風を起し、JFL二部からの昇格、一部での優勝を狙うに至るが、八二年に成績不振を理由に辞任。皮肉にも翌八三年に読売は初優勝を果たした。他にも選手育成システム整備や女子サッカー界創成期等に貢献した。

読売サッカークラブでの相川亮一氏の功績

柏レイソル強化本部シニアマネジャー

元読売クラブユースコーチ、元ベレーザ監督

竹本一彦

■読売クラブの目標 JSL一部昇格Ⅱプロサッカークラブへの体制作り

実業団、企業チーム主体の日本アマチュアサッカー界に、異色の、プロサッカークラブを目指す読売サッカークラブ（読売新聞社、日本テレビ放送網、よみうりランド三社が支援）が誕生したのが一九六九年。真っ白なクラブ史に色を入れ始めたクラブの創世記。創立から六年目の一九七四年、相川は、サッカースクールのコーチとして読売クラブと契約。当時クラブが胸を張って誇れる財産は、多摩丘陵稲城市のよみうりランド内の、天然芝ピッチ四面（照明塔付き）と、小さなクラブハウスのみ。稲城の山の上、新しいサッカークラブで、サッカー好きな人間を集め（スカウト）、サッカー選手に鍛え上げ（育成）、その選手たちでチームを作り、日本のトップへ上り詰める仕事（強化）に相川は就いた。まさに、更地に家を建てていく仕事だと言えるだろう！

「誰も我々がやることに文句はつけない。しかし、テキストは日本にない。参考にできるのは海外のクラブだけ」相川の覚悟だった。

◆ トップチームの強化

1. 大きなハードルⅡ J S L 一部への昇格
2. ジョージ与那城の存在。魅力の実証。

■ J S L 二部時代

一九七五年、トップチームは日本リーグ二部に所属。バルコム監督三年目、相川は通訳兼アシスタントコーチとしてチームにかかわった。バルコムの要請だった。チームは日本リーグ一部に昇格することが目標だった。日本の既存の高校や大学から有望選手を獲得するルートはまだまだ弱かった。チームには D F 松木、D F 高橋、M F 小見、橋本、与那城、F W 岡島、菊池などサッカー界ではまだ無名だが、個性溢れる選手たちがいた。この年 J S L 二部二位で入れ替え戦に臨んだが敗戦。なかなか勝てない日々が続いた。

一九七六年、バルコム監督が去り、西邑監督、相川コーチの新体制がチームを任された。中心選手は変えずに、FWアブルー、FW鈴木武一、DF関口らを加えた。JSL二部は二位。三度目の入れ替え戦に臨んだが三度目の敗戦。

一九七七年、FWラモス、MFジャイロ、ニコトラ、弱点だったGKに永大産業から高田を補強。積み上げてきたチームに効果的な補強が功を奏し、JSL二部で優勝。四度目の入れ替え戦でトヨタ自工に勝ち念願のJSL一部昇格を果たした。

西邑監督は相川コーチに実際のチーム作りを任してくれていた。相川は個性豊かな、自己主張の強い、言えば、我儘な選手たちをまとめた。ジョージ与那城の、エレガントなパス、ドリブルを攻撃面で生かし、守備では全員がハードワークをこなす、魅力的なチームを築いていた。当時のJSL上位の日立、三菱、古河、は身体能力の高い有能な選手を抱えてはいたが、サッカーの進め方は、旧来ながらの、（蹴って走れ）のサッカーに例えられる、攻守に忙しい一本調子のリズム

に近いサッカースタイルだった。相川は、JSL二部や入れ替え戦であっても、試合の進め方は、ブラジル人選手を中心に、南米的なテクニクを生かし、ボールを保持しながら、DFラインから攻撃を組み立てていくサッカーを追求した。ジョージを中心とした日本人選手たちも、「読売クラブのサッカーは、既存の日本サッカー界に刺激を与える斬新な攻撃的サッカーなのだ！」という意気込みを持っていた。読売のサッカー、DFラインから攻撃をビルドアップし、中盤をしつかりと組みたて、中央突破、サイド攻撃からゴールに迫る。速攻と遅攻を使い分ける。その中心に相手守備陣を切り裂くドリブル、巧みなスルーパス、ワンツーパスを奏でる、即興性溢れるジョージ与那城Ⅱ彼のサッカーがあつた。相川は、個性豊かな選手たちとYOMIURIのサッカーを築き上げながら、JSL一部Ⅱ日本サッカー界の檜舞台に登頂した。

■ JSL 一部時代

昇格した一年目に四位になった。「緑の読売旋風」と呼ばれた。昇格チームがいきなり上位に進出。長年積み上げてきたYOMIURIのサッカースタイルが通じたのだ。

二年目の一九七九年はリーグ戦二位。JSLカップに優勝し、クラブに初タイトルをもたらした。この年はラモスが得点王、アシスト王に輝き、戸塚哲也が高校三年でJSLデビュー。クラブシステムから自前で育てた選手が日本のトップリーグでプレーし、注目を浴びた。読売クラブが勢いを持って日本サッカー界に進出していった時代だった。

一九八〇年は六位になるものの、早稲田大学からCB加藤久、ブラジルからCBトレドが加入。リーグ制覇へ向けDFラインの強化が図られた。日本代表に小見、加藤久、戸塚、都並が選出された。同時に親会社がリーグ優勝を意識し始めチームへの期待が大きくなってきた。

一九八一年、クラブは再びリーグ優勝に迫った。中心メンバーが固定され、選手の年齢バランスが整い、選手の経験値も高くなった。最終節、名古屋瑞穂球技場でフジタと対戦。勝てば優勝だったが惜しくも引き分け、タイトルを逃した。終了間際、ジョージのゴールが取り消されたことは苦い思い出だ。

一九八二年リーグ戦は五位。成績不振の責任を取ってシーズン途中に相川は監

督を辞任。千葉コーチに後を任した。相川が去った翌一九八三年に読売クラブはリーグ初優勝を果たすことになる。

JSL一部リーグ時代、主に、相川監督、千葉コーチ。この二人がリーグ制覇を目標にチーム作りに邁進した。相川は理論家風なクールな目で選手・チームに接し、千葉は、読売の選手出身であり、兄貴分的存在として暖かみを感じさせながら選手に接した。相川、千葉のコンビでピッチ内外のチームマネージメントにあたった。

司令塔ジョージから、ジョージ、ラモスのダブル司令塔への移行や、多少の選手の入替わりはあったが、この期間のYOMIURIサッカーは、南米的な高い個人技をベースにして、見る人が楽しめる攻撃的なサッカーを特徴にしていた。相川が読売在籍十年で培ってきた、求めていたサッカー、チームの具現化だった。

◆ 二 自給自足の選手育成システムの整備、強化

クラブサッカーの良さは、クラブ内に、小学生から高校生、ジュニア（U-22）まで年代別のチームを持ち、一貫指導の下、トップチームで活躍できる選手、さらには、日本代表につながる選手を育成できることだった。ヨーロッパや南米では、当たり前のクラブシステムだが、日本では読売クラブが初めてであり、相川はこのクラブシステムを整備し、充実させるために尽力した。各年代のチームを作った。そして、各チームにプロの指導者を置き、コーチに責任を持たして、選手の育成、チーム作りに当たらした。トップチームからユース以下までの選手の情報コーチ間のネットワークによって共有された 戸塚、都並、上島らがクラブシステムから育った「ユース育ち」と呼ばれる一期生選手だ。相川は、昼間はトップチームの監督として練習にあたり、夕方からは、ジュニア（U-22）やユースAの練習に顔を出した。ユースの練習が終わる夜八時過ぎからは若い育成担当のコーチと選手論や、技術論、戦術論まで語り合い、YOMIURIサッカーのマインドを共有し合った。YOMIURIでは、攻守両面で、自ら局面を変えられることができる選手の育成がテーマだった。

相川は在籍した十年間にクラブ内を整備し、各チームに公式戦、実践の場を下記のように作った。

選手を育てるためには「試合」が必要だった。

- ・ジュニア（U-22） 神奈川県三部リーグに加盟。（KFA）。
- 東京ユースリーグ（新設）
- ・ユースA（U-18） 日本クラブユース大会（新設、JFA主催）。
- 神奈川県国体選抜に選手派遣
- ・ユースB（U-15） メトロポリタンリーグ（新設）
- ・ユースS（U-12） 全国少年サッカー大会に登録（JFA主催）
- 読売少年サッカー大会（新設）
- ・ベレーザ（女子） 東京都リーグに加盟。
- 全日本女子選手権に出場（JFA主催）
- ・スクール（小学生） サッカースクール（土日）・地域への普及事業

さらに、全国展開の（JFA公認 読売クラブプレミアサッカー教室）を企画。一九七九年から五年継続した。目的は、全国の少年サッカーの普及。トップチームの現役選手が各地を回り、子供たちや指導者に、直接テクニクを見せる。楽しくミニサッカーで遊びながら技術の向上を目指した。選手はオフの間にサッカー教室で子供たちと触れ合いながら、ショートマネーを稼ぐ。プレミアグループは、プレミアブランドのイメージアップと新購買層の開拓が狙いだった。

◆ 三 指導者の育成

トップチームを勝たす為の戦略・戦術論、選手論、コーチ論から、各年代に応じた育成、指導論、選手のストロングポイントを見抜くスカウト論まで、サッカー指導の多義にわたり、日夜、ピッチ上やクラブハウスで語られていた。相川の表現では、「よみうりランド、稲城の山の上に日本サッカーの聖地を作る。」それを実行するのは（人）。情熱を持ったサッカー人の集まりがYOMIURIだった。来る者は拒まずの相川スタイルの下、読売クラブの門をたく選手、指導者は多かったが、「競争社会の原理に勝ち抜いた人間と、自分から発想し実行

する人間だけが読売に残れること」が読売の厳しさ、掟だった。まだＪリーグが誕生していない時代に、プロサッカー選手を目指す、プロの指導者を目指す、突飛なパイオニア精神を持った人間たちの集まりだった。相川はその先頭に立ち、クラブ、チームの発展にあたった。

神奈川県・栄光学園出身の相川は、神奈川県サッカー協会の仕事も担っていた。ＦＩＦＡ・ＪＦＡ公認のサッカーコーチである相川は、神奈川県リーダースクールを開講、自ら主任コーチとして指導者育成にあたった。

現在のＪＦＡのＣ級コーチングスクールにあたる。当時は日本各県にコーチングスクールがまだ整備されておらず、神奈川県のリリーダースクールは先駆的存在で、講義、実技の内容もレベルの高いものだった。毎週土日の夕方五時から九時ごろまで、サッカーに興味を持つ指導者の卵が三ヶ月にわたり相川コーチングスクールを受講していた。このスクールを通して、読売クラブ好き、相川コーチに傾倒するサッカー指導者が増えていったことは確かである。

◆ 四 まとめ

相川の読売クラブでの功績は、稲城の山頂、よみうりランドに、日本一、サッカーに情熱を燃やし、サッカーに没頭する人間たちの聖地・YOMIURIを作ったことだろう。Jリーグが誕生した時には、すでに読売クラブを離れ、プロサッカーリーグの熱い戦いの場には立てなかったが、「日本サッカー界に、読売クラブあり」と世の中に言わしめる根幹、言い換えれば、YOMIURIサッカーの血、DNAを作ったことではないだろうか。

ジョージ与那城 インタビュー

元読売クラブ（選手・監督）、元名古屋グランパスヘッドコーチ
元京都サンガ監督代行、元ニッポウウェーブ北九州監督、ほか

（実施） 二〇一一年五月二十四日

（於） 柏レイソルクラブハウス

（聞き手） 竹本一彦

◆ 「相川さんとの最初の出会いはいは？」

一九七五年くらいに、バルコム監督の通訳兼アシスタントコーチとして入ってきた時だと思う。紅白戦の時に、バルコムはBチームの指揮を相川さんに任していた。通訳なのに、Bチームを見ていた。Aチームに入れない選手の面倒を見ていたので気苦労が大変だったと思う。選手に配慮できる人だった。バルコム監督三年目のシーズンだった。メンバーが固まってきていたので、特にBチームのモチベーションが難しかったが、そんな選手が多い状況の中、選手の意見を聞き出すような、雰囲気作りがうまくいったという印象を持っていた。

その場（その時）に気が付くことと、後になって気が付くことがあって、現役を終えて、自分が指導者になってから、ふと相川さんのことを思い出すことがある。それは、相川さんが醸し出していた「選手が自分から意見を言える、選手が自分からチームメイトに喋れる」、これが相川流の雰囲気作りかな」。

今だから初めて言うけど、FWのコンビネーションを作る大事なパートナーの選手を進言させてもらったことがある。大事なことだったので、ここだけは言いたいということ、言わしてもらった。選手がそんなことを監督に言っただけじゃないんだけど、その時一回だけ言ってしまった。ブラジル人選手でなく若手の日本人選手を自分のそばに置いてくれと希望したことがある。一回だけだよ！

ピッチの中で自分が感じていたことで、相手ペナルティーエリア付近で、突破の形を作る場面の話。自分は上がり目のハーフなので、次のプレーを決めるときに、CFに動いてもらって自分の攻撃の選択肢を作ってたかった。ブラジル人選手はCBにマークされているのに、いいタイミングで動いてくれないんだ。動きをつけてくれれば、パスかドリブルか判断してアクションできるのだが。どうしても大事だったので相川さんに相談した。

相川さんはそんなことを喋れるそんな雰囲気を作ってくれた。自分は絶対にそんなことをいつも言うタイプの選手じゃなかったから、一度だけのことだった。そんな雰囲気相川さんの雰囲気だった。選手が話せる雰囲気を出していたと思うよ！ その時は、抜擢した若手日本人FWが得点を挙げて試合に勝った。

◆「監督、コーチ相川さんのことで覚えているエピソードはありますか？」

攻撃のことは選手に任せていたかな。守備のことはポジションニングなど約束事を作っていた。

ラモスのポジションについて、CB、左FW、CFと考えていたね。自分もウイングやCFやサイドバックをやらされた記憶がある。

そうだ、天皇杯かJSLカップで相川さんにCBをやらされたことが一回あった。ディフェンダー、ジョージのパスミスから失点してその試合は負けたかな！ みんなに迷惑をかけた！ だけど、自分的にはCBの考え方が解ったので、将来につながる経験になった。その試合中はチームメイトしかりみんな不安だったろうな。

バルコム監督は、先頭に立ってクロスカントリーを選手と一緒に走るんだ。これが早いんだ。相川さんは筋トレ好きで、選手を輪にしてその真ん中で腕立て一〇〇回、腹筋二種目で合計二〇〇回を自ら楽しそうにやるんだ。辛そうな選手の横顔を見ながら(笑)

◆「プライベートの思い出ありますか？」

プライベートは何もないな。食事に行ったこともないし、コーヒーを飲んだこともない。秘密が多い人かなと思った。あえて自分は突っ込まなかった。自分も付き合い悪かったから(笑)。

◆「入れ替え戦の思い出？」

有利有利と言われながらなかなか勝てずに、やっと四回目にしてトヨタに勝って一部に昇格した。相川さんの大きな功績だと思うよ。

入れ替え戦に勝利した後、どこかのお店で、みんなで祝勝会をやった。相川さんも参加して楽しく飲んでいた。

みんなよく飲むし食べた。相川さんは余り喋っていないかった。ニヤニヤして飲んでいたよ！ 自分たちの目からは相川さんが良く喋るイメージはないな。

◆「相川さんから言われた一言や、学んだことで何かありますか？」

タフになることかな。何年も勝てない時があっても、我慢して、勝つまで粘ること。やり続けること、精神的にタフになること。その積み重ねの大切さかな。その人を見てタフになれる。人（監督）を見て、その人が、物事を投げ出す人だったり、人のせいにする人だったらついていけないかと思う。相川さんは負けた時や、うまくいっていない時に、あきらめる姿を見せないし、次に向かえる雰囲気を作ってくれた。例えば、紅白戦でうまくいかなかったもみんなを集めて意見を言わせて、方向を見つけてくれたかな。喋りあえる雰囲気を作ることがうまい。信頼できる存在だったよ。

◆「ジョージさんにとって相川さんは？」

有名選手だったわけじゃないのに、あの状況で監督を引き受け、あの個性の強い選手たちをまとめて、一部リーグに昇格させたこと。あの時の選手たちは我

儘っぱいのが多くて、サッカー界に知名度が低い人が監督をして、納得させることは凄いことだったと思う。みんな好きだったんじゃないのかな。あれこれこうしろと細かくいうことはなかったけど。

相川、千葉のコンビは性格が違っていたけど、お互い話し合ってよい仕事をしていたと思うよ。自分は、千葉とは同じ年なんだよ。同じ選手としてプレーしていたので近い存在だった。相川さんは一歩距離を置いていたと思う。千葉さんは自分から寄ってくる存在。相川さんは少し離れた存在。二者二様の雰囲気を作っていた。二人の下でチームがまとまっていたから昇格したんだろうな。

◆「相川さんは、ジョージのサッカーがあるから必ず勝てるんだと、日本のサッカーに挑戦するんだ、という信念を持っていたが？」

自由にやらせてもらっていたことはよく感じていた。相川さんがそんなことを言ってたとは知らなかったけど。ブラジルの格言に「尊敬されたかったなら、まず自分から相手を尊敬しろ」

という言葉があるけど、相川さんは選手をリスペクトしながらやっていたと思う。あのメンバーをまとめるのは簡単じゃないよ。すぐ文句出るからね！ 本

当にできることじゃない。そこをやったのだからすごい！ カリオカも相川さんを好きだったんじゃないかな。よく相川さんと一対一をやっているのを見ていたよ。俺とはやってくれなかったけど！（笑）

二八、九の時かな、自分がサッカーをやめたらどうしようかなと悩んでいる時期があった。日本でサッカーをやめた後、サッカー界に残る気持ちはまだなくて、引退後は翻訳の仕事をしようかということが頭にあって、相川さんに相談したらブラビスという会社の高橋さんを紹介してくれた。一年近く中途半端な気持ちで過ごしていた時に相川さんが相談に乗ってくれた。昼間のトップの練習を休んでブラビスに仕事に行って、夜にジュニアで練習させてもらった。一年間チームに迷惑をかけたな。相川さんだから自分から相談したと思う。相川さんと話している内容は誰も知らないと思う。まあしゃべる必要もないし。

好きなタイプだったよ！ 喋ってくれる雰囲気はないんだけど、選手のことをとてにも気にしてくれていたと思うよ。そんな存在だった。誘えば付き合ってくれるんだろうけど。誘えないような雰囲気、そんなオーラを出していた。距離を作りながら、距離がない。そんな人だった。

◆「相川さんのプライベートは？」

聞いたことがないな。自分もプライベートな事は喋らないので気にしていなかった。喋られたら自分のことを喋らなければならぬから。結婚していたの？
ミステリアスな人だった。

◆「最後に相川さんのイメージは？」

相川さんは 勝負強い人だったと思うよ！ 読売クラブを日本リーグ一部に昇格させたのだから。あの時に勝ったことは凄いことなんだよ、絶対に！ バルコムが成し遂げられずにチームを離れた時に、チームを引き受けたことが不思議、あり得ないことだと思うよ、改めて。俺と小見だけが四回入れ替え戦を経験しているけど、四年は長いよ。忘れられない。忘れる訳がない。昇格したら一年目四位だよ。時間がかかったんだよ。一年で出来たチームじゃないから、昇格した後でも良い成績を残せたんだ。相川さんがチームを引き受けた【勇氣】。それが凄い。そして、俺からすれば、相川さんに【勝ち運がある】から昇格したし、一部リーグでも優勝争いできたんだと思っている。

相川さんが読売クラブを辞める前年、瑞穂でフジタに勝っていたらリーグ優勝だった。悔しかった。二位だったけれど、相川さんは素晴らしい挑戦をしていたと思う。

◆ 「ありがとうございます。」

選手としての「男気」を大事に

元読売サッカークラブ（選手）

加藤 久

一九七八年、早稲田大学の四年生になろうとする頃、私は、サッカー部長であつた堀江忠男先生から助手として大学に残る道を薦められました。ただ、大学三年生の時から、日本代表チームの一員に加えてもらつていたので、サッカーを辞めるのはもったいないなという思いがありました。誘いのあつたいくつかの実業団チームの中で、三菱重工のサッカー部からは、三菱重工サッカー部員は必ずしも社員である必要がないので、助手をやりながらも構わないという返事をもりました。ところが、大学側は、企業色が強いと大学の助手就業規定に抵触するので好ましくないという返事でした。そのような訳で、私は一九七九年に大学を卒業後、一年間どこのチームにも所属せず、筑波大の大学院に通いながらひたすら練習だけの日々を過ごすことになったのです。

一年後、そんな状況に助け舟が入りました。大学体育局の非常勤講師をされていた高橋英辰さんや日本サッカー協会の平木隆三さんが大学当局に掛け合い、企

業色の少ないクラブチームなら活動を許可するという返事をもらってくれたのです。当時の日本サッカーリーグには、クラブチームは読売クラブしかありませんでした。

それが私と読売クラブ、そして監督であった相川さんとの出会いのきっかけです。

一九八〇年の日本リーグが開幕して約1か月半経過した五月一日に、初めて読売クラブのクラブハウスに行きました。事務局長の笹浪さん、監督の相川さんと練習前にお会いしました。相川さんとの初対面は、「シャイな人だな」という印象でした。読売クラブのことはほとんど説明せず、「まあ、グラウンドに出て一緒にやろうよ」そんな感じでした。「練習はやってたの?」「ええ、かなりやってきました。」くらいの会話はした記憶があります。

練習はアップの後に紅白戦。最初はBチームでしたが、後半からAチームに入りました。翌日はリーグ戦前日、軽いボール回しだけでした。卒業後の一年間は

公式戦に出ることはありませんでしたので、読売では秋ごろに試合に出られればいいと考えていたのですが、その日相川さんから「明日の日立戦のメンバーに入れたから」と告げられました。思い切ったことをする人だと思いました、嬉しくもありました。

試合当日は、駒沢競技場に一時間前に集合。当時は、スパイクからユニフォームまですべて自分のバックに入れて持っていくのが当たり前の時代です。試合前のミーティングはいつから始まるのだろうと思っていると、選手はそれぞれのタイミングでグラウンドに出てアップを始めます。ラモスとジョージさんは、ろくにアップもせずにセンターサークルのところで話をしているだけ。相川さんが号令をかけることもありませんでした。

ロッカールームに戻り、そろそろロッカーアウトに近づいた頃、隣にいた奥田さんに「誰が先発なんですか？」と聞いたところ、「お前、先発だよ」と言われました。

「相川さん、俺に何も言ってないから！」驚くやら、準備に焦るやら……。赤と青の縦じまのユニフォーム、背番号 26 番。今でも忘れません。ロッカールームを

出る時、相川さんが私の目を見ながら一言、「大丈夫!」。会話はそれだけでしたが、気合が入ったのを覚えています。

通常の監督像をイメージしていたら、相川さんはどの範疇にも収まらない監督さんのような気がします。自分が悪いプレーをしたなと思っている時でも、何か注文を付けてくることは全くありませんでした。細かいことは言いません。技術的なこと、戦術的なことよりも、スポーツマン、サッカー選手としての主義主張があるのかどうか、そこを見ていたように思います。別の表現をするならば、「男気」のようなものをとっても大事にされていたのではないのでしょうか。

相川さんは、とてもシャイで、優しい人間でした。サッカー選手としての道を開いていただいたことに、心から感謝しています。

相川コーチ追悼座談会（元読売クラブトップチーム）

（実施） 二〇一一年五月一七日

（場所） 南青山「カリオカ」

（参加） 小見幸隆、瑠偉ラモス、戸塚哲也、都並敏史
（司会） 竹本一彦、田所俊文

◆司会 今日には相川さん追悼座談会に参加ありがとうございます。読売トップチームに在籍した中心選手に今日は集まってもらい、相川さんとのエピソードやサッカー観を語ってもらいたいと思います。まず、相川さんとの出会いやその時の印象を聞かせてください。

小見 相川さんは読売クラブに十二年在籍したね！ 一九七四年に読売に入ったと年譜にある。

戸塚 小学校六年の時から初めての出会いだと思う。

都並 確か、品村さんと相川さんがスクールコーチ（小学生）だった。

戸塚 F I F A のジャージ姿が印象的だった。クラマーさんの弟子だったと聞

いていた。

都並 そう、FIFAのジャージを裏返して着ていたのを覚えている。

小見 最初は、バルコム監督の通訳だった。自分のサッカー恩師は当時の柴田さんなんだが、相川さんは柴田さんとオーバラップするんだな！ バルコムと柴田さんの間がうまくいっていなかったのも、自分はどちらかと言うと、相川さんとあまり話していない。ミーティングの時は通訳をしていたけれど、相川さんの英語は特に印象がない。印象強いのは、五対二などウオーミングアップのボール回しが異常に長く、いつ練習が始まったかがわからなかった。本当によくボール回しをした。

都並 読売のボール回しのルールは誰が作ったのだろう。独特だった。

小見 グリッドがなかった。タッチ交代でなく、ボールを奪うまで。攻守の切り替えが早く、テクニック勝負、駆け引きの戦いが楽しかった。

都並 中学生の時に相川さんを「先生！」と呼んだら、「相川さん」と呼べと言われた。「俺は先生でなく、プロのコーチだから！」

と言われた。FIFAのジャージとプロのサッカーコーチ。それが子供の時の相川さんの印象かな！

◆司会 一九七四年ごろはプロのサッカーコーチなどまだ存在しない時代だった。指導者には、学校の先生か企業チームの選手OBがなっていた程度だった。一九七三年に相川さんはテヘランでFIFAのコーチングスクールを受講してプロコーチへの道を歩みだしていた。

都並 ミニゲームを一緒によくやった。他のコーチはゲームをやらなかったが、相川さんはやってくれた。いつもむきになってプレーしていた。子供相手にスピードで勝負していた。キックがうまくて、しっかりとボールを蹴れるコーチのイメージ。相川さんに抜かれたときは悔しかったな！ 縦長のグラウンドでミニゲームをやった記憶がある。スピード勝負のプレーには有利なグラウンド設定だと後になって思った。（笑）

戸塚 試合で、攻めている状況の時に、守備の意識を持つように言われた。相川コーチは言うことが違うという魅力があった。そして、今日は何を言われるのだろうかという期待感もあった。

小見 相川さんがスクールのコーチ時代に、トップチームのバルコム監督に声を

かけられて、トップチームの通訳になったと聞いている。その後一九七五年にトップチームは西邑監督、相川コーチのコンビになったかな。

都並 自分がユースの時、神奈川県国体選抜チームに選ばれた時、葛野監督（南高校）、相川コーチだった。相川さんが実際には指揮していた。読売ユースの選手が神奈川県代表として初めて国体に出場した時だ。

小見 神奈川県サッカー協会は斬新だったね！ 高体連サッカー中心の選抜チームに読売クラブのクラブサッカー育ちの選手を融合させたことは！ 鈴木中（技術委員長）さんや、三村さん（東邦チタニウム）が相川さんを信頼していたと聞いている。

◆司会 相川さんは三村さんのサッカー観を慕っていた。各選手が持つスペシャルなものを引き出し、伸び伸びと成長させること。そんな育成観を大切にしていた。

小見 フジタ工業の石井監督と話した時、クラマーさんと相川さんの名前が出てきた覚えがある。

◆司会 相川さんは選手経験がなかったので、日本代表OBの西邑さんを監督にすることで、日本サッカー協会や他のチームとコミュニケーションをとれるようにしたと聞いている。相川さんの指導の印象は？

小見 理論派だった。ピッチ上の選手と同じ目線を大切にするサッカー観だったことかな。当時のよみうりではジョージ与那城のためにどんなプレーをするかがテーマだった。チームをまとめる相川さんも同じだったと感じていた。

都並 ジョージさんからテクニクを盗むことが大切だったし！

戸塚 読売クラブが参加したキリンカップで、サントスと試合した時、攻撃時にワンツで抜け出そうとすると、サントスの選手は、ボールがないところや動き出す前に、足を踏んだり、手で体を押したり、引っぱったりして走るコースを妨害してきた。ファールじゃないかとレフェリーに文句を言ったら、相川さんは「世界ではそれが当たり前なんだ！ やられる前に自分がやる覚悟が必要だ」と言っていたな。ずーと言われた記憶がある。

小見 「サッカーやくぎ？」なんて表現をよく使っていたな。自分が試合に出場しないとき、ベンチで相川さんの横で試合を見ていた時があった。ある選手が

ミスをする、オーバーアクションで「あゝあゝッ！」と、あからさまに態度に出していたのにびっくりした。自分が試合に出ている時もそうなのかと思うと怖いなど思ったよ。

◆司会　都並は相川さんにかわいがられていた？

都並　小学生の時から知っていたからかな！。同期の選手から後になって聞いた話だけど、自分を、読売の将来の左サイドバックに育てようと、中学生の時から相川さんは考えていたと。トップチームには高校三年の時に昇格した。しかし、デビュー戦はなんとボランチ。緊張しまくってボールが足につかなくて、最初のコントロールは二メートルくらいのトラップミスだった。

都並　相川さん、千葉さんがトップチームのスタッフだった時、相川さんより千葉さんのほうが選手との距離が近かった。相川さんは選手と一緒に食事をするとか、お酒を飲んだとかはなかったと思う。

小見　後のグーテンドルフ監督には、監督の自宅に呼ばれて、食事をごちそうになったことがある。

◆司会 読売の外では、小見、戸塚、都並のそれぞれのプレーや個性をほめていた記憶がある。読売の内部では選手に厳しくて、あまり面と向かってほめなかった。

小見 相川さんはコミュニケーションスキルが足りなかったんじゃないかと俺は感じてしまうことがあった。年が六歳違い。特別に気を使うことはなかった。

戸塚 目を合わせてくれなかった！

小見 一緒にボール回しをやったことがない。

都並 子供の時、最初は言葉でいじられたけど、大人になってからはなかった。大人同士では強いコミュニケーションがなかったのかな。

小見 相川さんの哲学なんだろうけど、選手とあまりコミュニケーションを取らなかったのが残念。何を考えているのか解らなかった。

◆司会 本当に食事に行ったことがないの？

戸塚・都並 ナイナイ！ 同期の斉藤芳行などは多かったみたいだけどね。

※（ラモスさんがボランテニア活動先の石巻から帰京。時間はすでに十時半過ぎ）

ラモス 今日十一時から十六時まで炊き出しをしてきた。バーベキューでみんなにお肉や野菜を食べてもらってきた。

全員 お疲れ様！

司会 ラモスにとって相川さんはどういう人だった？

ラモス 自分が日本に来た時の監督。三年くらいかな一緒だったのは。一年間の出場停止の時、相川さんは自分をフオーしてくれた。チーム練習外で一对一の勝負をして、よく遊んだ記憶がある。出場停止が解けてからはFWでプレーさせてくれた。

戸塚　　そういえば、筋トレが異常に好きだったな～！

都並　　ガンガンやっていた。

ラモス　　お前は細いな～と、自慢の腕や胸板を見せられて、自慢された。

小見　　相川さんに「なぜ筋トレするのですか？」と聞いたことがあって、相川さんは、「筋肉を鍛えると骨が丈夫になって、骨が丈夫になると人間長生きできるんだ」と言っていたんだが。もっと生きていてほしかった！

◆司会　　読売のチームミーティングの時の話を相川さんから聞いたことがあって、日本人はちゃんと話を聞いているのだが、ラモスやニコトラは後ろのほうで寝そべって人の話を聞いているんだよな、と日本とブラジルの文化の違い？　を話していたことがあるのだが？

ラモス　　本当？　　俺は寝そべってコーチの話を聞くな～ってことはしないよ！

絶対！

小見　　相川さんはミーティングの回数は少なかったと思う。

◆司会　話好きで、ミーティングやりそうなのに！

小見　怒ったのも見たことがない。だから、感情的にならない人と思っていた。
都並　そう、誰にも怒らない。

ラモス　試合で点を取ったらコーヒーをおごってくれた。出場停止明けのシーズン、自分が得点王を取ったときは、「自分にかけてくれている」という相川さんの気持ち、自分への期待感を感じた。自分をFWで使うか、スウィーパーで使うかの選択肢があつた上で、FWで使ったからだろう。

◆司会　相川時代に読売クラブが優勝したのは？

小見　一九七九年のJSLカップ。読売の初タイトル。

ラモス　バイーア（ブラジルのプロチーム）の青赤の縦じまのユニホームの時。もう一回、白のユニホームで優勝した記憶がある。

戸塚 西邑さん 相川さんのコンビだった。

都並 優勝した時、胴上げをしようとすると、相川さんは「胴上げなんてやめよう！」なんて言うんだ。照れ屋なんだよな。

◆司会 相川さんに言われた言葉で覚えていることありますか？

小見 「小見は重宝な選手だ！」と褒められたが、あまり褒められたという気持ちになれなかった。千葉コーチとはよくサッカーの話をしたけど、相川さんと話すことはなかったな！

戸塚 トップに昇格してからは、こちらから相川さんの近くに行こうとすると、なんかすかされた感じがしていた。ユースの時は、相川さんは、父親や学校の先生とは違う、サッカーコーチという特別な存在だった。家に帰ると、相川さんがこう言ったとみんなに自慢げに喋っていた自分がいた。

小見 選手のOBがチームの監督、コーチになっていた時代に、選手経験のないコーチが指導していたのは相川さんだけじゃないかな！ しかもトップレベルの日本リーグで。

ラモス 頭良かったよね。

都並 情熱をとっても感じた。

ラモス 一九七〇年から八〇年代、日本では、「蹴って走れのサッカー」が主流の時代に、パスをつないで、頭を使つて、サッカーはやるんだと考えていたところが凄いと思う。

都並 一九七四年の西ドイツワールドカップを見て相川さんは刺激を受けたのかな？

ラモス 日本リーグ二部時代から、4・3・3のシステムで、攻撃を組み立てるサッカーをしていた。それを一部リーグでもやって、勝とうとしていた。今のバルセロナのようなサッカーをやるうとしていたよ！

戸塚 ビルドアップ中心の読売のサッカーを作っていこうとしていた。

小見 ジョージがいたからそのサッカーができた。オランダ人のバルコムも認めたジョージの存在が大きかったと思う。

◆司会 相川さんは一九七〇年のメキシコワールドカップのブラジルチームが好

きだつた。特にボランチのクロドアウドが好み！

都並 渋いねゝ

◆司会 ボランチを大切にしていたね。相川さん自身がボランチの選手だったし。

全員Ⅱ へえ！ 初耳だ。

都並 ボール回しで相川さんは相手にかわされても粘り強く二度三度追ってきた。
あの粘りはボランチらしさ？！

小見 ラモスと一対一を喜んでやる人は少ない！ 相川さんは稀な人だったかな！

◆司会 最後に相川さんと会ったのは？

小見 二、三年前、赤坂でサッカー仲間で飲んだ。体を壊していたけどお酒を飲

んでいた。熱く語っていた。

ラモス このお店で偶然会った。久しぶりに挨拶をした。うれしかったよ！

都並 十年前くらいの読売のOB会。

都並 昨年東京ヴェルディのクラブハウスで。同期の崔と渡貫が東京Vの会長、社長だった時にクラブハウスに突然来られて「どこか自分がやるポジションはないのか？」なんて言っていたのでびっくりした。読売のこと、東京Vのことが気になっていたんだろ。存続の危機だったから。

全員Ⅱ それはまた初耳です。

◆司会 相川さんが「読売クラブ プーマサッカー教室」の立案者だったこと知っていますか？

小見 あのサッカー教室はあの時代に画期的な試みだったと思う。現役選手が全国各地を回り、トップレベルのボール扱いを子供たちに見せ、ミニゲームをや

りながらサッカーの楽しさを、子供や指導者に伝えた。

都並 高度なテクニクを直に子供の目の前で見せた。子供が喜んでくれた。

戸塚 一回三万円位のコーチ料を選手はもらっていたかな。当時は十分に選手の励みになっていた。

ラモス 時々熱くなりながらも子供と遊ぶのは楽しかったよ！

戸塚 多くの選手が思うことは、相川さんは監督と選手の関係を強く意識していったんじゃないかということ。プロの監督、コーチはどこかで選手の契約を打ち切る決断をする時が来る。そんな厳しいサッカー監督と選手の関係をも意識して付き合っていたんじゃないかな。

小見 相川さんは未知なる人。「サッカーコーチ」だったと思う。

◆**司会** 本日は、お忙しいところ、ありがとうございました。

相川さんから学んだこと

元読売サッカークラブ（選手）
岡島俊樹

私は、一九七三年三月に富山工業高校を卒業して読売サッカークラブに入りました。相川さんは、一九七五年三月にトップチームのコーチとして就任され、私が読売サッカークラブを辞めた一九八一年三月までの六年間おつきあいさせていただきました。

相川さんから学んだことを書きたいと思います。

◆ 選手以上の筋力

フィジカルの練習では、個人またはグループでのランニングの競争が多く。負けたときには必ずと言っていいほど、腹筋や背筋、腕立て伏せ、スクワットなどの罰ゲームがありました。罰ゲームには、相川さんも率先して必ず参加し、パワフルに罰ゲームをこなし、選手より優れた筋力を持っていたことを記憶しています。選手とともに練習する姿勢を学びました。

◆ 労を惜しまないコーチング

当時、私は、フオワードをしていました。体が大きい分（身長一八一c m）シュート体制に入るバックスイングが大きいので、ディフェンスに寄せられ、密集した所でのシュートはあまり決まりませんでした。相川さんは、それを解消するため、グラウンドのフェンスに向かってシュートモーションを小さくするように、チームの練習が終わってからマンツーマンで練習していただきました。また、「シュートを打つときは、どこを見て打つ？」と聞かれ、「ゴールを見てシュートコースを探しシュートを打ちます。」と答えました。「その時はボールだけ見てるか？」と聞かれたので、「ボールを見て打ちます。」と答えると、相川さんは、「ゴールの打ちたいコースとボールが同時に視界に入ったとき、シュートが決まる確率が高いのではないか？」と言われました。実際に練習で、打ちたいコースとボールと同一視界に入ったときは、ほとんど思ったコースにボールが飛んでいきました。この練習も私のために時間を取ってつきあっていたいただきました私のために時間をかけていただいたことに大変ありがたく思うと同時に、自分が指導者になったら、一人の選手に時間をかけることを惜しんではいけないことを学びました。

◆ 研究熱心

当時の攻撃は、ワンツースを使つての突破はよく行われていました。そのためディフェンスは、自分がマークしている選手がパスを出した瞬間に、裏のスペースを消すような動きをするようになってきていました。その状況を打開しようと相川さんは、ダブルパスを使おうと練習で取り組みました。ダブルパスとは、突破しようと最初にパスを出した選手は、裏に抜けるようなモーションを起こすがパスを出した位置にとどまり、リターンパスをもらう。リターンパスを出した選手が裏のスペースに走り込むという練習でした。ブラジルのペレのプレーを参考に練習に取り入れたということでした。追究する姿勢を学びました。

◆ 大胆な決断

一九七九年の前期リーグが終わった後、相川さんから「お前ストッパーをやらないか？」と言われました。この時は、一部リーグ得点ランキングの上位にいた記憶があります。フォワードとして調子が悪いわけではないと思っていました。しかし、チームの構想がそうであれば、自分のやれることを精一杯やってみよう

と思いました。釜本さんや碓井さんなど日本を代表する選手と勝負することが出来たことは、指導者になってからデیفフェンスを指導する上で良い体験でした。時には思い切った決断が必要であることを学びました。

以上思いつくまま書いてみました。私が、指導者として子どもたちを指導していたとき相川さんだったらどのように教えただろうということを思いつつ指導していました。

別れの言葉

武相高校サッカー部監督
元読売サッカークラブ(選手)

大友正人

突然の訃報に驚きました。

相川さんのご逝去を悼み、謹んでお悔やみ申し上げます。

「読売でやらないか？」そんな一本の相川さんからの電話がその後の私のサッカー人生を変えることになるとはその時は思いもしませんでした。高卒新人の私をいきなりトップチームの試合で起用、優勝という経験までさせてくれた最初の監督さんでした。ミーティングなし。ウォーミングアップなし。ストレッチ？ブラジル体操なんてやった記憶なし。フィジカルはちよつと走ったかな。そのかわりにグラウンドに出てきた人からボール回しが始まり延々と続きいつ終わるのかなと思うほどやらせ放題、後はミニゲームだけ。それを相川さんは黙って見ている。

たまに発する言葉は「ひどい」。それを聞いた選手は悪いプレーをしたんだなとわかる。まず技術が最優先されテクニクのあれば年齢に関係なく試合に出し

てくれる。

だから選手は自由にプレーしサッカーを楽しもうと努力する。その結果イメージネーション溢れる試合ができ結果もでる。今思うとそんな指導法も計算の上だったのかなと思います。

そんな相川さんのサッカー観に初めて出会ったのは私が中学二年の時です。部の練習試合を相川さんがたまたま見ていて、試合後中学生だった私たちに話をしてくれたのです。「どうしてそんなに急ぐんだ？」とか「サイドから攻める必要があるの?」「ボールを失うな。」など今まで聞いたことがないような話をされたので短い時間ではありましたが、今でもあの時の事はよく覚えています。おそらく相川さんはあの当時から日本人にあうサッカーというものが頭の中にあっただんだと思います。

その後相川監督のもとで何年かプレーし読売を退団し高校の指導者として高校生を指導する際に、ふと気がつくと相川さんのこだわったサッカーを追いかけている自分に気がつきます。

ボールを大切にすると自由で喜びのあるプレーを求め、学年に関係なしで試合に使う。それほど私にとって影響力の強い人だったのだなと今振り返っています。

数年前の私の高校の夏合宿の宿で偶然お会いし懐かしい話に花が咲きとても元気だったのに残念です。

若い選手に出場のチャンスを与えることはその人のサッカー人生を変えるんだよ、また知識をひけらかさず選手を見て指導法を決める事って大切なことなんだよと教えてくれた人でした。

心からご冥福をお祈りいたします。

相川さんが教えてくれたこと

ウニベルサールサッカースクールスーパーバイザー
元読売サッカークラブ(コーチ)

千野 徹

私が読売クラブに入ったのは、クラブが日本リーグ二部から一部へ昇格を決めた年でした。当時の読売クラブはヨーロッパあるいは南米と同等のクラブ組織を目指して、歩み始めた創世記でした。相川さんは組織を構築していくリーダーとしてチームとクラブの確立に没頭していました。そんな時に私は相川さんと出会ったのです。

初対面の私に対して相川さんが齒を磨きながら言った言葉は、次のようなものでした。「お前がクラブに入るには俺か千葉をクビにするしかないな。まあいいから取り敢えず練習にでたら。」相川さんは天才的ともいえるコーチである反面奇人変人でもあったというのも事実です。実は相川さんは人と話をする時は、ほとんど目を合わせません。この時もまったく目を合わせてはもらえませんでした。

関係者への紹介も一切ないまま、何がどうなっているのか、また何がどう進む

のかもわからないまま、ただ練習に参加する日々が続きました。何時にクラブハウスに行き、何をしたら良いかも言ってもらえません。相川さんからの労いの言葉などはもちろん皆無で、ほとんど自分で判断して自分で行動しなければなりません。こんな状況ですから回りにいるスタッフも選手も私が、コーチなのか選手なのかも分からない様子でした。総てがこんな状態で、相川さんの人との接方は正直、滅茶苦茶と言つてよいものでした。

こんな人でしたから、指導方法などは直接教えてもらえるはずありません。私は練習に参加し何かサッカーの秘密、答え、そして宝物が落ちていないか？とグラウンドを見回していました。そして、それらの宝物を拾い損ねるのが怖くて、また次の日もグラウンドに顔を出し相川さんの言葉をききのがさないようにしていました。トップチームの練習に加わり、その後ユースチームの練習に参加。クラブハウスで夕食をとり、会社が終わってから参加してくるトップチームの選手たちとの夜間練習。まさに一日中稲城の山の上でサッカーをしていました。今思えば、ひたすら相川さんの魅力的な練習に参加することがコーチとしての引き出しを増やすことにつながったのだと思います。

指導者としての相川さんは既存の日本サッカーに常に戦いを挑んでいました。特に当時サッカー界を支配していた論理的ベースを持たない根性主義に対して反発していました。グラウンドで選手が「がんばろう！」などと声を掛け合うと「なにをつまらないことを言っているのだ！頑張るのは誰にでもできる！」と一喝されてしまいます。この他にも「読売クラブは日本サッカーに対するアンチテーゼだ。」と言っていたことも強く心に残っています。まさに反骨精神の塊のような人でした。

読売クラブでは根性論は通用せず、それはクラブの仕事においても同様でした。当時クラブは発展段階で、色々な面が整備されていません。ジュニアユース、ジュニアそしてベレーザもまだありませんでした。そこである時、私は選抜チームの結成プランを相川さんに提出したのを憶えています。そんな企画書を相川さんは一瞥すると机の上に放り投げ「アイデアや企画は誰にも出せる。問題は誰がいつそれを実践するかだ。」と言われました。相川さんの言葉に対して常に緊張していた私は、迂闊にも「私が明日つくります。」と答えていました。こうして

新たに誕生したのがジュニアチームでした。当時は自分で新しい仕事を作り出していると思自負していました。今考えると相川さんの掌の上で踊らされていただけだったと思います。同様に竹本、水嶋、吾妻など当時いたコーチは相川さんに操られ（？）二つのカテゴリーのチームを掛け持ちすることになっていきました。相川さんには人のエネルギーを引き出す特別な力がありました。そして我々は相川さんから新しいことを作り出す作業は苦勞が多い反面、楽しいものでもあるということを教えられたのです。

「人のエネルギーを引き出すのがサッカーコーチの仕事だ。」

「指導はオリジナルでなければ日本一、否世界一にはならない。」

「仕事は与えられてやるものではなく、自分でさがし実行するものである。」

相川さんの言葉は書き出すときりがありません。読売クラブ時代に修得したことはグラウンドでのオリジナルな練習方法の確立であり、そして今日の仕事での姿勢に繋がっていると思います。相川さんに言われた「サッカーコーチは自分がコーチと思った時から一生サッカーコーチだ。」という言葉の重みに引きずられ

るように、私はサッカーコーチにこだわり続け、現在に至っているといっても過言ではありません。しかし、相川さん自身が自分の言葉の重みを感じていたかといえどそうではなく、この言葉の数年後にはサッカー以外の仕事に転向してしまいました。（「バカヤロー！ 言った言葉すべてにいちいち責任を持てるわけがないだろう！」と言つてニヤリと笑う相川さんの顔が浮かんできそうです。）

相川さんはプライベートな生活の部分でも謎だらけでした。結婚しているのか兄弟がいるのかなどということも見えてきません。ある時相川さんが「コーチはミステリアスのほうがよい！」と言っていたことも思い出します。コーチの生活が見えてしまうのは、選手にとつてある意味、興味をもって接する部分が少なくなるという意味で使っていたと思つています。指導者としても一人の人間としても本当にミステリアスで興味深く、人を惹きつけて止まない人でした。残念ながら、もうグラウンドに立つ相川さんを見ることはできませんが、相川さんとそのサッカーは相川さんに関わった全ての人間の心の中にいつまでもミステリアスな存在として生き続けることでしょう。

読売クラブU-22世代グループ座談会（読売クラブに於ける若手育成）

〔司会進行〕 矢作典史（一九六三年生まれ）

〔出席者〕 寺田幸一郎（一九五七年生まれ）、斉藤芳行（一九六一年生まれ）

渡貫大志（一九六一年生まれ）、足達勇輔（一九六一年生まれ）

〔日時〕 二〇一一年四月二八日

〔場所〕 東京ミッドタウン レストラン「テナム」

〔構成〕 牛木素吉郎

（はじめに）

矢作 相川亮一コーチの、読売サッカークラブでの仕事を偲ぶ座談会を二組に分けて行うことにしています。トップチームの監督、コーチとしての業績については、小見幸隆さんやジョージ与那城さんたちのグループで別に行っています。こっちは、もう少し若いころの相川さんと関わった世代。ジュニアと呼ばれていたU-22で相川さんの指導を受けた世代に集まってもらいました。ユース

(U-18) やジュニアユース (U-15) のチームを読売クラブで作ったのも相川さんの仕事でした。グラウンドで指導を受けたことだけでなく、指導以外での相川さんとの関わりなどの思い出も話してもらって相川さん像を浮き彫りにできればと思います。

◆ ラモスを手なずける

寺田 相川さんとかかわりが、いちばん古いのは、俺だと思う。法政二高一年の終わりころ、十六歳で神奈川県国体選抜に選ばれたときからだ。選抜の監督が横浜南高校の葛野先生で、コーチが相川さんだった。それから選手として約十年近くつき合ってたかな。その後 相川さんが監督になっていた。選抜に二年、三年と連続で選ばれたんだけど、三年のときの監督は相川さん。

渡貫 そのとき相川さんは読売のコーチはしてなかったのかな？

寺田 読売のコーチもしていた。神奈川県高校選抜の監督になったときも読売のコーチだった。

矢作 それで寺田さんも読売クラブにはいったの？

寺田 法政大学への進学を望んだけど入れてくれなくて相川さんに相談したら、読売クラブのテストを受けろと言われた。高校を卒業してトップチームに入って登録された。当時、ジュニアチームはなかった。そのとき、一九七六年の監督は西邑昌一さん。ベルリン・オリンピックの日本代表チームのメンバーだった人だ。相川さんがコーチだった。後に相川さんが監督になった。

矢作 間もなくラモスが来ますね。

足達 カリオカ（ラモス）が来たのは一九七七年だ。僕が高校一年生るときだった。

斉藤 カリオカは着いたその日に直接グラウンドに来て、ミニゲームをやった。

ジョージさん（与那城）と俺たちと。人工芝のグラウンドのあるところで。

矢作 相川さんはポルトガル語を話せないですよ？

寺田 ジョージさん（与那城）が通訳していたよ。ラモスとガンソ（カルロス・ニコトラ・ラモスの親戚のブラジル人）が主力になれるようにと、ジョージさんが一所懸命だったのを覚えている。

矢作 日本語もできないし、食事にも慣れていなかっただろうから・・・

寺田 相川さんがすごく苦勞していたよね。ラモスとガンソがよくけんかしてい

た。ラモスがグラウンドの中を自転車で走り回るとかね。とにかく一年目のラモスが日本の生活に慣れなくて酷かったんだよね。相川さんはそんなラモスをチームになじませるためにすごく努力していた。

寺田 小見さんに「練習が終わったらラモスを飯に連れて行ってくれ」って言われたことがある。松木（安太郎）といっしょに新宿や渋谷に連れて行った。

矢作 ラモスは一年目に日産との試合でトラブルを起こして、いきなり一年間の出場停止になった。

寺田 いろいろな人間がいて、相川さんは、すごく苦労していた。ブラジルから来たのがいたほかに、李国秀がいて、ケイジ（在日朝鮮の選手）がいた。彼らはうまいんだけど、すごく主張するから大変でしょ。日本人は日本人で、小見さんなど個性の強い選手がいた。

◆先発を話し合いで決める

寺田 とにかくミーティングがすごかった。メンバーを監督が決めていたというより、話し合いで決めていた感じだった。相川さんが、「先発をこれでいこうと

思うんだけどどうだ？」と話をする。すると意見を言うやつがいる。「それは違うんじゃないのか」と。

矢作 選手の意見を聞いちやうんですか？

寺田 そう。意見を選手たちに一時間くらい言わせて、集約して「じゃ、この十人先発でいこう」って。毎週金曜日、それでやってたね。相川さんそれなりにいろいろなことを考えて、そのうえで、選手たちに言わせたんだな。

渡貫 俺の相川さんとの最初の出会いは中学生チーム（ジュニア・ユース）のときだから、扱われかたは、まるで違ったね。上から「てめえーたち」みたいな感じだった。トップチームのほうは年齢近いから、上からっていう感じじゃなかったんですね。

寺田 全然違う。上から押し付ける感じは、いつさいなかった。あのときは古株の小見さんとブラジルから来てテクニク抜群のジョージが中心だったからね。相川さんも、多分、この二人抜きにはチーム作れないと、二人の考えを大事にしていたのだと思う。

矢作 そのころ、相川さんは三十歳くらいですね。

斎藤 後にジュニア（U-22）のチームを作ったけど、トップもジュニアも練習は

いっしょにやっていた。トップの練習をやって、午後五時半から千葉さんといっしょにきてジュニアの練習をした。大変だったよね。スタッフいなかったし。おれたち高校生チームと試合をしていた。ほぼ毎日試合してたな。

矢作 斎藤さんが読売クラブにいたのは？

斎藤 トップチームが日本リーグの二部にいたころに中学生チームにいた。高校生になった年に一部にあがった。一九七六年だ。四年連続して入れ替え戦があつて、四回目にあがった。そのときのコーチは相川さん。事実上の監督だった。

矢作 若手には、どんな指導をしていたのですか？

寺田 相川さんが神奈川国体の代表監督のとき、初めて高校生に4・4・2をやらせた。当時としては先進的だった。そのころのサッカーのシステム（布陣）は高校チームでは3バックのWMフォーメーションだったんだけど、それを4バックにしたのが印象に残っている。「ボールを受けたとき、でかく蹴るな、あわててフォワードに送ろうとしないで、まずはバックで回せ」と当時の高校生にしっかりと教えていた。「蹴るな」と言われたのが、忘れられない。

足達 いまでもバカ蹴りのサッカーがありますよね。

寺田 「長いボールを蹴るな。ハーフに渡せないなら、フリーになるまでバック

でとにかく回せ」といつていた。

矢作 ボールを大事にして、正確につなぐことを教えたのでしようね。

足達 それはFIFAコーチングコースでクラマーさんの指導を受けた後ですね。

矢作 相川さんは 一九七三年にテヘランで開かれた第三回アジア・コーチング・コースに参加して、FIFAのコーチ・ライセンスをとっています。

寺田 そこで学んだことを、導入しようとしたんだと思う。

◆若手に対する指導

渡貫 俺は小学校三年生のときから読売クラブにいた。小学六年生のとき相川さんが読売クラブに来了。それが最初の出会いかな。

斎藤 最初はバルコム監督（オランダ人）の通訳をしていた。

渡貫 接点という意味では中学生からかな。中一のときにジュニアユースの担当になって「今日から俺コーチやるぞ」と宣言した。口が悪い人だったよね。何か言うと、何何バカヤローで、すぐにバカヤローを付ける。「俺はプロ・コーチだ

から先生じゃねえぞ！」とか「俺は道徳とかなんとかじゃなく、ただサッカーで飯を食いたいやつにサッカーを教える。それだけだ、バカヤロー」。そんな感じ。

足達 当時は「バカヤロー」は必ずついていたね。

斎藤 俺は、読売クラブに中一からはいった。はいったときに「お前は暁星中学に行っているんだから将来は東大に行け。いまずぐ読売を辞める。サッカーの才能はまるでないから」と言われた。

渡貫 「やめろって」すぐ言ってたよね。いろんなときに。

斎藤 俺はむかつとして、多分顔に出たんでしょう。そうしたら「そうだよ、男はその悔しさの顔がないとダメなんだよ。東大に入って見返してみろ」と言われた（笑）。「その顔でサッカーがんばれ」とは言わないんだよ。あれが一番最初の僕に対する爆弾だったかな。自分には都並敏史や戸塚（哲也）に比べてサッカーの才能がなかったから、こういうアプローチをされたのかなと思う。才能ある人間、つまり、選手になれそうな人間に対しては違うアプローチをしていたのだろう。こいつはサッカー好きなんだろうけどプロの選手にはなれないよ、みたいな区切り方をされたかな、と子ども心にも思ったな。

寺田 それが中学生のとき？

斎藤 こっちはこっちの野望があるじゃん。それを打ち砕く言い方だよな。相川さんの判断は当たっているんだけど、それを言うことができるコーチって変わっているよな。それがストレートに人の心の中にはいつてくるような力を持っているのかな。

足達 俺は高校（玉川学園）の部活がイヤでしようがなくて、やめてサッカーをやるところを探していて読売クラブの事務所を訪ねてみた。クラブハウスに行ったら「何しにきた？」と聞かれた。それが相川さんだった。

渡貫 相川さんらしいな。

足達 そのときに事情をバーツと全部しゃべったの。アメリカの学校で育つてきていることもあって、論理的にバーツと伝えるのは得意だったから。事情を具体的に伝えたら「明日から来い」。それだけ。会話は単発。暖かみは感じない。そのころ、中学生、高校生の練習指導は千葉さんか千野さんだったから相川さんとの接点は入り口の一日目だけ。それでもユースのころ、クラブハウスの廊下ですれ違ったり、食堂で会ったりすると「お前、まだいたのか」とか…（笑）

渡貫 相川さんはシャイなんだよね。それで乱暴な言葉遣いになる。でも実は暖かい。

足達 よみうりランドの駅からクラブハウスへあがつていく道がけっこう距離あるじゃない。相川さんは必要ないのに、そこを車で通るのよ。俺達が通る時間にね。「乗ってけ」って言うって拾ってくれる。本当によく車に乗せてくれたな。

矢作 心は優しいけど人づきあいが苦手なんだ。

渡貫 バカ、死ぬ、帰れ、そういう言葉を、しょっちゅう使って「お前下手だな」って言う。ふつうさ。子どもに対して、そんなこと言うコーチはいない。俺は言われなかったけど・・・。

寺田 トップチームでは、そんなの、まったくなかったな。全然違うね。

渡貫 僕らに対しては、ものすごく上からバーンと来ていましたね。

寺田 うーん、変わったのかな。どこかの時点で。

足達 違います。変わったのではなくて、それは多分・・・。

寺田 接し方を変えていると・・・。

足達 相川さんは人が好きだったんだと思うよ。だけど、不器用でシャイで。だからそんな接し方になっちゃったんじゃないかな。

斎藤 話を聞いていると、トップチームを指揮するときと、高校生を指導するときの、接し方が違うのが分かりますね。結論みたいなこと言うようだけど、育成

型の指導者だったのかもしれないな。

矢作 そのころの相川さんは、昼間はトップの練習をやつて 夕方から中学生チームの指導をやつてたという感じですか？

渡貫 そうだね。中学生は、学校終わってからだから。

斎藤 そのころは、週二回が中学生だった。木曜日はナイター、土曜日は昼間。当時はクラブの中学生チームの登録制度がないから それぞれが自分の中学校チームのサッカー部に所属して登録している。都並と哲也なんかは瀬田中学のチームに登録していた。読売クラブには、それぞれが個人でサッカーを勉強にきているというか、うまくなりたいがために来ているという形だった。当時の読売クラブの中学生部門は塾みたいなんだよ。俺も暁星のサッカー部に入っていた。

渡貫 十二歳からのジュニアユースは相川さんが指導していた。

矢作 じゃ、中学生の三年間は相川さんの指導を受けたわけですね。

渡貫 高校生年代のユースは、その後、千葉さんにバトンタッチした。

◆権威に対する反発

斎藤 当時の日本サッカー界のふつうの考え方に対するアンチテーゼみたいなものを彼は持っていたね。

足達 あったよね。それは強かった。

斎藤 俺は、小学生のときは、みんなががんばるとか、声を出すとか、そういうことを教えられてきたんだけど、相川さんは「声を出して何が起きる」って言うんだからね。一方で「自己分析をできるような選手になれ」みたいな表現はすごく使っていた。

矢作 そういうことを中学生に対して言うの？

斎藤 「サッカーは個人から団体に変わるものだ」っていう表現もよく使っていたよね。「自分のポジションでしっかりできないやつが、みんなでガンバロウだって、なんで言えるんだ。自分ががんばってこそ、はじめてみんなが、がんばれるんだ」ということをはつきりと言っていた。

矢作 すごく覚えているのは、相川さんボールの上に腰を下ろして話をしたことだ。当時、学校のサッカー部などの常識で、大切なボールの上に尻を降ろすのは

いけないものと思つてたけど「座つていいぞ！」つて。固定観念壊そうとしていたのかな、と思う。

斎藤 試合のやり方も、当時の日本の主流とは違つていた。オーブンから攻めるサイドから攻めるとかいうことに対して、中央突破にこだわったりしたのも、それだよ。

寺田 俺が一番記憶にあるのが、松木（安太郎）がユース代表に選ばれて行つたときの話だね。当時のユース監督が有名な監督だったけど、代表で紅白戦やったときに、松木が右サイドバックで、ゴールキーパーからボールをもらつて相手のウイングが詰めてきたところで、相手の股の間にボールを通して、ドリブルで抜いたの。したら、その監督がピーって笛吹いて松木を呼びつけた。「お前は右サイドバックだろ。そこでお前がボールを取られたら速攻食らうだろ。なんで、あそこで相手の股を抜くようなことをするんだ」。で、松木が「それは違う！ こういうときは抜くんだ！」とその監督に反論した。松木は、翌日代表の合宿を抜けて帰つてきちゃった（笑）。朝のミーティングのときに相川さんにその話をしたら、相川さんは「松木、それはお前が正しい」（大笑）。この話、サッカーマガジンなんかに載つたんですよ。松木とユースの監督がケンカしたつて。

◆プロをめざすクラブで

斎藤 自分たちが二十歳のとき、一九八三年に日本リーグ初優勝して、いっしょに三軒茶屋で祝賀会やったじゃん。そのときは、相川さんは読売クラブを辞めたあとだったんだけど「やっぱりサッカーは中盤だ」と言っていた。これは菅平の合宿のときに聞いたんだけど「おれは幸せだ。おれにはジョージ（与那城）がいた」と言っていた。「ゴールに行きつくまでのアイデアをジョージに育てられた」とも言っていた。ジョージのような才能は相川さんにとっては憧れだった。

矢作 個人の才能を生かすサッカーをめざしていたわけですね？

斎藤 日本人的な「みんなでがんばろう」だとか、「一所懸命やれば何とかなる」だとか、「チームワークだ」とかいうことに対して、個人の能力を生かすことを考えていた。サッカーはチームワークだということを相川さんは分かっていたけど、あえてそれを最初にいわないで、才能だとか、センスだとか、中盤の大切さとか、アイデアだとかを重要視していた。そこにはジョージ与那城という人

間が読売クラブにいたということがあった。ジョージを通して自分のサッカー観というものを照らし合わせて大きくさせていったのだと思う。どこにも育成のピラミッドが出来ていない時代に、それを作っていた。その考えは読売クラブが独自に出していた季刊誌の第一回から三回の寄稿文に書いている（本書 資料の25から27ページに再録）。

矢作 相川さんのサッカー哲学みたいなものですね？

斎藤 三回で終わっちゃったんだけど、相川さんの挑戦みたいなもの。その第一回にサッカーコーチの仕事ってアグリカルチャーだっけと書いている。要するに農業みたいなもの、一生懸命水をやって稲を耕しても一回の台風で消えていつてしまう。選手だつてそんなもの。それを荒れ果てた中から何度も何度も拾い出して、耕して、育てていくことがサッカーコーチの仕事なんだみたいなこと書いている。それこそが育成だという主張だ。

矢作 学校スポーツが才能をダメにする「台風」だということかな？

斎藤 それと日本サッカー界に対するアンチテーゼっていう部分では、三菱、日立など当時の実業団サッカーに対する反感があったのだと思う。日本を戦前から支えてきた巨大企業のグループに対して「経済とサッカーを、いっしょにするなコノヤロー」みたいな感覚でけんか腰だったのではないか？ そこにはものすご

い情熱があつたと思う。プロを目指すクラブ組織の読売クラブだからこそ自分が表現できる場所だというふうには彼は思っていた。「自分は早大を卒業したときにサッカーがなければ間違いなく外資系の会社に勤めていただろう。（安定した日本の年功序列、終身雇用制度みたいなものじゃなく）一年契約で、実力で生きていくような人生をおれは選んだだろう」と言つてつていた。でも、自分には読売クラブというものがあつて、そこが就職先になつたみたいなどころがあると、晩年に言つたのを聞いた。

矢作 読売クラブ以外には、日本には本格的なクラブ・スポーツはなかった時代ですね。

斎藤 クラブ組織の良さ、クラブによる自給自足の育成。それを彼はクラマーさんから学んでいる。育成システムを作らなくてはいけないと同時にトップが勝たなくてはいけない。そうという両輪を、今では当たり前のことだけど、最初に完成しようとした人だった。

矢作 Jリーグができたあとにも、仕事をして欲しかった・・・。

斎藤 Jリーグが始まったあとのことだけど、相川さんがおれに言ったことがある。「おれはついていた。いまの監督だったら三カ月でおしまいだろう。おれは

読売クラブの監督を五年もやれた。つまり時間を与えられたんだ」と。相川さんはね。多分、悔しかったんだと思う、一九九三年にJリーグができたとき、読売クラブはヴェルディになって、松本安太郎さんが初代の監督になった。日本でプロが認められなかった時代に、相川さんは、おそらくプロ・チームの監督を夢見ていたんだろうし、やりたいという気持ちもあったんだね。相川さん、悔しいだろうなと思いました。そのときに、「俺は幸せだったよ。俺にはターム (Term・時間) があった。Long termがあった。だから失敗ができたんだ。また育成から吸い上げることもできた」と言っていた。

矢作 小学生、あるいは中学生のときから読売クラブにいて、ジュニアユース (中学生年代)、ユース (高校生年代)、ジュニア (大学生年代) とピラミッド型に積み上げていく。そういう一貫した育成のできる組織を相川さんが作り上げた。そして、プロ化をめざしていた。

(まとめ)

矢作 中学三年の夏過ぎに読売クラブへ通い始めた。論理的に説明してくれる、

口の悪い指導者が相川さんだった。個人技のレベルが高く、攻撃的でボールを大事にするサッカーをする先輩たちに魅力を感じた。サッカーへの真剣な取り組み姿勢からは「自立」した厳しさを強く感じた。

そして、当時、トップチームがジョージ与那城を中心に展開していたサッカーの虜になるのに時間はかからなかった。読売クラブの一員になり、先輩の後を必死で追いかけているうちに「自立」して取り組むことが自分の中に刷り込まれたのだと思う。

今回、相川さんを偲び、当時を振り返る機会を持つことができた。相川さんが試みたさまざまな仕掛け、相川さんの思いの恩恵を掘り起こす結果となり、改めて相川さんに負うところが多い自分のサッカー人生なのだと気づかされた。感謝そして、なによりも当時の読売ランドの丘で過ごした時間の愉快さ！ 成果だけでは測れない、仲間、先輩、同士と過ごした至福の時間がそこにはあったことを忘れることはできない。相川さん、ありがとうございました。

◇この記事は、読売サッカークラブの二十二歳以下のユースチームで相川亮一コーチの指導を受けた人たちの座談会の内容を再構成してまとめたものの一部です。



読売クラブ U-22 1982年

Dear 相川さん

日テレ・ベレーザ監督
元読売クラブベレーザ選手

野田朱美

相川さんとの出会いは小学六年の時でした。

中学生になったらベレーザでプレーしないかと読売クラブ関係者の方に声をかけてもらっていた私は、ある日見学を兼ねてクラブを訪ねると、「ベレーザの監督です」と相川さんを紹介されました。第一印象は「なんて怖そうな人なんだ」まともに話すことすらできなかったのを覚えています。

でもなぜか私は相川さんに惹かれ、大した話もしていないのに「明日からお世話にならせてください」とその場でベレーザへの入部を決めました。

この時は幼くてなぜ惹かれたのかわかりませんでしたが、今思えば、相川さんは当時ジョージさん、ラモスさん、小見さん、戸塚さん、都並さん・・・錚々たるメンバーが揃う「読売クラブの監督」でしたから、迫力がないわけがありません。怖いけど惹かれたあの感じはまさに「オーラ」だったのだと思います。

創部間もないベレーザは、月曜・土曜まで練習、日曜日は試合というスケジュールで活動していました。とはいってもメンバーが全員揃うのは土日だけで平日の練習は私と相川さんの二人だけでした。結局、相川さんにサッカーを教えてもらったのは一年だけでしたが、この間一日も休むことなくマンツーマン指導を受けたのです。

「日本にいる選手など相手にしなくていい。おまえは世界と戦うんだ」が相川さんの口癖でした。サッカーのサの字も知らなかった私が、中学三年生で日本代表に選出されたのはこの一年があったからです。夢のW杯に出場できたのも、そこで日本人初得点を取れたのも、私のサッカー人生全ての原点は相川さんとの三六五日にありました。

あれから二十年が経ち、私は今年ベレーザの監督に就任しました。きれいに片付いた机に「野田へ」と題された十枚のレポートを残して私の元を去ったあの日から、長い年月を経て私は相川さんと同じ立場に立ったのです。

監督就任祝いに行きつけのお店に招待してくれたのが相川さんとの最後でした。相変わらずの毒舌で監督たる者の指導を受け、別れ際「いつでも相談にこい

よ」と肩を叩いてくれました。

相川さんと過ごした三六五日、二十年間何度も読み返したレポート、そして就任祝いで送ってくれた言葉を軸に、私は相川流サッカー哲学を継承しベレーザの選手に伝えていきたいと思います。

偉人・変人の相川さん。

大好きでした。

どこにしようと、これから未熟な私を見守っていてくださいね。

マラドーナの売り込みを断った話

元読売サッカークラブ（職員）

佐藤英男

相川亮一さんとは短い期間でしたが、読売サッカークラブで、いっしょに仕事をしました。兄貴的な存在でした。いまの自分を形成する大切な人物であったと思います。

良きにつけ悪しきにつけ、いろいろな思い出がありますが、ひとつだけ、相川さんと自分だけが共有した誰も知らない事実を書いておきたいと思います。

一九七九年のことであつたと思いますが、ディエゴ・マラドーナの代理人から電話を貰ったことがありました。読売サッカークラブと契約できないかというものでした。マラドーナが日本で開催されたワールドユースで活躍した年でした。日本が気に入ったのでということでした。

日本では、まだサッカーのプロは認められていない時代でした。また、外国のスターに高額な報酬を払う力は、当時の読売クラブにはありませんでした。マラドーナと契約などできるはずはありません。しかし、電話を受けたので一応、当

時の監督である相川さんに取り次いで指示を仰ぎました。「そりや、無理だな」と相川さんは即座に断りました。

しかし、相川さんも自分も、読売サッカークラブがマラドーナに認識されたことを誇らしく感じました。良き思い出です。

相川さんとの四十二年

柏レイソル強化本部シニアマネジャー
元読売クラブユースコーチ、元ベレーザ監督

竹本一彦

相川さんとの付き合いは、中学二年から。四十二年になる。山手学院サッカー部コーチ相川亮一と出会い、サッカーの楽しさに魅かれながら、同時に、相川さんが醸し出すコーチ像、指導者像に憧れた。将来、自分も指導者の道に進みたいなど、ぼんやりとだが自分の頭に描いていた。

高校一年の終わり頃、相川さんは一通の手紙を部員に残して山手学院を去った。手紙には、「なぜ自分がサッカーコーチをやっているか、コーチはサッカー技術を教えるだけでなく、人を変える、成長させる楽しさがあること、人は必要とされる場所で生きるべきこと、そして最後に、若者は自分の好きなこと、やりたいことに挑戦することが大切だ」ということが理路整然と書かれてあった。

その時のインパクトが強く、尚更、サッカーコーチになる、サッカーに関わりたいという情熱が強くなった。高校時代から、自分の行動指針は、サッカーコーチなのだから、とか、なるためにはどうしたらよいか、だった。

早稲田大学に進学してから、相川さんに連絡を取った。相川さんは、主任コーチクラマーのFIFAコーチングスクールをテヘランで受講し、日本では数少ないFIFA公認コーチになっていた。仕事は横浜駅近くの国際スポーツで店員をしながら読売クラブのスクールコーチ。同時に神奈川県サッカー協会の地域巡回指導を担当していた。月一回の割で、神奈川県内、大井松田や厚木へ、小学生、中学生を指導に相川さんで行った（バイト代はたしか一日四五〇〇円）。横浜で月に二回位、夕方から最終電車の時間までコーヒーを飲みながら、読売クラブのこと、サッカー指導のこと、サッカー界のことを聞いた。

手渡されたテヘランFIFAコーチングスクールの英語の講義録を食い入るように何度も読み返した。クラマーさんがミーティングの冒頭に（社会では、今朝の新聞では、昨日のテレビでは、一九六四年に誰々がーをしたのだが、）という今で言うつかみ、聞き手の関心を引く喋り方で始めることを知った。

コーチの生き方に触れて、「何も問わず働くべし」「勝利する日まで休むべからず」「弱き隣人は常に助けるべし」「二つのことのみ石の如く動かず。一つは人の窮地へのいたわりの心、二つは己の勇ましき心」など、聖書から引用した言葉もあった。

強く印象に残っているクラマーフレーズは「ゴールゲッターは天からの贈り

物」。

例え話や格言の用い方がとても新鮮だった。その頃の自分にとって「クラマー講義録」はバイブルだった。サッカーの基本、考え方のイロハを頭に入れた時期だった。一度、相川さんに詰問されたことがあった。「どうやったら選手はうまくなると思う?」。うまい答えが浮かばず、答えに切羽詰り 10分ほど長考してしまった。泣きそうになった。相川さん独特なニヒルな笑みを浮かべて「試合だよ!」それが答えだった。

相川さんは読売クラブトップチームのコーチに就任した。興味深かったのは、JSL二部を戦う読売クラブの「生のチーム話」。いかにチームを作り上げるのか、次の試合はこう戦うとか、与那城のここが素晴らしい、彼をバイタルエリアで前を向かせるには? とか、入れ替え戦を勝つためにどうしていくか? などタイムリーな生きた話だった。

自分は大学に通いながら母校を指導していた。相川さんの「生の話」を指導に生かしながら、時間を作っては、できる限り読売クラブの試合を見た。DFラインからボールをつなぎ、攻撃をビルドアップしていく読売のスタイルは異彩を放っていた。

守備は激しく、球際のプレーは巧くもあり、汚くもある。局面の攻守の切り替えが早い。個人戦術が高く、チーム全体に（プレーの予測）（インテリジェンス）を感じさせていた。

特に中盤。小見、橋本、ジョージ、この三人の個性、技術、役割観が、読売サッカーたる所だったと思った。今でも大切なプレーの原則だと思うが、DFの背後に入り込む動きのタイミングとパスの質。DFが左と読んだら右に。右と読ませて左に。DFがパスと読んだらドリブルで。ドリブルと感じさせて、パスで突破。ゆつくりと見せて、スピードアップ。スピードアップと見せてゆつくりとワンタッチプレーができる判断力を持つこと。個人のテクニクからチーム全体の戦術まで、相手選手の逆を取っていくことが読売クラブでは習慣化されていた。こんな雰囲気を作り出していたのは、選手とチームを束ねていた相川さんの成せる業だったと思う。

試合や練習で、選手のプレーを分析、評価する時の「コーチの目」についてこう整理していた。プレーをしている選手本人が、

- 一． 何が見えているのか？ LOOK BEFORE RECEIVING THE BALL
- 二． 何をイメージしたか？ THINK BEFORE RECEIVING THE BALL

三．何ができるのか． WHAT CAN PLAY AFTER RECEIVING THE BALL
ワンプレーの中で、前出の一・二・三．の何が不足してミスが出たのか。何が向上すれば正確なプレーに改善されるのか。極力ピッチ内の選手目線に近づいて分析することを大切にしたい。

例えば、ジョージは自分の視野に入っているもの（味方選手、相手選手、スペース）が多く、数秒後の各選手の動きを予測し（相手のDFの背後を取る）頭を使い、技術、体力で（正確なキック、ボールコントロール、ボデイバランス）で予測したプレーを正確に実行する。

トップレベルから育成年代の選手まで、この「コーチの目」があるからこそ選手との対話を可能とするし、選手を知ることにつながった。

読売クラブが入れ替え戦に勝ちJSL一部に昇格。サッカー界にYOMIURIの名前が認められていった。

一九七八年の十一月、大学五年の時、飯田橋駅から相川さんに就活の電話を入れた。〇四四―九六六―七七四六。今でも覚えている読売クラブの電話番号。夜八時頃だったが、「今から来い」と言われようりランドまで行つた。「読売

でサッカーの仕事をしたい」と初めて口にしてお願いした。笹浪事務局長に後日面接し、読売クラブと契約に至った。

一九七九年、「読売クラブ プーマ サッカー教室」のマネージメントとコーチ役が最初の仕事になった。ゼロからの仕事だったので、手探りながら進めていった。サッカー教室ではジョージ、ラモスらトップチームの選手たちとかなり近い距離で仕事をした。特にミニサッカーでプレーをしながら、技術、戦術を盗むことができた。

相川さんはサッカーばかりでなく、ビジネスや社会についても見識があったので、様々な角度から相川流の話を聞いた。中学時代から相川さんと話す時はかなり緊張したが年を重ねてもそれは変わらなかった。場所は六本木、赤坂、世田谷辺りの相川さん馴染みのバーだったこともある。こちらから、話があると誘えば断ることなくいつも付き合ってくれた。大概、相川さんが喋っているが、過去を問うより、前向きな内容が多かったので、話し終わった後に気分転換できた自分がいて、プラスのエネルギーを貰うことが多かった。

相川さんが、成績不振を理由に、読売クラブを辞める時は寂しかった。が、「プロコーチの宿命だから」と相川さんは潔かった。クラブハウスで夜中に荷物を

の整理をしていた姿や、「コーチはチームを持つこと。チームを持てば目標ができる。」「明日、職安へ行つてコーチの職を探すんだ。」というリアルな言葉が読売クラブでの最後だった。

相川さんが読売を離れてからも、年に二、三回は会って話を聞いていた。二〇〇〇年頃、自分がガンバ大阪のヘッドコーチで仕事をしている時に電話を貰った。和光国際高校の若い良い上がり目のMF選手がいるから要らないかという内容だった。監督の早野と相談してテスト生で大阪まで来てもらうことにした。

神奈川県出身の早野は高校時代に国体選抜コーチの相川さんに発掘された選手という繋がりがあり、二人で楽しみにしていた。選手をホテルで休ませ、三人で焼肉屋で食事をして飲んだ。サッカー話や昔話に花を咲かせた。二次会で茨木駅そばのスナックに行った。相川さんは楽しそうに和洋のバラード系の曲を歌った。ちあきなおみの「喝采」が十八番だった。自分も早野もこんなに相川さんがカラオケ好きかと初めて知ることになった。自分たちも歌は好きなのだがこの夜の相川さんは歌いまくった。

翌日、テスト生は練習に参加し、相川さんもガンバの練習を見た。同じポジションの二川のセンスを認め、褒めてくれたことを思い出す。聞けばテスト生は

小学生の時から育て上げてきた選手で、イタリアまで相川さん自身が直接売り込みに行ったそう。この時期は、サッカービジネス、選手の海外進出を手掛ける仕事もやっていた。テスト生のガンバ入りはならなかったが、公私に違うイメージの相川さんを見た時だった。

柏レイソルで仕事をするようになってから、年にも三、四回は会った。赤坂で飲むことが多かった。昼の一時から夜中の三時まで飲んだこともあった。相川さんが指導する駿台学園や日本学園でのチーム作り、選手育成の話を聞きながら、三十年前と変わらないサッカーへの情熱を持った相川さんを感じていた。常に最先端の世界のサッカーの動きや日本代表のサッカーを自己流に分析、批評する姿は相川さんらしかった。

一度、柏のスタジアムに招待したら、足を運んでくれた。自分は強化本部長でトップチームは石崎監督の時代だった。レイソルのサッカーを見せるのが少し気恥ずかしかった。相川さんはフランスの能力は認めつつ、現代サッカーにあのような選手をいかにフィットさせるかの困難さと喜びについて語っていた。もしかしたら、読売創設期のジョージ与那城をいかにチームにフィットさせるか、そしてチームを勝たせるのかを思い出しつつ、現代の一〇番の選手の行き場を思っ

いたのかもしれない。

「偉大なチームより、記憶に残る偉大な選手を作り上げろ。」 相川さんが好きだったその言葉を思い出す。

とりとめのない文章になりましたがお許しください。まだまだ、たくさんのごがあつた四十二年間。

これからも、相川さんは自分の中で生きていくでしょう。

◇ 竹本一彦氏は、山手学院サッカー部（三期生）での教え子でもあります。



1980年 元旦

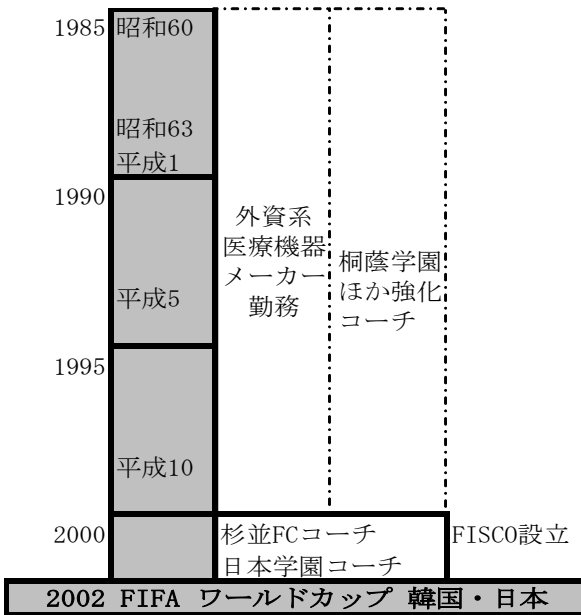
読売サッカークラブ

第一部 相川コーチに捧ぐ

第五章 ユース世代関係

※ 一九八七年 ～ 二〇〇〇年ころ

埋もれたダイヤモンドを求めて



読売クラブの監督辞任の後、相川はあっさりとサッカーを捨てて外資系医療機器販売の営業に転じたかに見えたが、実際にはJリーグ予備軍となるユース世代での選手発掘を始めた。コーチを極めるとは、勝負の世界での「勝利」を達成するとした相川は、実際に全国大会を目標とする高校チームのコーチを務める傍らで少年サッカーや素人チームのグラウンドにも現われ、逸材の発掘を夢見た。また晩年には、母校栄光学園のコーチにも就任し、相川サッカーのDNAを確かめるように「コーチの目」で原点に回帰していた。

相川さんを偲んで

フューチャーイメージ・スポーツ（FISCO）代表、アシスト会長

元読売クラブ選手

澤井光彦

今から十三年前、読売SC時代の友人から相川さんが埼玉県のと光国際高校で土日に指導していると聞き会いに行ったのが二十二年ぶりの再会だった。

それから三年経った頃か、「人生の最後をサッカーで終わりたい。」と言われ恩師と仕事をする戸惑いもあったが、フューチャーイメージ・スポーツ株式会社（略称：FISCO、相川さんが社名を決めた）を立ち上げた。

すぐに、杉並ユース、國學院久我山高校、日本学園高校、駿台学園高校と、さすがに、知名度抜群で、次から次ぎへと、指導依頼の話を頂いた。

しかしながら順調に来ていたところ三年前突然入院した、と連絡が入り見舞いに行った。

変な話だが、病院での相川さんの方が、血色も良く、元気な顔をしていたので安心した。

病名は「糖尿病」がかなり進行していて、心臓・目に合併症が出ていた。それでも、食事制限と服薬と定期検診を条件に暫くして退院した。それから、元氣な頃の、緊張感を与える、相川さんに戻ることはなかった。立つと体に力が入らずフラフラとしていた。それでも酒好きだったので食事制限はするものの酒は続けていた。酒の力でか、呑むと相川節が聞いた。止めたこともあるが、

「俺はアル中だから、呑むしかない。それでも、それなりに制限している。」と、冗談を言い聞く耳を持たなかった。お互い、必要な時に連絡を取り合い会っていたので、訃報を聞いて残念だったが、驚きはしなかった。仕事のパートナーとしてだけではなく、人生のベストな相談者として頼りにしていただけにポツカリと穴が開いてしまった。

「人を愛さなければ、コーチは出来ない。」と言われたことを思い出す。
その通りの人だった。

亡くなって寂しいが、「楽になれて良かったですね。」とも思う。
自分が自分でない辛さを、きつと、感じていたに違いない。

ご冥福を祈り、相川さんが名付けの親である会社をしっかりと守り続ける。

別れの言葉

神奈川サッカーリーダーズスクール受講者

宗形 弘

相川氏に初めてお会いしたのは、一九七五年（昭和五十年）四月十二日、神奈川県サッカー協会主催の第一回コーチングスクールでした。当時の相川氏は県協会の技術委員長、および読売クラブのアシスタント・コーチでした。

いま考えると、私は「蹴球」？をしていて、相川さんから「サッカー」を教えていただいたようなものでした。

相川氏の言動は、当時の私には、よく理解できず、読売クラブの試合を、仕事を休んで見に行き、検証していました。

読売クラブが、日本リーグの入れ替え戦に勝ったとき、試合後、西が丘サッカー場のグラウンドに下りて「おめでとうございます」と言ったら「お元気ですか」と握手してくださり大感激でした。

相川さんの考えの一端である、相手の逆を取るS O C C E Rを、これからも、子どもたちに伝え続けていきたいと思っています。

相川さんの頭脳、人間としての器の大きさなどを考えると、代表チームの監督になってもよい人材だったと思います。当時の日本協会の幹部（丸の内組）の見識のなさが嘆かわしい気持ちです。

・・・本当に惜しい人をなくした・・・。

私と相川さん

元ヴェルディ総監督、元桐蔭学園サッカー部監督

李 国秀

二〇一一年二月某日、相川さんの訃報の知らせを電話で聞いた。お驚き、落胆より、逝ってしまったか？と。

思い返すと、私のサッカー人生の節目に必ず彼が登場する。

私と相川亮一さんとの関係はとも縁が深く波長の合う人だと思う。

ある時、ある人が、相川さんは李さんのサッカーの師匠ですか？と、聞く人がいた。その時は、妙な事を聞くもんだな、と思った。

私と相川さんとの関係は一体何だったのか？と、彼の死を通して考えてみたが言葉が見つからない。敢えて申せば「そよ風のような関係」と思っている。

サッカー界の現状や未来について、育った読売クラブの事など。とにかくサッカー一色、真っ直ぐな人だ。名が欲しいと言うわけでもなく。金が欲しいと言うでもなし。一昔前の侍のような潔さを持っている人だった。

私とは常に対等に接してくれたし、私のサッカー感に対しても認めて頂いたと信じている。

一九七四年、七五年の読売クラブ選手時代。練習を終え小田急よみうりランドから登戸へ。

南武線に乗り換え、武蔵小杉。東横線に乗り換え相川さんは白楽で下車するのだが。

その間サッカーの話を夢にした事が懐かしい。相川さんは「李、この形ならどの様に打開する？ このケースは？」と、質問攻め。それに対し私が答える形の話が続く。その後、私が香港のプロキヤロライナヒルへ行く時も、その監督はFIFAライセンス取得合宿で一緒だった、と教えてくれた。トライスター時代は読売の若い選手達を引き連れた相川さんと対戦。試合後など歓談した事で縁が続いたと思う。

一九八七年私が桐蔭学園を指導する事が決まり、何時の日だったか彼が桐蔭グランドに現れる。彼は「李、お願いが有るのだが」と。「選手には直接話はしないから側で見させてくれないか」と言ってきた。次に「ベンチに座らせくれ」と言うので彼の希望通りにした。

彼とは育成論を話した事も、戦術を語った事もないが、時々試合に現れては私の話を聞いてくれた。そして自分の考えを言う。互いに語る中で成長、変化、こ

の先のような会話が弾んだものだ。この間、桐蔭学園学校関係者は、彼を知る人はいない。では彼は何者なのか？

私の良き相談相手として「桐蔭時代と一緒に懸けた同士だ」、こんなこと書いたら天国で「バカヤロー！」と言ってるかな。

ヴェルディ監督時代は、特に連絡は無く、彼の気が向くままの関係が続いた。

二〇〇一年私が韓国プロリーグに参加する企画を持っていた。結果的には形にはならなかったが同じ目線、情熱で参加頂いた。

二〇〇三年厚木の地でサッカーパークをやりたいのだが？ と相談。この時も親身に変わらぬ応援を頂いた。こう書いていながら思った私と相川亮一、似たもの同士？同志？と言ったら私を褒めすぎかな。

◇ 李 国秀氏は、神奈川県横浜市出身の元サッカー選手およびサッカー指導者。現役時代は攻撃的MFとして読売クラブなどで活躍。横浜トライスター、桐蔭学園高校サッカー部での指導を経て一九九九年からはヴェルディ川崎の「総監督」で最後の指揮官となる。読売退団後、二〇〇三年から神奈川県厚木市に開場したフットサル場経営および指導者として少年選手・指導者の育成を重視している。

相川さんに教わったこと

元國學院久我山高校サッカー部監督
藤原英吾

相川さんとの出会いは、三十年以上も前の神奈川県ของサッカーリーダー・スクール、今で言うC級コーチ講習であった。その講師が、当時、読売クラブの監督であられた相川亮一氏であった。氏が、C級コーチの講習に百時間にも及ぶ時間を割いて下さったのである。そのサッカーに対する熱意からして並外れていらした。当時、サッカー指導者講習の初級に当たるリーダー・スクールの講習時間は、東京都や他県では十時間ぐらいであった。百時間と言えば、今のS級と同じぐらいの時間である。それも日本のトップレベルのチームの監督である相川氏からサッカーの何たるかを、読売クラブの強さの秘密を教えていただいた。

そのころは、日本のサッカーは、まだ組織としてのプロがなく、トップリーグは日本リーグであり、当然アマチュアであり企業チームが主体であった。その中でもプロ軍団読売クラブが苦節十年、日本リーグ二部（地域リーグ時代も含めて）を経て、日本リーグ一部に上がり、強豪と言われた時期である。その個性あ

るプロ軍団、テクニック、才能あふれる、やや不良な（ごめんなさい）軍団を日本のトップチームにまとめあげたのが氏であると今でも信じて疑わない。その読売クラブ監督である氏がどんなサッカー観、サッカー哲学、戦略、戦術を抱いているのか勉強したくて講習を受けたのが出会いであつた。そして相川さんからサッカーの何たるかということ、サッカーを頭で考えるということを大いに教えていただいた。

また、その当時、早稲田大学ア式蹴球部に在籍していた私は読売クラブとの練習試合でもずいぶんと影響をうけた。早稲田大学は監督が堀江忠男先生、コーチが宮本征勝さんで、両先輩とも、オリンピック代表選手であり、その薫陶を十分に受けた早稲田は、大学では強豪であつたが、日本リーグの読売クラブに何度となく胸を借りた。

読売クラブのメンバーは、ジョージさん、ラモス、戸塚、都並と日本代表のそうそうたるメンバーである。強かつた。上手かつた。コテンパンにやられた。おまけに誰とは言えないが、肘打ちを何度となく食らつた。ワン・ツ一の時、何度も足をかけられた。ずるかつた。何をやられようと学生である早稲田は宮本さん

から、黙ってやれと言われた。こちらのせめてもの抵抗は、正当に激しく戦って前半ストッキングを下ろしてプレーしていた読売の選手が後半から脛当てをつけて出てきたぐらいである。

私が身をもってサッカーの何たるかを叩き込まれたのも相川さんから教えていただいたことである。

余談となるが、その当時、私がサッカーをやっていて、今、現在でも通用するいくつかの本物といえるものを感じている。それは、メキシコ五輪銅メダル組の確固たる技術。勝負に対する早稲田魂。そして、相手の裏を取る、読売クラブの技術、戦術である。

それから、時を経て、私が國學院久我山高校サッカー部の監督をしていた時期にまた縁あって、改めて氏からサッカーの何たるかをご教授していただく機会を得た。特別コーチとしてサッカー部を指導していただくとともに、私自身にもサッカーのことも含めて、人世においても勉強となる数々の示唆をいただいた。そのころ氏は、外資系企業のバリバリのビジネスマンでGE系の企業に勤めてお

られた。ジャック・ウエルチの話をうかがった時には、興味もわき参考にもなったことを思い出す。

一方、久我山高校のサッカーの方も、久我山は東京の代表になるぐらいのチームであったので決して弱くはなかったが、より上を目指し、結果もサッカーの内容もより高みを目指し、全国の強豪を目指し、氏を招聘して、実際に強くなり、内容も良くなった。わずか二年間の短い期間であったが、もう少しお世話になっていればと残念でならない。

その後、私は機会あつて母校、早稲田大学サッカー部コーチとして五年ほど手伝うことになった。早稲田も関東大学サッカーリーグの、さらにその下の東京都サッカーリーグに低迷している時期であった。関東二部に上がり優勝して、関東一部に上がり、リーグ戦で優勝こそできなかったが、大学選手権では日本一になることができた。学生の指導をしていた時にも東京都リーグであろうが、関東二部であろうが、日本一になるチームの選手であろうがサッカーを志す選手への指導は同じであるという氏の教えが常にあつた。

そして、現在は中学生を指導しているが、相川氏にご教授いただいた数々のことが今でも生きている。熱意をもって指導すること。サッカーを追求すること。そして、トップレベルの選手であれ、高校生であれ、中学生であれ、また上手い下手に関係なくサッカーに志ある者には、サッカーの何たるかを教え、人生の何たるかを教える姿勢は、相川さんから教えていただいたものであり、私の中に生きており、私のかかわったチームの選手の中に生きていると信じている。

これからもう、相川さんとお酒を飲みながらサッカー談議ができなくて残念であります。

相川さんありがとうございました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

追悼文

日本学園高等学校 サッカー部監督

石塚理人

相川氏との出会いは、高校進学を控えた入学予定の桐蔭学園高校の練習に参加したときである。高校入学とは、相川氏は週末の試合でベンチに座っているが、ほとんど話した記憶はなく、謎の多いコーチなどと皆で話していたこともある。ある転機で私が就職口を探していたのをきっかけに、日本学園で四年間共に指導させてもらうこととなった。

私は、多くの指導者の下修業させてもらった。その中の一人である相川氏にはコーチとしての考える楽しさを他の指導者とは違った観点で学ばせてもらった。言葉にするのは大変だが、大学時代の選手としての悩みを丁寧に解決してくれた。例えば、「なぜ慌ててプレーするのだろう」「MFの役割とは」「決定力不足の原因は」など。そんなテーマについて日々グラウンドで相川氏はアイデアをだし改善していくのがはつきりと見て分かる事が私にとって新鮮で毎日の練習が楽しみであったのを覚えている。

相川氏はいつも攻撃サッカーを夢見て、「プレスの破り方」「フラットラインの破り方」といったテーマを題材に研究していた。それを個々の能力で打開するのではなく、チームのボールの動かし方で打開していくわけである。すなわち戦術的な崩しである。様々のことを試していた。無駄では？と思うことが、後にながっていて驚いたなんてこともあった。サッカーは時代とともに進化している。それをコーチは論理的に、そして選手には感覚的に成長させていく。

また、日々グラウンドで、「選手は頭で理解するだけでなくその場で実践することが大事」という言葉を発していた。当たり前のことだが、目から鱗が落ちる言葉であった。要求は正直難しく、プロになるためのものであった。偶然でゴールを決めようと思うとプロとしては生きていけないということを実感できる指導である。

日本学園では、グラウンドの関係もあり、ハーフコートにも満たない中でゲーム形式の練習を行わなくてはならない。「またゲームしてるよ！」というイメー

ジを抱くかもしれないが、実は毎回攻撃なり、守備なりのテーマがあった。技術面や戦術がテーマだったり。これを選手は週単位で習得していくわけで、選手のプレーにコーチのアイデアがあふれ出ていく。

そして、練習・試合毎に必ずレポートがメールで送付される。グラウンドでの指導の他に、記録を残すことの大切さは勉強になった。レポートは、グラウンド内では決してメモする事はないが、グラウンドで指導したことやミーティングの内容である。

いつも選手の成長を待ち、個性ある選手のためにトレーニングプログラムを作り上げていたのがわかる。サッカーとは決してマニュアル化できるものではなく選手の個性に依存することが大切であるという指導をしてきた。

今後は、一緒に学んだ私を含めた指導者たちが、技術のある、攻撃サッカーを見せたいという思いを継承していきたい。日本にも素晴らしい指導者がいることを証明するのは我々教え子たちだ。そんな思いを毎日忘れず、ご冥福をお祈りすると共に、相川氏に負けない指導者になりたい。

相川さんと過ごした四年間

駿台学園高等学校サッカー部監督

浦田尚希

相川さんと出会ったのは、四年前。現在勤務している駿台学園の面接に来た後「サッカー部の監督と話してみないか」と事務長の蔵田さんに声を掛けられ、お会いしたのが最初であった。話した内容はあまり覚えていないが、この人の下でサッカーの指導ができることが楽しみだと思った事を覚えている。

練習の内容は、七対七、八対八のゲームにテーマを与え、トレーニングをしていた。日々、テーマを変え、サッカーの上達は勿論の事、生徒に興味と楽しさを与えることを忘れなかった。このような練習方法で指導する監督と出会ったのは初めてで、とても勉強になった。

システムは 4・3・3 で今では主流になっているが、当時このシステムを使っているチームは少なかった。日本代表にオシムが就任した時代であったが、相川さんの言っている言葉の後に新聞でオシムが同じことを言っていることが多く、感動したのを覚えている。

相川さんの行動は力が抜けていて格好良かった。服装はいつもグレーのウインドブレーカーを着て片手には夕刊現代とスターバックスのコーヒーを持って赤坂から電車で練習に来ていた。発する言葉の一つ一つに芸術性があり、生徒には難しい部分があったと思うが私は話を聞くのが楽しみであった。

ある日、相川さんが入院したというのでお見舞いに行ったら、ベッドの横にデッドマール・クラマー氏の写真があった。その時は、尊敬する師匠の写真を飾っているのかと思ったら、クラマーさんが直々に相川さんに励ましの手紙を送ってきたと聞いてびっくりした。相川さんはあまり喜びの感情を表に出さない人であったが、このことはうれしそうに話していたのが印象的だった。

私のサッカー人生で少年の頃は読売クラブ、高校の頃は、桐蔭学園、読売ユースが憧れであった。そこにはいつも相川さんが携わっていたのを後になって聞いた。私のサッカー人生に常に憧れのサッカーをしていた人に最期出会えたことを幸せに思う。また、指導した最後の時間を共に過ごせた事を光栄に思っている。相川さんから教えてもらった指導を受け継ぎ、相川チルドレンとして後世に伝えていきたいと思う。

相川さんを偲んで

埼玉県立福岡高等学校サッカー部顧問会長

武田 淳

私の机上に一冊のサッカー指導書がある。世界に一冊しかない指導書である。私はそれを「相川レポート」と呼んでいる。

それには、「練習での問題点や解決方法」、「試合の内容や技術的なアドバイス」、時には「日本代表のサッカー、世界のサッカーはどうあるべきか」ということまで踏み込んだものや、あるいは「生徒の心の中やそれを取り巻く家族や環境」、「人としての在り方」といった内容が書き込まれている。今読み返してもその時の光景が思い出せるくらい細かに書いてある。生徒ひとりひとりの動きや心理、チームの向かうべき方向など、褒め言葉は少なく、ほとんどは厳しい言葉なのだが、実は情にあふれている。約四年間のレポートが一冊の本になり、言うなればサッカーの技術書と心理学、行動学が一緒に盛り込まれているのだ。

相川さんとは本当に千載一遇のような出会いだった。私が埼玉県立和光国際高

等学校でサッカー部の顧問をしている時、田中さん（部員だった生徒の保護者）から紹介されたのが縁だった。指導を受けるに当たり、正直受け入れて良いものか迷った。肩書きを聞けば、さらに驚くばかり。こんな名もなき高校で本当に指導していただけるのかと思う反面、指導者としての自分のプライドもあった。

しかし、私自身中学・高校・大学とサッカーをやってはいったものの、本当の指導者の下で指導を受けた経験がないまま、生徒に指導してきたことを考えると、自分も勉強の意味で思い切ってお願ひすることにした。その時、私自身がもつとプライドを誇示していたら、断わっていたに違いないと思う。

相川さんは「お腹の出た普通のおやじ、しかし、眼光は鋭く、気難しい人」というのが私の第一印象だった。週末はほとんど練習を見ていただいた。駐車場に相川さんのシルバーのチェイサー（当時乗っていた）の車が止まると、生徒たちも私もなぜか緊張したのを覚えている。そこから降りてくると、「YOMIURI」の名前が入った緑のユニホームを裏返しに着てグラウンドに出てくる姿は、第一印象とは違い、実はお茶目なのかと思うほどで、その姿は今でも忘れない。

練習は基礎基本、それこそボールの蹴り方から教わった。当然、ここに集まっている生徒は、サッカーを第一に考え、ましてやプロを目指そうなんて思っている選手は一人もいなかった。技術的にも精神的にも意識は低かったと思う。そういった生徒たちを厳しく指導していただいた。とくに「心の弱さ」については、徹底的に叩きのめされ、時には驚くほど衝撃的な言葉が出てくるのだが、決して憎いから下手だから怒っているのではなく、サッカーを愛するが故の愛のムチなのだった。

埼玉と言えばサッカー王国と言われているが、和光国際高校は県内でもなかなか強豪校とは練習試合などできるレベルではない。そのような学校を本当に熱心に指導していただいた。また、さまざまな援助も受けた。当時、夏合宿は各部活一回だけという校内の決まりがあり、サッカー部は群馬県の嬭恋村で合宿をしていた。そこへ静岡遠征の話を持ちかけていただき、日帰り遠征という名目で遠征に出た。東海学園第一高校（現東海大付属翔洋高校）などと練習試合を組み、川口能克が下宿していたという日本閣に泊めていただき、サッカーを熱く語ってくれた親父さんにも出会った。正月には、読売ヴェルディユースと練習試合を組ん

でいただき、よみうりランドまで足を運び、ベルマーレユースとも練習試合をさせていただいた。生徒たちにとっては、ただ練習だけでなく、成果を上げれば様々なチームと試合ができる喜びを教えていただいた。結果は当然大差で負けるわけだが、内容にこだわった指導をしていただいた。

相川さんを通じて多くの方と知り合うことができ、サポートをしていただいた。澤井さんをはじめアシストの皆様、志賀さん、田所さん、『サッカー監督という仕事』の著者湯浅さんなど、名もなき高校にサッカーを通じてお世話になることができ、生徒たちはその当時は感じなかったかもしれないが、きっと今その喜びを感じているに違いないと思う。

指導者の一人として、相川サッカーを微力ながら継承していくこと、それが私の相川さんへの恩返しと思っている。

生涯一コーチ

FC和光キッカーズ代表・監督

田中泰子

相川さんが亡くなった？ まさか！ 知ったのはすでにご葬儀も終わっていた三月七日の事でした。愕然としました。一月十六日の日曜日に子供達にご指導してくださいましたその四、五日後に亡くなっていったらしいと知り、私が風邪のためグランドに行けず相川さんの最期のコーチングの現場に居られなかった事、お会いできなかった事が悔やまれてなりません。数年間、相川さんには年に一度のサッカー教室をしていただいていましたし、三年前からは「キッカーズも観てあげましょうか？」と、年間十三日程でしたが指導に来てくださっていました。

相川さんとは一九八八年に埼玉県和光市でサッカーは素人の親達が地域の子供達のために困り果ててFC和光キッカーズを作った時からの長いお付き合いでした。六年生のお父さんが外語大のボート部の監督をしていらして、同僚の方に相談したところ、こんな人がいるよということと、ご紹介いただいたそうです。私の息子は五年生でしたが、初めて子供達にご指導していただいた時、感動のあまり涙があふれたのを覚えています。いろいろな事情で翌年から私が代表を務める

ことになり、ワールドカップなんてテレビでも見た事もなかった私を相川さんは根気よく教育してくださいました。二年程は言葉も理解できないほどだったと思います。お話を聞いているのが精一杯。相川さんは質問する事には全てきちんと答えてくださいました。お陰で私の頭の中は整理されて行っただのだと思います。今では私の言葉が相川さんの言葉と重なるのを実感でき嬉しく感じていました。

一九九二年頃からは和光二中の大井先生が「こんな所で相川さんの様な人が指導しているなんて信じられない」と言いながら、和光キッカーズでの相川さんの練習を観に来られるようになり、相川さんの和光二中でのコーチングも始まりました。そして、二年程で埼玉県大会第三位という素晴らしい結果を残してくださいました。どれ程子供達に自信と喜びと希望を与えてくださったことか計り知れません。

そして次は大井先生と一緒に和光国際高校のサッカー部顧問の武田先生に交渉です。すんなりではありませんでしたが、相川さんの和光国際高校でのコーチングが始まりました。武田先生には色々な意味でご苦労をおかけした事と思います。素晴らしく上手ではない子ども達が見るうちに整ってくる。表現が合っているのかはわかりませんが、でこぼこしていたものが平らになる感じです。全体のプレーが美しくなっていくのです。グラウンドには山手学院、日本学園、杉並FC

等々、相川さんの関係するチームが訪れて、「ここで相川サッカーやつてるぞ！」と言わんばかりの充実した日々がありました。

そこで育った二人の選手、（杉並の澤井さんにも大変お世話になりました。）松崎君と山田君を二〇〇〇年の八月には浦安の齊藤さんの繋がりのあるイタリアで試させる旅に。こんな経験は今しかできないと感じ、私も運よく同行させていただくことができました。松崎君はその前にドイツでの武者修行を二ヶ月程しました。本人にとっては心細い不安な修行だったと思います。その後二人は平成国際大学へ。

相川さんは子供達の心の成長にとって大切な時期に大きな影響を与えてくださったと思いますし、子供達の青春がサッカーを通して充実していたからこそ、今当たり前の三十代の大人になっていると思います。子供達は相川さんに心から感謝しているはずです。選手の皆さんが羨ましいのですが、指導して頂いた者にしかわからない喜びと感動とコーチの愛情を私もそばで少しだけ味わう事ができ幸せに感じます。

私の様なサッカー経験のない家庭の主婦が今グラウンドに立ちサッカーを指導しているなんて邪道だと思います。何度か相川さんに尋ねました。「私の様な者がこんな風にやっついていいのでしょうか？」と。相川さんは「人間死ぬまで働

くんですよ」とおっしゃいました。「辞めた方がいいですよ」と言われたら、すぐに辞めていたでしょう。

相川さんのそばで子ども達が戦える選手に育って行く過程を観ていて、私にもこの部分是可以るんじゃないかと思いましたが、しなくてはならないと思いました。相川さんのお陰で見えて来るものも多くはなりましたが、正直サッカーを指導する事は難しいです。

最後になりましたが、最初の入院の時にクラマーさんから届いたお見舞の葉書を二年前にグラウンドで見せてくださいました。ご遺影の写真の様なシャイな少年の様な、とつても嬉しそうな顔をなさっていました。クラマーさんのことを慕っていらつしやるのがよくわかりました。あれは相川さんの宝物だったのですよね。そして、『生涯一コーチ』として人生の幕を閉じられたんですね。早すぎます。今年はレッズの女子ジュニアユースに上がった風薫を売り出す予定でしたよ。楽しみにしていらしたじゃないですか。残念でなりません。

相川さん、長い間本当にお世話になりました。心からお礼を申し上げます。ありがとうございます。

相川さんとの出会い

Fc希望ヶ丘ライオンズ副代表
Fc湘南ジュニアユースコーチ
工藤雅彦

相川さんと初めて出会ったのは、一九七七年の神奈川県サッカー協会主催のリーダースクールに私が参加したときです。

湘南高校で行われた開講式で初めて会った時の印象は「ぶっきらぼうな人」でした。

それから約半年間、ランド（よみうりランドのグラウンド）に通い相川さんの指導を受けました。

その時の経験が私のコーチ人生に一番影響があつたと思いますし、相川さんが私の人生に一番影響を与えた人であつたと思います。

私は東海大学体育学部を卒業いたしました。大学時代でその後の職業（コーチ業）に一番役に立ったのは相川さんの講義でした。コーチングについて大変役に立ちました。

その後、相川さんがメデイカルに移ってから偶然仕事がらみの付き合いが始まり、アシスト(株)に入ってから、酒の席を囲むお付き合いをさせていただきました。

相川さんありがとうございました。

天国では楽しくサッカーしてください。

第二部 相川亮一 遺稿集

※ 二〇〇二年 ワールドカップサッカー大会前後

2002 FIFA ワールドカップ 韓国・日本			
2005	平成15	ほか	
	平成20	栄光学園 コーチ	駿台学園 コーチ
2010	2011. 1月	逝去	

一九七〇年代に始まる相川のプロサッカーコーチ黎明期において、相川は「少年サッカー王国」を築くことを夢見た。そして神奈川県サッカー協会技術委員会レポートや読売クラブの創成期の寄稿文などにより、相川が独自の理論を展開しながら着実にその夢を追い続けたことがわかる。

また、後年二〇〇〇年代になつてからの文章と比較すると、自分の構想に従い夢を次々と実現化し続けていて、しかし何十年経つてもその目標がブレていないことや最後には自分の育ったサッカー風土に回帰して、さらなる前進を図ったことなどがよくわかる。

<資料目次>

第二部 相川亮一遺稿集

1. 山手加藤主将への手紙		1
2. 山手コーチ辞任メッセージ	1971 年	7
3. 神奈川県サッカー協会技術委員会レポート	1978 年	11
4. サッカー王国を目指して	1985 年	12
5. クラマー講習会レポート	2002 年	14
6. YOMIURI WINGS 創刊号 (クラブ広報誌 寄稿文から)	1980 年	25
7. 読売クラブのサッカー ～総合クラブを目指して～ (ヴェルディ 40 周年記念誌から)	2009 年	32
8. コーチの中のサッカー風土に出会いに行く (栄光サッカー部創立 50 周年記念誌 寄稿文から)	2001 年	42

※ 以下は、相川コーチが当時のサッカー部加藤主将（一期生）に残したメモである。当時は、サッカー部員全員が各自「サッカーノート」に練習や感想を綴りそれを相川コーチが読んでコメントを返していた。

あらゆる帝国は不満の上に建てられた。そしてそれが滅亡するときの原因といえば、結局は不満を忘れ、発展することを放棄する精神の出現による。ぼく個人は常に山手のサッカー部を帝国にすなはち最強の力をもった容易にうちまかすことができないと、他のチームに思われる様なチームにして行こうと思いつけて来た。そのために、たえず不満をみつけだすこと、それも又ぼくの仕事のひとつである。

山手はどこの部もそんな感じだが、本来の部活らしい部活、すなはち高3がいて、チームをひっぱり、高2がいて高3をたすけ、高1がいて、高3高2を追いかけて、はげしく、だが気もちのよい競争を展開する前にそういう体制が不可能になってゆくみたいだ。

一方に受験というものがしっかりと本当に頑固にそびえている。「我々は受験なんかどうでもいいよ」とか「なんとかなるよ」とかかってサッカーに君達をうちこませようとする立場は今までもとってこなかったし、この先もとらない。そういったまるで天災みたいなものがあるということをちゃんと計算にいれる上で、なおかつこう言いたい。71年の部活（君が具体的にいつ正規の部生活を終えるかどうか、こまかいところはここでは言わない）をleadしていくのは1期生なのだというのをである。この仕事は次の理由から困難に思える。それは、

- 1) 仕事の内容がわからない
- 2) 他人をlead-upするというと、何か特別に意義があるように思われてきて積極的になれない

具体的に考えていこふ。部活は、試合と練習とで成り立っている

る。ひとりのplayerであること、ひとりのleaderであるということはどうちがふかといっても、leaderとして同じ様に試合し練習する以外にやることはない。だがただのPlayerの時は極端に言えば、他のplayerがダレていても、自分ひとりしっかりやっていればよかったろう。けれど、leaderとしては、常に全体がうまくいっているのか、全体がダレているのかということに気を配らねばなるまい。そしてそうでないなら、そうなるようにしなければならない。そうするためにcoachとかなんかでも同じことなのだが、やたらにどなればそうなると思っているひとがいる。

2) に関係することであるが、他人をlead-upするといっても、日本ではすぐなんでもかんでも俺についてこい、文句を言うな、しっかりやれ式のleaderが多く、これが結局leaderというのは何か意気がついていればいい あるいはそうしないと leaderではないのだと云うふうになりこまれるようになった。

まあそれはそれでかならずしも全部ダメだとは言わないが、要は「目的」は何かその「目的」が実現すればいいものかどうかということではないだろうか。目的はかんたんである。チームを自分達のきめた目的にむかって本当に組織としてうまく働きかけるということである。その「目的」のための手段はひとつではない。どなることもひとつの手段としてはみとめられるから悪くはないけれど、要はチーム全員がleaderの指示にしたがう、leaderの判断を要するということがあたりまえな場をつくることである。

そのためにleaderたる人はSoccerに限らずどこにおいてもこうでありたい。

- 1) 自分の言葉に責任をもたないと他の人がついてこない。
「ガンバロウ」と言う、他人に要求するからには誰がみてもそのleaderが一番がんばらねばなるまい
- 2) 態度が一貫していなければなるまい。ふらふら考えがかはりそのため1日ごとに他人に接するその仕方がかはっていては信頼を勝ちとれない。
- 3) 他人のめんどうみをよくしてやらねばなるまい。

- 4) 他人を良く観察しその人間の特色をよくつかみ、つかんだ上でleadすることである。
- 5) leaderをなぐさめてくれる人あるいは教えてくれる人は誰もいないのだということを知らねばなるまい。ある場合leaderはplayerをなぐさめたり元気付けたりする、だがleader自身はまったく自分で自分を（くじけそうになっても）支えるしかない。

我々はこれから関東大会をむかえる。新人戦では失敗したが、内容を考えると不満をそこに見い出すと同時に、「よしこの次は」と思っても別に夢をえがいているのではないことを言いきれだけの自信をcoachはもった。だが、playerの方はいったいどうなのか？ 組織（team）はどんなにきたえてもきたえなおしきたえなおしていかなければ、くずれる。

特に高1の中心選手達が今ひとつの自覚をもっていないように思える。これは危険である。中3の一部もヤル気がない。練習における甘さはせりあった時に出てくるだろう。こういうことは、スポーツは昔からかはらない。また、ひとりひとりのplayerが果たしてほんとうに逆境をはねかえせるだけの強さをまだもっていないことをこのあいだの神工戦は証明してくれた。何よりも自分自身に対して甘い。

つまり自分自身に不満をもたないでいる。これは危険である。むしろ素質とか能力とかで、あまり良いとはいえない人の方が、がんばっていたし、又がんばった時こういうことはすばらしいことなのだし、teamというものは結局そういうコツコツとした努力を果たしている人のみでつくりあげるより他にできないものであるということは、関東大会は現実には負けるかも知れないということでもある。

だが、それはそれで長い目でみればよいのだという立場をcoachとかleaderはとるしかない。というのは、結局のところ、人間がもっている最もおそろしい敵は思いあがり、うぬぼれだからであ

る。「この態度でいいんだ、いいはずだ」と思いあがって努力をしない人はいつかはteamにとってガンになる。

seasonははじまったばかりである。進歩することをやめればさきはみえている。中3がはいってteamがまがりなりにも11人以上となれば、あたりまえのことが守られねばならない すなはち「練習をやらねば試合には出られない」正直いってこの点でcoachの方はいつも苦労してきた。だがこれからはあたりまえのやり方でいくべきだと思っている。

そういう部活にもひとこと、そういう困難な仕事を背負う事は1期生の君あるいは2期生の中心選手達の他に引き受け手はいないことに注意されたい。義務ではない。だが他に誰がやるかということなのだ。そしてもうひとつ大切なことは、この仕事の代償は君達自身が希望するものすなはちteamが勝つことである。自分の力で自分の欲しいものを手にいれる基本はここにある。他人がやれることはけっしてない。

最後に我々はたとえ抽選であったとは言え負けは負けなのであるが、この負けのなぐさめが次のgameに見つけるべきである。けっして他人の言葉の中に感じて満足するものではないが、ひとつは相手が試合後、山手とやりたかったと言ったことの意味を考えてもらいたい。手頃な相手だからというつもりであればそれは現実を知らない、相工くらいになれば自分達のためになるgameということをいつも考える。もしぼくが相工のcoachでも神工よりは山手とやりたかったと思う。

そして今ひとつ、ぼくは鈴木先生の求めに応じて自分のteamの中から推センできるplayerを伝えておいた。これが何を意味するかは言うまでもないが、国体の選考はもうはじまっているのである。本大会に出られなかった他のチームの諸君より一歩先んずるchanceであったが、それらの内の何人かは自分がそのように今試験されているとも知らず、まずく意志のたりないplayでみすみすchanceをのがしたとも言えるのである。

この様に我々はまだまだ足りないが、けっして一昔前のイナカチームそのものではない。一步あやまれば又あともどりしてしまう危険があるだけに、慎重になるのだが、同時にこれまでの努力を更に続けていけば、誰もが我々の存在をみとめざるを得ない。

そして、もっともぼくにとって興味があることはchanceがきたらそのchanceを確実につかめるということはいったいどうすれば可能なのかということである。ぼくはこう思う。結局、3試合に1試合 調子がよくても仕方ない。毎試合、安定するためには、たえず自分に不満をもち、練習でその不満な点をなくしていくより他にないではないかと、、、



※相川さんが山手を辞める時の選手へのメッセージ

「蹴球部の諸君へ」

突然ですが君達と別れることになりました。

理由はかんたんです。「山手では君はいらない」と言はれたので、今までの自分の努力がどんな実をむすぶのかを見ることなく、又、私を信じ私に夢を賭してくれた君達の心を傷つけるのが心残りのまま、去ります。

いつか誰かに言った通り「人は自分を必要とするところに存在することでしか、自分の生きていく意味を見出し得ない」ものです。君達がこの先どのような人生をすすめていくのか、私にわかることはすくないけれども、もし君達が後悔しない様な生き方をしたかったら、この教え「君を必要とするところに行く」ことを頭のすみにとどめておいてください。

今まで、休日や雨の日あるいは夏休みなどすくなくとも今の山手の伝統的ふんいきにはかんけいなく部活をすすめ、みんなよくついてきてくれたものだと感謝しています。

そして、君達の努力に良い結果をもって報いてやりたかったが、遂に、それを、自分の手で果たし得ず去ることは無念です。君達が深い徒労疲労感に襲はれても、私には「そんなもの吹き飛ばせ」「夢をもって、夢を実現する為に自分の人生をつくしてみよう」と言うことはできない。コーチの立場に関係なく私は最前線にいて、同じ問題に同じ様につきあたり、同じ様に苦痛を感じる人間であることを自分に課す人間です。だから、自分をかざって、自分がかっかりしている時にも君達には「勇気を出せ」と言うこととか、自分がうちのめされている時にでも君達には「しっかりしろ」と言うことは、にが手であったし、そんな事を口に出すなら、口にする

より先にまず行動していこうという事を選んできたつもりです。

今回のトラブルも、だから、私が君達のそばにいることが可能なら、私は、どうやってでも、身をもって、きりぬけたでしょうが、はなれてしまっただけは、言うことはすべて結局は口先だけのことになってしまいます。だから「俺がいなくても、平気だ、がんばれよ」と言うのだけはやめます。明日から君達はどう生きていくか部がつぶれてしまうのもよし、寮を出ていくのもよし、自分達だけでやっていくのもよし、自分で決めてください。

私はといえば、結局のところ、10年の時間をこれで無駄にすごしてしまいました。別に誰かに煽動されてこういう生き方を選んだわけではありませんから、誰を怨むというわけでもないのです。でもあなたの方の中には、ここまでやってきたのにと、私を怨む人もいるかも知れません。怨まれても仕方がないことだと思います。他人を動かして、動かすことに成功したけれども目的を達成することができないと指導者というものは怨まれるものです。それは、この世界にあるあらゆることについて真実です。私としては、君達が心の底で私のことをその様に思ってくれたら、かろうじて、かろうじて言える事ですが、君達が君達の魂の中に、物事に情熱を抱いてくれた証左を見る思いです。君達自身にしても、君達が心に抱いたサッカーへの「情熱」を、今となってはサッカーでなくてもよい、自分の魂が真にわくわくと魅了されるものにむけてもらいたいと思います。

私は、10年間やってきて、今、とてもつかれたし、心が動揺したことを正直にいいますが、夢をすてて生きたいとはやはり思はないのです。

私は、自分ひとりがぬくぬくとして生きているのに若い人達に夢をもつことを説く人が嫌いです。私が、今、山手を去って、私自身ものんびんだらりとした生活をおくって、ただ死んでいだけなら、君達に何を言うことができますか。

山手ですごした日々は、私にとっては、楽しかったものです。山手の寮生活は正直いって楽しいものばかりではないでしょう。だから寮を出ていく人もいます。私が楽しかったという意味は、私が、どこにいたのかに関係なく、私が、目的にある心をもって時間をすごしていったから、そういえるのです。

今の時代は、目的をもってくことがむずかしいとも言えるでしょうが、もし目的の達成の為に、自分自身が不十分なら、自分を変えなければならない。むずかしいことだが、自分を変えることに、よろこびを見出さなくてはならない。意志が弱ければ、そして、自分にとって不満であったら、意志を強くしなければいけない。ある知識が必要なら、それを身につけねばならないでしょう。

君達が自分とはいった何ものであるのか、自分が必要とされているところはどこなのか、生きる目的とは何であるのか、を、発見するまで、まだまだ長い時間がかかるでしょう。サッカーのコーチとしては、もう君達には接することはないでしょうが、一人の人間としては君たちが、自身を発見できるまで君達の力になりたいと思っています。

学校の予算で買ったボールは置いていきます。大島先生にあずけてください。メデシンボールは2個だけが学校の予算で買ったものです。アレイは重たいので、もっていきません、ほしい人はもっていきなさい。サッカーの本はほしい人にあげます。

もし部活を続けていくならば、合議制で続けていきなさい。今まで何をやってきたか、今までどういう考え方のもとにサッカーをやってきたかなどにかんけいなく、自分達で決めていきなさい。その方が強くなるでしょう。中学生はCSの時にやることに風当たりが強いから当番制で高校生が指導してやりなさい、そして今のところは、分譲地をつかってやればよいと思います。ということがどんなに大変なことかはわかっていますから、

やれなければ部をつぶしなさい。それも仕方がないでしょう。ただし、県下の高校チームのほとんどは結局、自分達だけでやっています。良い選手をうむだすことはないでしょうが、けっこう成績だけは悪くならないでしょう。強いチームと自分達どの比較して、自分達にないものをさがしだしていけば、はっきりいって高校のサッカーだから高級なことはかんけいありません 蹴れて あたれて、走り負けなければ、(私はそういうのはつまらないと思うのですが)なんとかなること、これはいつも言っているとおりです。

突然すぎるし、又、君達と会って、さよならを言うこともありませんが、私としては、これでよいと思います。お互いに下手に感傷的にならず、私は私で、山手での自分の仕事が不本意なカタチであれ、終わったからには 未来を見たいと考えます。君達は 君達で山手から逃げるわけにはいかないでしょうが、すくなくとも、私の夢にのることは もはやないわけです。

けれど、もし、君達と、私との間にただのコーチと選手の関係以外の人間対人間とのつながりを抱いていた人がかりにいたならば、私はその人には、ほんとうにすまない気がします。そして そういう人逆に 今言えることは 唯ひとつです。「いつでも私の心はひらいています。コーチと選手という関係でなく ひととひとの関係まで、ここで終わることはないでしょう、」と、

それでは いつか君達が山手を卒業したら どこかは知らないが、思いがけぬ場所で再会しましょう。

1971. 11. 28.

相川亮一

神奈川県サッカー協会創立50周年記念誌に載せた
「相川亮一君」の一文（抜粋、1978年）

（サッカー協会技術委員会の報告・昭和53年11月）

技術委員会的発想によれば、今日少なくとも技術委員会の活動に限ってみれば、神奈川ではかくたる戦果があったと胸を張って報告し、回顧できる事実は唯の一つたりともない。それは何故か？ 他者が成果と認め得る物も実績も戦果もいまだに零だからである。しかし、零なのは言ってみれば収穫物に対してであり、種をまき耕しているということについて言えば、我ながら良くやっている方どうぬぼれている。しかし、世のどこに激烈な競争関係の最中にある一方の当事者が、いまだ競争の決着がついていないのに過去を振り返って、うつ手の内容を公開してしまうだろうか。技術委員会がやがて何時の日か胸を張って誇れる成果を世に問う時には、それまでの畑仕事については、どうでもよい事として、別に語らずという事が当然だと我々は考えるのである。

それではいさかストイックな様子さえする技術委員会が、昭和50年1月16日に組織を一新することで、又今日もその途上にあると信じて向けられている目標とは何か・・・

「少年サッカー王国」にすることである。王国は埼玉であり静岡であり広島であるから、だれが最真目に見ても神奈川はその他多勢組の一員であり、そういう評価しかないことについては、ありのままにうけとめるしかない。・・・・・・

リーダースクール、少年・中学・高校・サッカー指導者への提言と続く・・・

「創立60周年記念誌・技術委員会報告（サッカー王国を目指して）相川亮一」（昭和60年4月）（1985年）

◎ことサッカーに対してはマニアックな人間の集まりで組織された技術委員会が、此処10年来取り組んできた目標は、いわゆるサッカー先進地域と比べて何か特徴があり、そしてレベルの高さ、視野の広さを持ったサッカーの場、すなわち「**サッカー王国**」を神奈川に創るということであった。全国有数の「サッカースポーツ少年団」という視野を保持している本県において、共通の目標を持った指導者をリーダースクールより送り出すという具体的行動はこの王国建設の初期における第一の取り組みであった。又、リーダー養成という種をまき続ける仕事をする一方、委員会の中に「指導」という他にはないスクールを置き、私塾的雰囲気の中で様々な作業がなされた。

◎「芽」「成果としてのプレーヤー」

技術委員会の仕事の一つとして国体少年チームの養成があげられる。そこで育った各代表選手を、種から育った「芽」とする以下のようなプレーヤーが名を連ねる。

大友・小柴・早野・植木・戸塚・都並・菅野・上島・平川・田口・福田（全日本）

早川・本吉・柳沢・菊原・小倉（ユース）

◎これからを考えて

少年選手等のトップにあたる国体少年チームは、今や「個性あふれるチーム」として全国的に毎年注目されるに至っている。

59年国体全国優勝は60年記においても特筆されるものとするが前後数年の安定した力は技術委員会として満足はしないが高く評価するところである

広い視野を持った神奈川のサッカーが、これらユース選手、全日本選手を夢見る少年達であふれ、そこにJFAに統括され本技術委

員会の種としての指導者等が配置された時、組織として委員会が大きく動き出すものと我々は考えている

県協会60周年にあたり、技術委員会の目標を改めて提示することは、目標達成のスタートについたということを確認する為である。ここにD・クラマー氏の言葉を借り我々の今を表現したい。

「Do it ！」

2002年6月20日（木） デトマールクラマー講演

2002年6月20日、

デトマールクラマー講演@神奈川県サッカー協会技術委員会「から」

この日、東京は雨。

晴れたら練習だが、クラマーさんが、神奈川協会で講演をするといふので、スケジュールは、はずしてもらってあった。

1973年の秋に、自分と、筑波大の松本先生と二人で羽田からバンコク、デリーと乗り継ぎ、イランのテヘランで、3ヶ月、FIFAのアジア・コーチングスクールで、主任コーチ、デトマールクラマーに相川、サッカーのコーチングを教わったわけである。

日本人同志の「人間関係」を円滑にするためにはどういった心の「もちかた」が必要かといったようなテーマがあるとしたら、「義理・人情」だ「先輩・後輩」「礼儀」等々いくらかでもキーワードがでてくる。

では、アメリカ人の社会では、これもいろいろでてくるだろうが「Being straight(＝率直であること)」「Open mind(＝心を開いて)」「Being friendly(＝友人のような接し方で)」といったように、他にもいくらかもあるが（これらは、日本人「から」すると）どう表現したらよいのか『他人と自分の距離』を「近くに近くに、おきなさい」といっているように聞こえるところがある。だから「こちらのグループだけ」しか『耳に入らないと』誤解して日本人どんどん、アメリカ人との距離をつめてしまう、「ため」になったと錯覚する、ついには自分も「アメリカ人になった」ととんでもないことになる。

「心を開け」とか「遠慮せず、ずばっと物を言え」とかそういうことをとくにアメリカ人のほうから、日本人に「言ってくる」ので

その逆では「ない」ことにも興味があるがそれはカット。

日本人の側の誤解がはなはだしくなると、「みんな、ともだち」ということになるが、どんな社会でも「そういうことは、ありえない」

そういう「方向」とは逆の「ひと、と、ひとの」「あいだ」に「距離」があるということを思い出させるほうの言い方では「To respect others (=他人を尊敬しろ、うやまえ)」がでてくる。

「どんなぼんくら上司でも」「まずは尊敬しろ」ということなのだ。

「そうでなければ成り立たない」「何が?」『職場とか企業とか、組織』とかで、逆に「それがどうしてもできなければ、やめます」と、あるいは「部下からリスペクトされない管理職は、上級管理職から、そういう理由で解雇される」ここはいつそ単純なところがある、がその話しにもいかない。

(いかないが、ここで選手とトルシェの関係は、どうであったのか? という興味はある)

なんでこんな話しをしだすかといえ、クラマーさん、当時27才の自分にとって、かけねなしに「尊敬」する対象であったことを言いたかった。

27才の青年がなにからなにまで「世界を了解していたわけではないだろう」「から」その尊敬の念も、疑おうと思えば、疑える、がほぼ30年前のそのときの自分の心は確かにそうであった。

ところで、今からする話しは、73年よりさらにさかのぼって高校生だったころ同窓にいたやつしかわからない、話なのだが、自分がはじめて接したドイツ人というのがいたのである。

そのドイツ人も実際の「教育者」として当時は「自分の、頭のうへの重い石」のように相川は感じていた、このところは相川「だめな生徒であった」

もっというと例えば相川は登校の際いつも「ぎりぎり」の時間の電車に乗るので「遅刻常習者」であった、それゆえそのドイツ人

から厳しく叱責されるわけである。

なんと言われたかは忘れたが、大変こわい顔で、指をつきつけられて、「そんなことではだめだ、だめだ」といわれたのである。言われても「やはり遅刻していた」

どうして「そのドイツ人の（いまから思えばありがたい指摘、指導）が、相川の心にとどかなかったのだろうか？」

1975年かなにかに、当時自分は、読売でフランツ・ファン・バルコム、というドイツ系オランダ人の監督のもと、コーチとして働いていた。

後援会、といっても、松木の死んだ親父あたりが、選手激励ということで、新宿の中華料理屋へ集合ということであった。

集合時間、「さー6時か、7時か」いまとなってはそんなことはどうでもよいが、最初に、相川がそのレストランへつき、2番目がバルコム監督であった。

そのときは、私とバルコムはまだ一緒に働き始めたばかりであまり言葉を交わしたこともなかったのだが、バルコムが自分を見てこう言ったのである。

Coaches always on time.

『コーチはいつも、時間厳守だな』とでも訳せるか。

変われば、変わるものである。

遅刻常習者の高校生がそうだったのである。

そうやって変化したのは、高校のころのドイツ人教師ではなく、別なドイツ人たる、クラマーさんに出会えた「から」なのだが、今振り返れば、ドイツ人はドイツ人であったということになる。

規律、克己、勤勉、責務、これらがいつも二人のドイツ人から説き聞かされたことであった。

今回クラマーさんの、講演では、彼が英語でしゃべってそれを、相川が日本語で訳すということになった。

サッカーではないのだが、ついこのあいだまで、アメリカ人と日

本人のあいだで、同じことを朝から、晩まで、会議室にこもって、激するアメリカ人、激する日本人のあいだにいてやっていた。

「ああここで、英語をこうやって日本語に訳すると」「アメリカ人絶対に怒りだすけど果たして、いいのかな」と日本人に「そのことを、日本語で念をおしながら」すすめ、あるいは「アメリカ人が、冷静にはあるがuncomfortableであるといえ、実はけっこうきつい不快感を表現したいのだが」それを「不快と訳すか、不愉快」と訳すか、「日本人のほうは不快です」と聞かされても「ふーん」ってな表情無関心。

で、つまりはビジネスといえども心にとどかなければ、動かないこともあるわけだから、「しょうがない、流れからいけば、ここは、不愉快だでいくか」とかそういうことをやっていたわけである。

ただそのころは、自分は「通訳」ではなく「交渉人」と言う位置であった、で、いつも「もめる」のは「そう言ったじゃねーか」

「いや、言ったことは言ったが、コミットしたわけではない」といったたぐいのやりとりが多く、自分は、アメリカ側に「立っている、わけだが」「ばかな、アメリカ人め、だから言わないこっちゃねーだろう」とも思うし、「相手側、日本人が」「今、この瞬間にアメリカの罠にはまる」わけだが、そこでポーカーフェイスをしていなければならないというようなそういうことばかりであった。

だが、きょうは通訳なので、気は楽である。

講演はクラマーさんが、日本にコミットしてきた歴史を実際の西暦年をいいながら、たとえば、19XX年に「どこそこで、どこの代表チームをひきいていたとか」かならず、具体的な時間を、まず言うのである。

この話し方は、クラマーさんの特色である、が、ビジネスマンでも上のほうにいるやつはやはり同じようなしゃべりかたをする。

なぜなら他人に「なにかいうとき」その「なにか」を『時間』の

経過の上に整理して置くことで、本人も「その、なにか」が焦点が結ばれた『絵』になっていくし、それを聞く側も『言葉ではなく、絵が浮かびやすい』からである。

その講演の内容は、相川自身は翻訳ばかりで、手元に記録できないので正確に文章には起こせない、しかしながら、そのほとんどはテヘランで、耳にしたことであるがゆえに、新しさはないが（サッカーは新しいものである必要はないゆえ、それがかまわない）『今』また、インパクトを自分に与えたので、ランダムに記録した。

■ コーチの仕事は「やさしい」ゲームを見て、分析し、練習にその分析をもちこんで、次の試合にのぞむのだ。このワールドカップで自分が見たゲームを（本のような、ノートを見せて）ここに「図」でそのチームの『システム』と『前半』『後半』のクラーマーの分析および『総括』を記録してある、これらは、自分がコーチとして次の機会で「役だたせるためのログである」

■ 日本対トルコ、『トルシェがどうだこうだ』は知らないし興味もない、こういう言い方はクラーマーならずとも、本意としてはトルシェを批判している、と解釈できる。

というのは、韓国について言及したときには、韓国の勝因のひとつがヒデインク、だとはっきり名前を出している、日本の予選リーグ突破を協会、監督、コーチ、選手に「祝福」という言い方はしたが、トルシェの名前は出さなかった。

韓国と日本の差はなんですか？ という大野先生の質問に監督の差だとして、ヒデインクは選手としては有名なハーフだった（言わないが、トルシェはバックだ）。だから守備も攻撃でも「できるのだ」コーチとしてもオランダのクラブをリーグでもカップでも優勝させた、オランダ代表でもコーチであった、スペインも指揮した、（4年でなく）2年しかなかった（ここまでくるとトルシェ、4年も準備してなにしてたの？ という示唆である）のに国際的な経

験の力で、チームをビルドした。ヒデインクは彼の3-4-3システムで「攻撃的」なサッカーを創出し、ヨーロッパのほかのコーチに大きい影響を与えた、現在ヨーロッパのベストコーチの1人だと、最高に評価している。

日本は不運でもあった(サントスのフリーキックをいっている)。しかし、雨でスリッピーな、仙台のあの日のグラウンドでいかにプレイすべきかが勝敗を分けると、ボビーチャールトンとも話していた。トルコは強い（ということは、ドイツ対トルコ、1951年にドイツは1-2で負け、1952年イスタンブールで3-0）のゲームの経験で、前から知っている）、日本に対して、その優位にある体力をおしたててくるだろうことは予想できた。

ならば日本はどうすべきか？ 実際のプレイが、とくに前半、浮かせたロング「ばかりで」ゴールラインを何度もわるようなパスを見ていると失望した。ではどうすべきだったか、グラウンダー（でさえもボールスピードが加速するわけだから）ほんとうに味方の選手の足元に、ワインをとどけるウエイターなみの、ていねいさでショートを、それからスペースに（しかしなおスペースにはいってくる味方に、タイミングをあわせて）ロングである。

対ロシア戦のとくに、後半は日本はすばらしかった、なぜその「集中」がこの日のとくに前半にでなかったのか？ イングランドはすでに19世紀の半ばにプロサッカーができて150年の歴史がある、そのイングランドのサッカーのことわざに「勝っているチームをかえるな」というのがある。

なぜか「チーム（というユニットは）繊細なものだからだ、目をつぶっていても、あるいは目に見えていなくても、味方のプレイが理解できるという、そういう集合体である。そういう内容というものはサブがはいってきても狂うことがある。

サントスを「いれたなら、いれたなりの理由があるだろう」その理由というか目的とはいったい何であったのか？ というのは前

半でサントスを「ひっこめたというのは」「その目的がなにかはうかがいしるでしかないが、目的にそわなかった」「から」だろう。だったらその目的と、目的にそわなかった、ということを選手に「説明してやらなければ」選手は「自分がなぜかえられたか、わからずびくつくだけだ」

「なぜ2得点をいれた、かつ、過去のゲームでは後半になって活躍する稲本をひっこめたのか?」「森島をいれるのはよい、だがなぜ最後の5分なのだ?」。対チュニジア戦では「前半のチュニジアを分析して、ロッカールームで、それが交代選手に、説明され、だから君をいれるのだ、どうプレイすべきか指示もされて」（のはずで）後半ははじめから出てきて、あっというまにゴールゲットできたわけだろう、それが対トルコではどうなったのか?　せめて30分はあたえなければなるまい。

交代は「的確な選手を的確なタイミング」でだろう。そうやって前半失望したが後半は立ち直るかと期待したもののやはりだめだった。コーチは「選手にミスをするな」ではなく「ミスはあるのだ、がミスから学ばない」ということが「いけない」と説く、どんなゲームでも勝てるわけではない。ミスがあったり、相手が強くて負けたゲームでは、選手に「そのチームをリスペクトさせるしかない」ので練習で同じミスをくりかえさないようにして、またその相手に挑戦して今度は「われわれが勝つ」というわけだ。だから準備の段階で、負けるゲームということがあるのはおりこみ済みである、しかしなにがいけないといって(対トルコ戦のように)勝てるゲームを失えば、自分も怒り狂う。

■ グッドであるだけではだめだ、ベターにプレイできるなら、ベターなプレイをしろ

■ 戦術というのは「なにかゲームで、こうしたい」ということができない「ときの、代案策だ」

■ バイエレンでコーチしていたときには、バックは「買わない」とクラブに言った。バックはつくれる。フォワードがストッパーに、ウイングフォワードがウイングハーフに、『サッカーがやれる』やつなら、バックになれる、ゴールゲッターは天からの『贈り物』だ

■ 大和魂は戦争とは関係ない、「おのれの弱さに負けない心」「チームのために、おのれを忘れて尽くす心」「スパイクのひもをしめたら、家族のことも、なにもかも忘れて、また結果がどうでも忘れてゲームに没頭すること」それらを「大和魂」と言ったのだ。

■ フェアプレーを選手にさせろ、子供たちは見ている。

■ 韓国と日本の差、『日本人はどうだ』とは言わなかったが「韓国人はファイターだ」朝の6時に起きて、サッカーだけでなく、アーチェリーの女子選手も、筋肉のつきすぎたウエイトリフターでも400メートル60秒以内を10本走る。3本で走れなくなるウエイトリフターが倒れていれば、コーチがその尻を蹴る。そのあと6時45分から朝食である。

多分、ハード「すぎる」だろう、おなじことを、ドイツではやれない、日本でもむりだろう、また韓国がそういうことをやるのも「伝統」の力ということもあるだろう。今は若者は世界中でそうなのだが、(サッカー選手)金がむこうからやってくる、ほしいものはなんでも手に入る、問題というものがない「から」「髪をいじることぐらいしかない」ということになる。

戦前のドイツでは、食べることができないことが問題だった、戦後は広島のように、街は破壊されてまた、食べられなかった、時間をもどすことはできない「から」「今の選手、こどもたちに」昔

のように「そうしなければ生きて行けなかった」ことを、要求できない。

ではどうやって強い選手をつくるか？ 答えはeducational procedureだろう、つまり教育過程だろう、30才でもベッケンバウアーは自伝のサイン会にきた人々にいわば無礼な署名をした、だから私は「おまえの金は、どこからくるのか？ 人々をオーナーをもって遇せ」と「叱り飛ばした」我々コーチは「教育者」だ。選手のトレーニングだけをコーチするのではなく、選手のライフをトレーニングさせなければならない。

■ 母国ドイツはどうか？ と聞かれて、「ドイツ国内は今回のチームに期待していなかった」予選段階を勝ちながら、コンディションをあげてきた、しかし守備の中心選手を負傷で母国に残しているし、中盤でクリエートする選手も残してきた、ただナンバー1のキーパーがいて、かつ得点を挙げる選手がでてきた(フロデ)から、理屈ではなく期待の感情としては勝利を望んでいる。だがアメリカは「失うものがなにもない」「負けても、あのドイツに負けたんだからと言えるだろうし」体格もよいし守備も強い、ドイツチームといえば、対カメルーン警告を8枚プラス赤紙というのは恥だと思った。昔は実際退場をくらった25才のフルバックは、翌朝呼ばれて、『君の家族たちは好きだが(そういう社交的ないまわしだろう)君にはもうこのチームにいる資格はない、だから荷物をまとめて切符をもらい、家族の元に帰りなさい』と代表チーム追放になった、そのあと2度と召集されることはなかった。ドイツも、ECのルール(つまるところは政治の結果)で、外国人選手ばかりがめだつ、バイエルンミュンヘンでさえ、去年の年末のリーグのゲームでドイツ人は2人しかでていなかった、ひとりがカーンでもうひとり代表ではない、各クラブの下部組織の若い選手はこういうことをいったいどう思うか？ 実際代表アンダー21やら23では多くのドイツ人がそのベースのクラブでは出場機会がないのである。

■ フランスの敗因は、1998年に勝って、2000年のヨーロッパ選手権にも勝った。このあいだのコンフェデでも勝った。ひとつあるいは同じメンバーでひっぱりすぎた。若い血の導入がなかった、このパターンはよくあることだ。

もうひとつはジダンのけがだろう、そのけがも練習で起きたことだ。なぜか1週間に3ゲームもやってくるフランス、イタリア、イングランド、スペインの選手はみんなそれぞれのスケジュールを終えて、たったの2週間しか、代表チームの準備をする時間がなくてワールドカップにでてくる。

ましてやスター選手たちは小さな負傷（でさえ2-3日の休養が必要なのが人間の身体生理だろうに）そうはできずにゲームにでることを要求される、筋肉が疲弊しているのは無理がない。リーグの、構成数は、16チームがいちばんよい

■ ブラジルが良い、良いといわれても、リバウドとロナルドをイングランドは『ゲームからたたきだす』戦術にでてくるにきまっているので、そうになったらどうなるのか？ イングランドは自陣で守っての速攻に鋭さをもつ、ドイツはイングランドの練習試合で1-0リードから同点にされ1-5でドイツのホームで負けたというより、壊滅させられたのである、オーエンもよい、いつもゴールの一点を見る視線がはやい、そしてそこ例えばサイドネットにボールを送りこむ(蹴り飛ばすというのでなく)というゴールゲッターだ。

■ 自分は今77才になった、51年間コーチをしている。基本的にはサッカーは変わらない、サッカーで成功するためには、強い心をもった選手が必要だ。韓国のユースチームをひきいてたときに、明日のゲームの前夜のMeetingで、いろいろいったあと「幸運をいのる」といって、自分の部屋にもどった、少しして、主将と副将が自分のへやにやってきた、（まだ若いのに）彼等が言った言葉は「我々は勝たなければいけないし、また明日のゲームでは勝つ

でしょう」というものであった。

■ 日本の子供たちの精神をどうしたら鍛えられるか？ という質問には、私に向かって「それはわからない」と言った。（こういう経験は幾度かしている、率直に言えば、『外国人で、その道の専門家ならば』なにかわれわれ日本人に「答え」をくれるだろう、という日本人のある種の意識がベースにある）

クラマーさんといえども、「自分が知らないこと、研究していないこと」については語れない（というあたりまえのことなのだが）。最初に日本にくる前は、父親からも、日本を学び、また（日本関係の）本もたくさん読んだ、しかし「今」は、『語るほどには』日本をわかっていないのであるからそれは「みなさん」の問題だろう、というそういう言い方になるのである。

個人的な感想：

1925年生まれだから日本流でいえば大正、昭和のさかいめの世代で、自分の母親と同じということになる。

元気でよかったね、と思った。

それと生涯一コーチという、日本的な言い方だとそうなるわけだが、生きかた（といっても何も見えないのだが）の先達がまだ努力してサッカーをコーチするのだというあたりまえのことを、言い放っているのを目にして、またおのれの「だめさかげん」を自覚した。



YOMIURI WINGS

CLUB INFORMATION

〈発行〉読売サッカークラブ 03-239-1686
東京都千代田区四番町5-6 NTV四番町ビル

NO. 1



スポット

戸塚 哲也

「あれはブラジルか？」
ゲーム中相手の監督が思わず叫
いたことがある。

戸塚のプレーにはラテンの柔ら
かなリズムがある。

クラブ在籍9年、純粋のクラブ
育ちの彼の財産は、尊敬するジョ
ージ・ウーセルからトップ選手から、肌
で学びとったボールテクニックで
ある。日本リーグデビュー以来、

4得点、2アシスト、彼としては
物足りない数字だが、二年間の厳
しいリーグを18才という黄金な時
期に経験できたことは大きい。

外国の選手育成法はこうだ。

「18歳までにチームワークを完成し、
以後は厳しい試合を経験しながら
体力をつけ、サッカーの戦い方を
覚えていく。」

プロをめざす戸塚にとって、チ
ームメイトの信頼をうけ、顧客に
アピールするプレーができるかど
うかが今後の課題。

次代の読売の中心選手。

JFLにとどまらず、国際舞台
をめざす。

関心がにじみでてしまふのは理の当然である。

だが、チームの印象は又別なものである。二部の時代を知らぬ戸塚とか大友のような世代が今後増えていく。昔の時代に限りなくなった選手達は彼ら自身が獲得したものに裏切られつつあるのかも知れない。

クラブサッカーというものがどういうものなのか、その可能性について考えられるのも我々だけの特権である。

それは第一、ひとりひとりの選手におけるサッカー選手としてのイメーヂを彼の純粋さとみなして、意識的に高めようとするサッカーである。今から思えば、こういうチームは2部リーグにいた頃には追求しなくともよかったのである。たゞ一歩へあがるといふ高には別の方法でよかったのだ。

しかし、いざればせよこういう方法は小学生からトップ迄、観客の全選手に適用されている。

一万人のサッカー愛好者がいて、その内幾人かサッカーの中心にいますわり続けるのは一人か二人であらう。残りの人々は自分と同じ世代にそうやって出現する各選手の

人生を、あたかも自分の人生の中心の重要事として置きかえ、みつめ続けるというような時の経過を体験するのである。つまり、ペレのプレーを現に観る事のできた世代は、今ボールに触れはじめた世代よりも幸福であるというように、そんな結構の大体系をサッカークラブは演出可能なのである。

だから、確かに欠点はあるにせよ、78・79年と小見・ジャイロ・ジョージによるヘーフが演じたプレーを御覧になられた方々は幸福である。それから大友や戸塚のようになり一九六〇年近辺に生まれた世代の人々もつい五年前には考えられぬ状況に立ち合ったのである。つまり、同世代の若い選手が結果はともあれサッカー界で行動したのだ。

この様な考え方が種々の反論を呼ぶとしても、販売クラブの原理は変わらない。

すばらしいチームを送り出す前に、最も同世代の共感を呼ぶ個人を。

かかる大目録の達成状況は、去年は今年はどうであったのか。その様な思いにたつて私はただ時の経過のはやさと、昔日の荒野

のようなクラブの姿を想うのである。＊はなし。人の集まりの変化である。サッカークラブの財産はこれから先も他にはない。

販売サッカークラブ構成図

チーム	選手数	公 式 戦	練習日
トップ	26	日本リーグ1部 天皇杯 J, B, L カップ	週6日 (火～日)
ジュニア	19	全国社会人大会、天皇杯 神奈川県リーグ2部 国民体育大会	週5日
ユースA (高校生)	36	東京ユースサッカーリーグ・天皇杯 全国クラブユースリーグ 神奈川県リーグ2部、国民体育大会	週5日 (水～日)
ユースB (中学生)	45	メトロポリタンリーグ メトロポリタンリーグカップ その他招待試合	週3日 (水、土、日)
ユースC (サッカースクール選抜)	15	販売競争少年サッカー大会 さわやか新少年サッカー大会 その他招待試合	金、土、日
サッカースクール (小学生)	250		

今でも私が読売サッカークラブに初めてやってきた日の事を鮮明に覚えている。それは73年の事だからもう7年も前の事である。

あるチームを率いてゲームをやりに来ただけのきっかけであった。何の劇的な予感も覚えたわけではない。読売サッカークラブがクラブサッカーの地歩を日一日と日本のサッカーの風土に浸透させていく事が、果たして何事かであるのか。醒めていると良く評されるのだが、スタートからして気負っていなかった。

その当時、トップチームは日本サッカーリーグ二部で上昇気流中に在ったが、私自身は二部の試合など観た事もなかった。トップチームは、今の降盛が往時に基礎づけられていたが、あとはただ在るというだけの高校チーム、チームとは縁遠い中学生、そして無目的に運営されているサッカースクールという感じを受けた。トップ以外は参加すべき公式試合が皆無という状態であった。

局長と議論した時、私がまずとりあげた問題が、「何故クラブを少年から成人選手迄のピラミッド型選手養成機能をそなえたシステムにしないのか」という事だが、是はコーチなら誰でも発想できる事である。

そう思うなら、やってみろという事で、結局7年もかかってクラブはようやく選手の自給自足システムを内包する処になったのである。

時間がかかった。

一つは、トップがJSL一部に昇格するのに長い時間がかかった事と、もう一つは他に先達のいない本当のパイオニアであるという事がその原因だと思う。

個人的には後述した理由が、自分を読売にむすびつけている絆であると私は常に考えている。すなはち毎日が、新鮮な目標追求の日々なので、最低限度退屈するという事がない。

78年からJSL一部に昇格して二年が経過した。

シーズン中のコーチの意識というものは、馬車馬のごとく、勝ち負けの事より他に向かないのである。

シーズン終了後やや余裕が出来て、勝ち負けの構造やら、その意味について考え始めてみた処で、是はまったく別の思いからかったるい。

どうしても口は重くなるのである。

昨年JSLは二位であった。我が事は至らなかったのであるが、読売クラブの追求目標は遠大である。二年間の一部リーグでの日々は、読売ファンを飛躍的に増やしたにちがいない。その方々からみればJSLの二位も、天皇杯の惨敗も、コーチ百罪に値するとも云うべき結果であろうが、下積みの日々を体験しているからか、我々はあせりを覚えない。

稲城の山上では、うろたえず、めげず、しらせず、臆せず、やがてナショナルイメージとして日本を代表するサッカークラブは読売という評価を確立する為の努力が誇張でなく、365日続けられているから興味のある方は観覧に来られたらよろしい。

昔、二部に我々がいた頃から、実はこういう目標はもっていたのだが、その当時口に出せば、狂人扱いされたであろう。

サッカーというスポーツは、一国がサッカー王国として興る為にはいかにすべきかの議論が沸騰する体質をもっているが、議論もいきつく処迄いけば堂々めぐりである。稲城の山上では、突破口にいる人間の寡黙のみが目立つべきというモラルが在る。口にせずとも事実は頑固につきつけねばならぬ。

日商岩井の海部某さんが毎朝その眼でみる迄は、会社が消えてなくなっているのではないかという不安にとりつかれていたそう

だが、会社のビルがあろうとなかろうと、仕事や、人材がなければ何ものでもないのだが、その伝でいくと、読売クラブって何だろう。

巨人軍みたいに、年間に幾百万の人間が観たいという需要が彼らの存在を保証している。

サッカークラブもはやく、同じ様にならねばという思いが、我々を駆り立てている原動力である。

思いというより、ならなければ明日はどうなるか、わかったものではないという不安を克服する為に、前進をやみくもにはかろうという現状は、食う為につきすすんだ日本経済高度成長下のそれによく似ている。当然さわやかな印象（苦勞せず育った、お金持ちの家の息子のかもしだす様なそれ）よりも、不屈の闘いを勝ちぬく、なんとかゲリラとでもいうべき戦闘感がにじんでしまうのは、理の当然である。

だが、チームの印象は又別なものであろう。二部の時代を知らぬ戸塚とか大友のような世代が、今後増えていく。苦闘の時代に頼りになった選手達は彼ら自身が獲得したものに裏切られつつあるのかも知れない。

ならばサッカーというものが、どういうものなのか、その可能性について考えられるのも我々だけの特権である。

それは第一にひとりひとりの選手におけるサッカー選手としてのイメージを、彼の純資産とみなして、徹底的に高めようとするサッカーである。ただ上へあがるという為には、別な方法でよかったのだ。

しかし、いずれにせよこういう方法は、小学生からトップ迄、読売の全選手に適用されている。他の方法に頭がさけないという??にである。

一万人のサッカー愛好家がいて、その内、????の最後迄サッカーの中心にいはり続けるのは一人か二人であろう。残り

の人々は自分と同じ世代に、そうやって出現する名選手の人達を、あたかも自分の人生の中の重要事として、おきかえ、みつめ続けるというような、時の経過のしかたを体験できるのである。つまり、ペレのプレイを、現に観る事のできた世代は、今ボールに触れはじめた世代よりも幸福であると云い切れるような、そんな虚構の大体系を、サッカークラブは演出可能なのである。

だから、様々に欠点はあるにせよ、78、79年と、小見、ジャイロ、ジョージによるハーフが演じたプレイをご覧になられた方には、幸福である。それから大友や戸塚のように1960年近辺に生まれた世代の人には、あなた方も又つい5年前には考えられぬ状況にたちあつたのである。つまり同世代の若い選手が、結果はともあれ行動したのだから。

この様な考え方が誰かの反論を呼ぶとしても理はかわらない。

すばらしいチームをおくりだす前に、もっとも同時代の共感を呼ぶ個人を。かかる大目標？ の達成状況は、79年何であつたか。

そのような思いにいたって、私はただ時の経過のはやさと、昔日の荒野の様なクラブの姿を想うのである。

グラウンドや、クラブハウスには変化はない。人の集まりの変化である。

サッカークラブの財産は、これから先も他にはない。

本原稿は、『クラブサッカーの始祖鳥 読売クラブ―ヴェルディの40年』（40周年記念誌）からの転載です。

読売クラブのサッカー

ー 総合クラブをめざして ー

元読売クラブ監督 相川亮一

■ユースコーチとバルコム

私と読売サッカークラブとの関係は、1974年（昭和49年）のユースコーチ契約から始まった。

73年の秋、神奈川県の高校国体選抜のチームをつれてよみうりランドに行き、読売クラブのトップチームと試合をしてもらった。当時は読売クラブのメンバーをよく知らなかったが、ジョージ与那城も出てきて、一方的にやられた。その試合を見ていた笹浪昭平さんに「おまえ、面白いサッカーをやるな。うちで働かないか」と誘われた。

大晦日に行われたイラン・テヘランで行われた国際サッカー連盟（F I F A）主催のコーチングスクールから帰って来たあと、正月に笹浪さんを訪ねた。その場で「サッカースクールで小、中学生の面倒を見ないか？ 給料はこうだ」と言われた。そんなによい額ではなかったが、サッカーで飯が食えるチャンスだからと即答して、次の日曜から働き出した。

小学生のサッカースクールは当時、日曜の朝、1時間半くらいしかやらなかった。ごく普通のサッカースクールだった。環境だけは良かった。中学生も大会があるわけではないが、やる気のある生徒が集まっていた。

■バルコムとの関係

当時、読売クラブのトップチームの監督はバルコムだった。トップチームは日本サッカーリーグ（J S L）2部に加盟していて

1部昇格を目指していた。

私は神奈川県の仕事もあったので、ある日、クラブに連絡をして練習を休んだ。

そのとき、笹浪さんにひどく怒られ、「バルコム監督も怒っている」と言われた。監督に理由を聞くと、「俺はこのクラブを統括しているから、たとえ小学生のコーチでも俺のスタッフだ。俺の許可を得ずして勝手にほかで教えるな」と言われた。

それで、「あなたが監督なら、このクラブの将来像はなんだ？あなたの考え方がこのクラブの小学生にいたるまで浸透するよう、我々はそれを受けてやるべきだろう」と反論した。

すると監督は「お前の言うことはわかるけれど、今はトップチームを昇格させるのに必死だ。それ以外のことは全部棚上げでも仕方ないだろう」と言う。それも理解できるし、大きな不満ではなかったので、「わかりました」と答えた。

また、別のある日、バルコムが笹浪さんを通して、「自分が練習を休むときは、相川がトップチームを指導するように」と言ってきた。

「監督のアシスタントコーチがやるべきでしょう」と答えると、笹浪さんに「バルコムは『あいつは俺の言うことをちゃんと伝えてない。自分のサッカー観を選手に話している』と言っている。いいからお前がやれ」と言われた。

次の土曜日、トップチームの練習に行った。サッカーコーチにとって、こういう状況は困る。ずっとチームを見ていて、データがあって処方箋があればよいけれど、いきなりなのだから。ろくでもない定番のような練習で汗をかかせた。

それがバルコムに評価されたかどうかはわからないが、正直なやつだと思われたらしい。

その後、代役はなかったけれど、「入替戦の前に新宿で激励会をやる。お前もそこに来い」と言われた。当日、早く来ていたバルコムに「お前も早いな」と言われたので、「俺はコーチ。コーチはいつも時間通りだ」と答えた。そこから話が盛り上がり、

「入替戦に勝てると思うか」と聞かれた。

英語で説明するのが難しかったが、「自分が入替戦を見てきた印象では、『肉を切らして骨を切る』とか『何としても相手をやっつけろ』という気迫の面で負けている」と答えた。

バルコムは「要するにスピリットだな」と言う。スピリットとはちょっと違うのだけれど、それ以上は自分の英語力では説明できない。「スピリットが足りないのならお前がつけさせろ」と言うから、「そんな簡単なものではないだろう」と思った。

日本リーグ1部に昇格したあるチームは、選手を夜中にたたき起こして走らせたりしていた。でも読売クラブはそんなチームではない。バルコムは絶対そんなふうにはやらせないから、もちろんそれで良いのだけれど、チームで総力挙げてやる、という感じはなかった。そんな水と油みたいなチームが戦って、読売クラブが1点取ればよいのだが、取れなくて負けた。その年の入替戦も、また負けてしまった。

■信念の攻撃サッカー

入替戦後にクラブハウスに行ったら、笹浪さんが「バルコムは辞めて帰った。相川のことを推薦していった」と言う。藪から棒の話ではあったが、野心はあったから「やってやろうか」と思った。バルコムが推薦してくれたのがカギだった。自分のどこを買ってくれたのかは、わからなかったけれど。

当時、自分はまだ29歳と若く、給料も安かった。だけどマネーではなく、自分へのパワーになると思って引き受けた。

しかし日本サッカー協会から「相川という訳のわからない若いやつより、もっとしっかりした監督にした方がよい」という話が出てきた。それで西邑昌一さんが推された。

西邑さんはランドに泊まり込むなど、思ったより熱心にやってくれた。そして静かに観察していく、という感じだった。現場のことは自分に任せてくれた。こちらから頼んだわけではないけれど、練習の流れや組み立ても任された。

ただ、今から思うと西邑さんなりにやりたいことがあったかと思う。それが何かと言うと、やはり早稲田の型にはまったサッカーを考えていたのではないか。

自分には信念があった。

ジョージ与那城を基点に攻撃すれば、どんなチームにも負けないうこと。だけど実際は、ジョージに過剰なマークがついてくる。すごく当たりが激しいとか、2人ついてくるとか、いろいろある。明らかに相手は、ジョージをつぶしに来る。彼もまだ若かったから興奮して、試合がメチャクチャになってしまう。

それをコントロールできないといけない。いかに彼に冷静に試合をさせるか。それが自分のテーマだった。

それからもう1つ細かい点を言えば、ここ一番の入替戦では、頑張りとか体力的なものが影響する。それで笹浪さんに「コンディショニング・コーチ入れて欲しい」とお願いし、東大の走り高跳びの元学生チャンピオンに来てもらった。選手たちは「嫌だ嫌だ」と言っただけで、週1回、その陸上コーチに来てもらって長距離や短距離を走らせた。

■高速プレーの弱点

1977年、笹浪さんは自分のチャンネルを使ってブラジルからラモスとカルロス（・ニコトラ？）を呼んだ。当初は、ブラジル選手の派閥争いみたいなものがあった。「ミスター読売」はジョージだから、ジョージはそのことを怒る。それでラモスたちは、ジョージが自分たちの先輩であることをよく理解した。

最初のうちはラモスの使い場所で困った。彼はスーパーとしてすごくうまかった。一番うまい選手をスーパーで使ってももったいないから、センターフォワードで使おうかと悩んだ。だったらジョージと並べようか、とも。彼らのパスワークは素晴らしく速かった。

ラモスは出場停止で78年3月の入替戦には出ていない。その2ヵ月前に日本リーグ2部の日産戦で、乱闘騒ぎが起きて大問題に発展

した。けれどもチーム構成の中では、ラモスが不在でも大丈夫なように計算を立てていた。ラモスがいなくても入替戦に勝った。

ラモスがいるとちょっと速すぎる、という感じがあった。ほかの日本人がついていけない。ジョージが行くと、追わないといけなし、そのプレーに絡もうとしているのだけれど、スピードが速くて絡めない。ジョージはラモスしか見てないし、ラモスもジョージしか見ていない。そうするとそれは、組織プレーではなくなくなってしまう。

ジャイロの場合は、全盛期のジーコみたいに中盤で止まったりしている。全盛期のジーコはハーフライン付近にいて、ディフェンスの押し上げがあるとラインの後ろにいて、ラインが下がるとフォワードの後ろにいたりする。本人は全然動いていない。来たボール、来たボールをさばいていく。ジャイロも、そういう類（たぐい）のプレーだった。だからチームは落ち着く。

ジョージは1人で行ったらスピードがすごい。だから、それが失敗するとカウンターを食らう。逆襲に対し、小見幸隆などが対応できていれば大丈夫だが、対応できないと失点する。三菱などには勝てない。ずっとそれで勝てなかった。

入替戦での相手チームは、引いて一発逆襲を狙ってくる。監督、コーチとしてはそれが一番怖い。

ジャイロだったら攻めが無理矢理な格好にならない。だけど、それが同じブラジル人の感覚としてはおもしろくないようだ。

ジョージの意識はピンポイントでリスクなボールを出したい。けれど、ジャイロは止まっているから出しにくい。「だから出さない」と言っていた。

流れとしてはちょっと落ち着かせた方が、逆襲のチャンスを相手に与えないのだが……。

■読売のサッカーは面白い

日本リーグ1部に上がり、ジャイロと復帰したラモスの使い方と組み合わせ方には困った。けれど、ジョージもいて読売クラブの攻撃力は、ほかの日本のチームでは見られないものがあった。確かに1部のチームは強いけれど、読売クラブとはコンセプトが全然違うサッカーだなと思った。

1部の開幕戦は西が丘サッカー場で新日鉄とやった。スコアレス・ドローでPK勝ち。稲城の山の上で、選手が、自分たちで作ってきたサッカーが、手作りのサッカーが、「天下の日本サッカーリーグの1部で通じる」ことを実感した。



◇写真：1978年頃の読売クラブの選手たち

自分たちが演出するサッカーを「日本のほかのチームが真似してくれないかな」と考えた。真似るに値するサッカーではないか

という期待があった。「読売のサッカーって面白い」と自分たちは思っていた。

2部にいた頃から「俺たちのサッカーは日本のスタンダードではない」と感じていた。1部のチームとも練習試合もやっていたし、そういう情報は伝わる。「あいつら汚ない」と思われていた。気持ちの中には足元でボールを扱うことに関しては「俺たちが一番だ」と思っていた。相手も、こちらのボール・コントロールを封じるために肘を入れたり膝を入れたりする。「結局あいつらだって汚いじゃないか」と思った。

どんな選手だって思い切り身体をぶつけられたらボールなんてコントロールできない。しかし、それでは、よいサッカー、美しいサッカーなんて見せられない。

■下部組織の強化

トップチームの監督をやっていた当時、トップの下にジュニアというチームがあった。これが非常に中途半端なチームだった。ジュニアの下が高校生年代のユース。私は目的がなくウロウロしているのが大嫌いだから、毎週1回は試合をし、年間を通して何試合も参加して、ゲームを通して体と心を常に臨戦態勢に持っていくべきだと考えた。

しかし、ジュニアからトップに上げて使おうとすると全然使えない。それは選手のせいではない。コーチのせいだ。だから神奈川県リーグに出られるよう、ジュニアの強化に乗り出した。

その下のユースにしても、当然高体連（全国高等学校体育連盟）の大会には参加できない。それではまずいということで、例えば西のヤンマーなども含めてユース・リーグを作ろうと考えた。よみうりランドで第1回のユースサッカー選手権を開催した。それが今の高円宮杯に発展しているはずだ。



◇写真：ユースリーグを作った頃のユースの選手たち

私は読売クラブではまず、小学生のサッカースクールを担当したわけだが、中学生年代もしっかりしなくてはいけない。「中学はどこの学校に行ってもいい、だけどサッカーはここでやれ」と言えるクラブでないと。そのためには中学生のチームの組織をしっかりしなくてはいけない。整備して組織して、モチベーションを上げることが大事だ。

そして、次は高校。それをほぼ同時に行った。

クラブを管理している人たち、具体的には笹浪さんは、そういう方式がヨーロッパ方式であることは知っていたと思う。しかし現実的には多くの日本人は理解できていなかった。

三菱には養和サッカースクールがあったけれど、養和を出ても三菱の本社チームに対して、どこか断線していた。選手を育成してもトップに行くシステムがない。選手の気持ちとしては、養和

に入ったら三菱の選手になれるんだという気持ちにはなれない。そういう気持ちになれるのは読売クラブだけだった。

読売クラブのユース組織は、トップが日本リーグ1部に上がった1978年ごろには、だいたい形ができていた。中学生年代のジュニアユースにも、千野徹らの指導者を呼んだ。

呼んだからには、仕事を与えなければいけない。才能のある選手を集めなければいけない。ただ、どこかのチームに行って指導者に頭下げるのだけは止めよう。誰もツバをつけていない選手を見いだそう。そして、そういう選手がランドの芝生の上で練習してうまくなっていった。

■ベレーザの誕生

女子サッカーには、F C ジンナンという名門があった。一番初めに有名になったチームだ。

そのジンナンでプレーしていた選手が、よみうりランドに遊びに来た。「お前らどうした」と聞くと、「サッカーやりたくてしょうがない」と言う。それなら「女子チームを作ってやる」と言って、竹本一彦を指導者にして発足させた。1981年（昭和56年）のことだ。

読売クラブを総合クラブにしたかったから、女子のチームも作ってしまう。作ってすぐ、ジンナンと試合をした。素人を集めたのだけれど、結構、いい試合をした。素人を集めてサッカーをさせるのが、私は得意だ。

女子のチーム作りは単純だ。野田朱美を取ったころから、ベレーザはあれよあれよという間に、強くなっていった。

夢は女子サッカーの地位が、女子バレーボールぐらいになること。女子バレーはたいしたものだ。彼女らの、選手としての自覚も、達成しようという意識も、肉体的な強さも、まだまだ女子サッカーはかなわない。

◇ 相川亮一（あいかわ・りょういち）

1946年生まれ。早大卒。73年、イラン・テヘランで開催されたFIFA主催のアジア・コーチングスクールを受講し、クラーマー氏に師事。74年、読売クラブとコーチ契約。以後、小中学生、ユース、トップのコーチを経て78年に監督。82年に辞任。その後は高校サッカーを指導。

栄光サッカー部50周年記念誌から

「コーチの中のサッカー風土に出会いに行く」

相川亮一（13期）

時は、2001年8月6日、ついこのあいだのことである。

イタリアのミラノからバスで4時間、トレンティーノ・ロンゾーネという、人口800人、標高1,100mの村にホテル・デル・アルピはあった。イタリアワールドカップの際には、サッキがそこをイタリア代表の宿舎にも指定したホテルになぜか自分はいて、そこで昔はACミランの選手で、今はイタリアのコーチのためのコーチをやっている、ある男に会っていた。

その男は歳のころなら50の半ばをすぎ、頑健な骨格、はげあがった額、最初の朝に食堂で私が独りコーヒーを飲んでいると、赤いACミランのジャージを着てやってきて、あいさつもそこそこに「選手はなぜ朝食を食べていないのか」と聞いてきた。こいつはファンダメンタリスト？…一瞬これからうまくやっていけるかという思いがよぎったが、こういう時はかならず「サーをつけてしゃべれ」と勝手に会得したコツをつかって「私が07:30の朝食を命じた。なにしろ昨夜ホテルについたのは深夜の02:00だったことですし、サー」それでそこは終わった。

嫌味な野郎かと思ったが、グラウンドではすごかった。エネルギー、サッカーへの博識、理屈と感情をともに練習にくりこむ手腕、遅々として進まぬ選手に対するあきらめ。ご同業ご苦勞ですとひそかに感じる。1時間練習をやるのを見て、自分の最初の認識はあらためた。

その男が、子供たちと戯れてカルチョをやるときは、ハーフをやるのである。そしてうまい。彼はそういうときも興奮して「チェントラ（＝中央）、チェントラ！」と叫んで、日本典型な外へ散らすひ弱な魂のあらわれ、高校サッカーパスをさげすむの

である。

Millan coach Daniele Paccagnan（これは後日私のところに来た彼からのメールのサインをそのまま引用したのだが）。これがその男の名前である。ミラン・コーチというタイトルをいつもつけるところに、この男のプライドがあるのだが、さて私はその8月6日、すでに数日を過ごして、ともに酒も呑んだ。馬鹿なジョークも交換しあって、そののちに、彼に何を質問したか。

ロンゾーネくんだりまでイタリア料理のコックの修行にきた若い日本人が臨時通訳をしてくれたので、日本語で「もしダニエルさん、あなたがイタリア代表の監督ならどうやってフランスをやっつけるのか？」というものだった。

ダニエル氏が、イタリア語と英語のちゃんぽんで答えを言った瞬間に私は爆笑した。イタリア語は去年から勉強し出したのではほとんどわからない。わからないがそのときは確かに正確に彼が言ったことを了解した。文章の意味と、もうひとつサッカーマンのもつべきガッツのふたつである。

彼は、そこで、フラットだプレスだとはいわなかったのである。そうではなく、「自分が監督なら？　そうではなくフランスなんぞは俺が選手として出ていって相手が3点いれるならば、俺が4点いれてやる」と確かにそう言ったのである。

こういう魂のもつ倣岸なまでの自己依存というもの、それが正しいサッカー選手のもつ魂である。自分はそういう連中と日々を過ごしてきた。

◆「理論」も「感情」も

50年史編集部から、何か書けといわれたとき、サッカーというものではなく、サッカーの「コーチング」というものを表現したい欲求にかられた。なぜなら、それだけが、自分にとってなじみのあるものだからである。けれどそれはコンピューターソフトのコード編成のようなもので、一般受けはしないのである。で、す

ぐその思いは封じた。

サッカーのコーチングというより、サッカーそのものには理論もあれば感情もある。それらはゲームでは混然として、分ちがたたくさんある。

だからコーチとしての自分は、かなわぬ夢だが、理論をもってサッカーを解析した結果を子供たちに伝えることと、激しく吹き上がる感情もその逆に沈鬱であるがのようにも見える感情の抑制もともに、「練習にくみこみたい」と思うのである。

ダニエル氏に「フランスをやっつける秘策はなにか」と聞いたおのれは、真顔で答えがかえってくると思っていたか？ いやいやそれはそれほどには相川もナイーブはない。「あのたぬきおやじは、おれの問いかけにどうフェイントをかけるか」程度には思っていた。そしたら、そのデジャブーのような、答えがもどってきた。

これはつまりは、理屈ではなく、感情の方に彼のコメントが行ったのである。そういう指導者が成功するかどうか、ということを書いてはいないし、言いたいわけでもない。

マスコミを通じてでしかないのだが、トゥルウシエのおもしろくなさそうな表情を見ると、こいつとこいつをかついでフラットだ、なんだと騒いでいるやつらは「どこへサッカーを連れて行きたいのか？」といつも思う。

どんなサッカーが良いサッカーかを言う資格はない。ただ限られた生をサッカーをやりぬいて終わるからには、感情も理屈もともということ、そこから離れたくないわけだ。それで、限られたスペースのなかで、今回は感情のことばかりを言う。

「俺はサッカーをやれせたら、だれよりもうまい。他のことは知らん」その激しいが、わかりにくい思いを、そのままに企業社会の中などにはいっていけば、その魂は秒殺されるのがおちである。ゆえに、プロサッカーというものが求められる。そうではないか。

次は、ではどうやったら子供たちに「今からフランスとゲームをやりに行くのだが、あいつらにサッカーってのはどういうものか教えてやろうじゃないか」と武士の昂揚を言葉にする、そういう子供を育成してゆくのか？

どうやったら、社会がほとんどそういう価値観をもたない現代ジャパンの子供たちに、ダニエルが言ったと同じような魂のかまえを根底にすえて、サッカーを教えるか？　そういうことにかまけて気がつけば40年である。しかもご推察どおり、夕暮れちかいは道は見えずだ。

フラットラインで押し上げて、トップとの間隔をせばめ、あるいは相手のボールサイドに、こちらの逆の外側選手をしぼりこませ、プレイゾーンを横幅3分の2にするとか、アルゼンチンの守備は相手のトップの前に位置するとか、理屈はいくらでも知っているのである。またそのコーチングの方法も知っているのである。唐突に風呂場で自死した江藤淳氏のことを思い出した。知識が存在に役に立つのか？

知識は道具だ。そして、それらはすべて外国メードだ。だから日本対フランス戦を思い出してくださいという。手も足もでなかった。それはそうだ。本家本元にそのコピーキャットが知識でも独自性も出さずに対戦してどうするのか？　理屈はコピー、感情に訴求するものなし、それでどうするのか？

で、こういうときはつまりコーチ自身が煮詰まってしまっているときは、酒を呑みにいくか、故旧にもどっていくのである。故旧はどこにあるか？

◆「コーチ」から「コーチ」へ

サッカーの場合は、故旧は書物のなかにはなく、それぞれのサッカー風土のなかに埋もれているのである。それゆえ一歩間違えば、おのれもコピーキャットになりかねないが、故旧を求めて、それぞれのサッカーネーションの名もなき人々、ローカルコーチたちに会いに行くのである。会って理屈を聞けば、それはすでに

承知しているものである。

ただその承知している理屈をこれまたダニエル氏が、別なところで、彼もプレーするゲームのまえに、「カワ（相川というのが発音しにくいから、外国人にはいつもこれで呼べという）昔なあ、自分がミランの現役だったころ（おそらく有名なコーチであったのだろう、私は名前を聞き取れなかった）なにになが俺のコーチであったのだが、自分にエクステンド（ウィングということだろう）をやるならこの白線の外で、お前はプレイしろと言われたんだよ」と、こう言うのである。

その声のひびきに「数理を解くような理屈の響きはない」と自分は感じた。そうではなく、なにか世代をくりかえしくりかえし伝習されていく、世間から見たらどうでもよいマイナーなテーマでありセオリーなのだが、それはやはりサッカーに生涯をささげたそのコーチの某氏から、若きダニエル氏が受け取り、いまだに心に残る言葉として50年を経ても滅びず、今また東洋からきたコーチに、コーチとして伝習していこうとする。なぜかそういう予期せぬ連続のなかに、はるかなる人生を感じて、心のゆらぎを覚えているかのように自分は感じたのである。

サッカーに携わるヒトの感情を知りに行く。それが故旧にあたるということである。それがおもしろい。

さて、場所はかわって深夜の東京・六本木。

負けては呑み、勝っては呑むのがサッカーコーチだ。相川さんのかつこう、ほとんどジャージ、素足にサンダル、六本木ティアラでは、現場監督ということになっている。名前も知らない白金マダム（自称）やら年老いたおかまのなかに、すばやくとけこむことが大事だ。これを和光同塵という。仏陀が悟りを開いて、でその先どうすべきかということを目指し示す言葉と言われる。コーチはそれを骨髄奪胎。簡単な話だ。悟りをひらいたわけではないが、知に偏して、頭が邪悪な戦術に占領され、それで勝った日には、天下を取ったような気宇壮大にして、他人がみんな馬鹿

に見えもするし、負ければ負けたで、自分は最低のクズである。
滅びるしかないと思い込む。どちらもともに危険な危険な状態から早く脱するために、コーチは暗闇のなかに消えていくのである。
だいじょうぶ。これが自己管理というやつだよな。（本当か？）

また唐突にフランクシナトラの古い歌のタイトルを思い出した。

Imagination Plan to help alone

◇あいかわ りょういち：元読売クラブ監督

第三部 付録 相川亮一遺稿集（電子版）

※ 相川は、数多くの原稿を残している。特に、日韓共催ではあったが二〇〇二年に初めてアジアで開催された歴史的快挙の前後には、「ワールドカップ技術レポート」、「コーチング日誌」など数多くの執筆活動が続けている。これらにより相川がプロサッカーコーチとしての「コーチの目」を確立し、どのような活動を経験して、どのように考え、現実と向き合って来たのか、またその相川流コーチ術の精神を伝承するための精力的な著作活動によりその記録を残そうとしたのかがわかる。

しかし、その文書が余りにも多いことと、独特の難解な表現が随所であり印刷した紙面では読みにくいため、一部の抜粋を紹介するに止めて、さらに興味のある読者にはこれらを原文で読むことをお勧めして、敢えて原文のまま磁気媒体に収録した。本書の中では、抜粋でいくつかのタイトルのみ紹介する。

＜資料目次＞

第三部 付録 相川亮一遺稿集（電子版）

- | | |
|------------------|----|
| 1. あと二つ | 51 |
| 2. コーチという職業 | 54 |
| 3. 「コーチの目」電子版 目次 | 58 |
| コーチング日誌 | |
| ワールドカップレポート | |
| ほか | |

あと二つ

これは2002年ジャパンワールドカップ開催時のライブ記録です。

Date: Thu, 04 Jul 2002 01:34:58 +0900

To: aikawa@tkh.att.ne.jp

Subject: あと二つ

From: Ryoichi Aikawa

ワールドカップ中、「おのれの感じたままを、つたなく作文して」自分が知る限り、この人なら「相川言うところ、賛成, 反対は別に、」サッカーコーチの言う所に興味が「ありそうな」人たちに、メールしていたわけである。

その目的というか「ねらい」はなにであったか？我々コーチはしゃべる必要はない、（とう相川信念がある）しかししゃべる必要があるなら、「世の中的に見て、まともに」しゃべれて「あたりまえだろう」

自分が「言うところ」が正しいかどうかは、第3者が「いかようにも判断すればよい」ただサッカー人、「バカじゃねーぞ」というところだけは、松木だ、都並だ、川平だ、永島だ、長谷川だ、とそういうのとはちがう『コメント』を限りある数であれ発信しなかったということがねらいである。

ジーコが次の代表監督だという、その理由は「トルシェ対日本人」ではとにかく「うまく」いかなかったということだとしたら？おいおいそれは、トルシェ批判だろう。

「トルシェでうまくいかなかった、総括はどうするの？」そこが抜け落ちているではないか？まーそういうことはありがちではあ

るが。

どちらにせよ、総動員体制が「答えである」、ほかに答えはないのであるジーコに「マル投げ」最初から失敗だよね。

さて、このワールドカップレポートをいろいろな人に発信した結果、自分の後輩の坂本氏が口を聞いてくれて、ある雑誌に「おまえが、書け」という次第になった。

批判していた湯浅だ、早野だ、セルジオだと、その他大勢だと、いう連中と同じ立場に「相川立ちたいわけではない」ぼろを着ていても、天下の相川だという姿勢、それがいまや自分を支える。だから別に、与っているチームが幼稚園のチームでもよいのだ、天下の相川仮に幼稚園のチームを担当しようが、「いつも世界と通底している」という自負を「今ももつ」

コーチから見て「あいつが担っているチームは良いね」というそういう評価は大事にする、しかしあいつは「口がうまいね」というそんな評価はほしくない
だからプレジデントに今度のる文章についてもせっかくみなさんとコミュニケーションをしていたわけだから、今回もその経緯もふくめて、オープンだ。

いかにも今日的でしょうが、そう言うことが好きである。
それがこういうことを「やっても」せこくはないぞという相川の主張だ。
相川せこくサッカー考えないぞ、というそういうおのれの意欲がベースである。
小金をかせぎたいわけではない。

プレジデントに掲載される「はずの」文章と「相川のオリジナル」比較すればおわかりのとおり、後半「ナショナリズム」を語っているところは削られている、そのことについて「まったくクレームはない」それはそうだろうペンネーム「我満 硫」、文章の世界では「どこの馬の骨」であろう、だから、そのことには謙虚である。

だがどちらが相川らしいかといえ、むろんオリジナルである。

しかしだからプレジデントがどうこうではない、文論の世界にはその世界の仁義がある、そういうことだろう。

コーチ相川、ひとがなんと言おうが、「おのれの信ずるところをこれからさきも進むだけである」それだけだろうが。

あと二つというのは、これが一つ、もう一つは最終レポートのようなものを「考えているのだが」またそれを「独りでも、つくるぞ」という意欲はある、だが「できることなら」それ=最終レポートを、みなさんの「侃侃諤諤のなかで」造りたいねというロマンはある。この相川の思いにだれが応えてくれるか？そのことで2006年はちがうぞ、といってもだれも信じないかな？

けれどそう思う。

例により、F e e d B a c k 歓迎である。

コーチという職業

2007年1月30日(火)

柴野先生から、2月3月4月までもの栄光サッカー部のスケジュールが、おくられてきた。自分はそのスケジュールを、相川の私的日記というファイルにコピーして、ペーストする、相川の場合、日記は、またスケジュール表としても機能させているので、駿台のスケジュールだろうが、栄光のスケジュールだろうが、そのほか、どこへ「のみにこい」とか、あらゆるスケジュールは、自分の日記に、現れる。

なんでもかんでも、日記に、ほうりこんで、「で」例えば、2月02日には、なにをしたらよいのか英語でいえば。What to do?そこに、書き出して、「で、それをやらなければそのままデリート、やったなら記録にとどめる」何月何日は、駿台の試合で、千葉の四街道まで行ったならそのスケジュールが事実としての記録で残る、おなじときに栄光の練習なり、試合があったとしてもいかなければデリートして、スケジュールそのものの、記録は、どこかへ消えていく。

そこまで、おたくにはならない、ということだ。

で、そうやってスケジュールだからいざその日になって、どこへでかけるかはわからないにせよ、4月5月までもすくなくとも栄光の、スケジュールはでてしまつて、駿台がなければ栄光の行事にいくわけだが、このあいだ、06年が終わつて、07年になつたと思つたら、その07年もスケジュールの上では5月がすぐきて、5月は「これこれこういうことを、何月、なんぼにします、」ということが、迫ってくるというわけだ。

そうやって、人生はあつというまにたぶん過ぎていくのだろう。

一方に、言つて見ればコーチという職業だが、個人として「時間というものの、過ぎ方に、どうしても、なじめないで、」「もう

ここまでできたのか」とか「あっというまに、時が過ぎたがそれがおかしい」という感情を、もっている個人の存在と、その時間の経過にしたがい、なにかいつのまにか、なにかが達成されたかのような、思いも、感じる、二つの、よくわからない感情に支配されている、「自分というものが」いるわけである。

職業的な視点ではなくて、目の前で、栄光の中学生がサッカーで遊んでいれば「自分の思いは、はるかな過去にむかって、いまの中学生と自分が同じ、年齢であったときに、場所は違えども、ボールに救われていた、その日々に、もどるのである。

いやボールにすくわれていたのではなかった。
そうではなくて、友の、なんということのない、情にすくわれてきたのだろう。
だから人生なんてそれだけだろうが、とあえて思う。

だれそれは別に、相川のことを、深くかんがえてくれたわけではない、ただ、その友人を育てた、父や、母が、単純に彼に教えた、考えに沿って、「相川なら、相川を、さりげなく救ってくれた、さりげなく、対等に、さりげなくひととして、扱ってくれた、そういうことであった。」しかし、そういうことが、あったから、この場合は、相川は、救われたのだろう。
それが貴重と、いまは思える。
だから、いまも、栄光別に、勝たなくても、だからどうしたである。

いまの高校生であれ、中学生であれ、サッカーやって、結局は、救われるのである、どんなに、若き、シニシズムの信徒がいようが、サッカーではなくて、ともに、サッカーをやった友に救われるのである。それ以外に、若い日々に、サッカーを「やる理由など、ないぜ」といまなら、相川はつきり、言える、受験狂いの親にでさえ、「言える」と思っている。

だから、サッカー続けなさい「であろう」

新人戦は、シードの1回戦、のあと、サレジオの2回戦は久里浜に行った。

アップをせんしゅにやらせていたら、10期生の清水さんが「おおい」とばかり手をあげてくれた。これもまた「ありがたい」ことである。

コーチの、指導マニュアル、なんていうものはないのだが、それに近い教本にこうある「とにかく選手に、機会さえあれば話しかけなさい」と、清水さんは、選手に「おおいと」いったかもしれないが「相川に」「おおいと」いつてくれたわけだから、それが、ありがたいことだと、そういうように感じる、自分は、十分に、栄光サッカー部で、相川に「なった」のであろう。

だから同じことを、現役に、それとなく、設定してやりたいのである。

ほかにも、菅沢さん、石原さん、大泉さん、押本さん、望月さん、高橋さん、坂本さん等々が寒い久里浜のグラウンドに、やってこられた。

ありがたいことである。

いつか現役も、そのことを、感じるだろう。

ひとが、他人にふれあう、そのことができにくくなって、でいろいろな問題が起きている。13期でだれだかわからないが「死んだやつがいて」自分のともだちがあるやつに、「葬式にきたら」といったら、そいつが「なんであいつの葬式にいかなければならんのか」といったとか、いや、それはそれで、いい。人間が関係していくときに理屈を先行したら、あいつとは交わらない、あいつは嫌いだから、葬式にも出ない、ということ「も」あろうか、いまさらそれを驚かない。

栄光のサッカー部にいたからといって、なんで、昔の人間関係を、

復活させるのかとか、なんで現役に、サポートよせるのかって、理屈言ったら、なんでも通る。

だからこちらは昔、仲間が無意識のうちによせてくれた、情というものを「いまも、たよりにしている」というのではなくて、いまはいま、あくまでも、30年前の先輩であっても、いってみれば新たに、人として交情を、新規に、つくりなおすというように思っている、ひらたくいえば昔「があるから」だから「いまも」などとは思わない。

サッカーをやっている後輩のふるまいを見て「楽しむ」そこを、共通の感覚として、いま、あらたに交情をつくっていくことができそうだから、「ここに」いるのだろう。あるいは、だれそれさんは「ここに」きてくれるわけだ。

翌日は、めしのたねにしているほうのチームが、当座のライバル、保善との一番で、久里浜に顔出せなかった。保善は新人戦の地区大会の決勝で、0-0、PK勝ちで、やつけてやれやれ当座は対戦しないだろう、と思っていたのに、都大会で、1回戦、また対戦という状況。かろうじて2-1で、やつけた。次は、暁星、これは4月になる。

栄光は、市立東に、逆転で負けてしまったそう。ベスト16で終わってしまった。

14期赤沢、いまは大島先生と2年前に話したとき「相川さん、いまは公式試合で一勝もできない」と話したのを、思い出す。

それに比べたら、なにごとかの達成かもしれない、8でも4でいけたのでは、実は思っている。

相川亮一 「コーチの目」

★電子メール通信より（原文のまま）

Ryoichi Aikawa さんは書きました：

コーチング日記添付します。

サッカーお好きな人、まったく興味なくて、すぐダンプしてしまう人、またどこへどう転送されてもけっこうです。

他のところにも書きましたが、2002年、日本でワールドカップ見ることができたなんて、高校生のころ想像もできなかった、ところをまたまた4年がたって、今年もワールドカップイヤーというわけです、今後は「おつり」 じゃないの、と思えます。

※ 資料：以下は電子版の目次ですので、「コーチング日誌」は付録の電子版をご覧ください。

2007年編

- 日本国サッカーアイデアの、日本語表現（2007年7月9日）
- オシムの考えるサッカー（2007年4月9日）
- コーチの辞任あるいは解任（2007年3月7日）
- どう戦うのか反町ジャパン（2007年3月1日）
- コーチという職業（2007年1月30日）

2006年編

- オシム監督の教え（2006年9月7日）
- オシム監督の存在（2006年8月10日）
- ワールドカップ2006ベスト4確定（2006年7月3日）
- ブラジル対ガーナ戦（2006年6月28日）

- ワールドカップ検証 - ジーコの敗戦とファウルの判定（2006年6月26日）
- 祖母井（うばがい）氏の見た、オシム監督（2006年3月21日）
- フラットくずしの心（2006年3月21日）
- 古典的スキルと向き合う（2006年1月1日）

2005年編

- トヨタカップ決勝を見て思う（2005 年12月19日）
- 行臓は我にあり（2005 年10月3日）
- 誰がチームの未来を統括するのか？（2005 年9月26日）
- コーチの人生観（2005 年9月20日）
- サッカーのチーム造りと指導者の思い（2005 年9月6日）
- 敗因21ヶ条（2005 年8月23日）
- 東アジアカップにおける日本代表の攻撃（2005 年8月1日）
- ジーコに学ぶブラジルサッカー（2005 年6月25日）
- 悲しき北朝鮮（2005 年6月8日）
- 北朝鮮戦直前（2005 年6月6日）
- ジーコ流監督論（2005 年5月30日）
- 勝負に勝てる「戦略」の考え方（2005 年5月12日）
- サッカーの楽しみとは？（2005 年5月2日）
- 選手の精神的後見人としてのコーチ（2005 年4月18日）
- WCup予選：バーレーン戦 1:0で辛勝（2005 年3月30日）
- WCup予選：イラン戦 1:2で敗退（2005 年3月25日）
- コーチが自覚すべき自学練習（2005 年3月11日）
- コーチの判断、練習への取組み（2005 年3月5日）
- 春休みの練習テーマ（2005 年2月23日）
- サッカーの練習（2005 年2月20日）
- 彼岸から、なサッカー模様（2005 年2月16日）
- 「全日本監督：ジーコ」論（2005 年2月14日）
- 試合後、ジーコの反省（2005 年2月10日）
- 北朝鮮戦を終えて（2005 年2月9日）

- 対北朝鮮戦の展開予測（2005 年2月7日）
- 北朝鮮戦を目前にして（2005 年2月4日）
- 非凡な選手（2005 年1月30日）
- 北朝鮮戦への憶測（2005 年1月25日）
- 練習課題の見つけ方（2005 年1月24日）
- 前橋育英における「対戦経験」（2005 年1月16日）
- 選手は育ったグラウンドに戻る？（2005 年1月11日）
- 良い解説者像（2005 年1月10日）
- 現場コーチの仕事（2005 年1月2日）

2004年編

- クリンスマンドイツ戦（2004 年12月18日）
- 最後のトヨタカップ（2004 年12月12日）
- チャンピオンシップ - マリノス対浦和（2004 年12月11日）
- 選手の登用「考え方」（2004 年11月13日）
- 「うまい」だけでは、勝てない（2004 年10月11日）
- コーチの「こだわり」と指揮（2004 年10月3日）
- 東京の正月選手権予選ベスト16に臨む（2004 年10月1日）
- コーチの使うサッカー用語と練習化（2004 年9月18日）
- 高校コーチの活力（2004 年9月8日）
- コーチの「とことん」（2004 年9月7日）
- 「勝てる」コーチ（2004 年9月6日）
- 驚きのプレイ（2004 年8月20日）
- コーチの任務（2004 年8月19日）
- 選手の闘いへの情熱（2004 年8月17日）
- オリンピックチーム に見るコーチの役割（2004 年8月16日）
- 普遍的なもの（2004 年8月10日）
- 日本アジア杯優勝戦 を見て（2004 年8月8日）
- アジアカップ決勝 日本vs中国（2004 年8月5日）
- コーチの知りたいと ころ（2004 年8月2日）
- オーバーコーチング の問題（2004 年8月1日）

- サッカーの「勝負」（2004 年7月26日）
- 戦い方は無限（2004 年7月16日）
- サッカーのダンディズム（2004年6月6日）
- 「白線のなか」の世界での練習（2004年6月4日）
- 練習試合で転戦中（2004 年5月31日）
- コーチの幸せ？（2004 年5月23日）
- フットサルビジネス & 高校コーチの日々（2004 年5月13日）
- 清水遠征レポート（2004 年3月30日）
- 選手の素質（2004 年3月17日）
- イルハン・楽天に登 場（2004年2月14日）
- グラウンドに集中（2004 年2月8日）
- 2003年仕事納 め、そして新年（2004年1月2日）

2003年編

- コーチの目（2003 年12月15日）
- サッカービジネスの 種（2003 年11月30日）
- 「知と熱」とジーコ（2003 年11月21日）
- 「知と熱」とサッ カー（2003 年11月20日）
- 対戦相手の分析と自 己テーマ（2003 年11月18日）
- 練習ゲームの課題（2003 年11月10日）
- 新チームの準備（2003 年11月2日）
- 敗戦分析後のフォ ロー試合（2003年10月14日）
- 2003年の成果（2003 年10月6日）
- コーチの信条（2003 年10月2日）
- セオリー論（2003 年9月27日）
- 実りの秋、さまざま（2003 年9月24日）
- 彼岸の入り。コーチ 道（2003年9月21日）
- 順天堂・専修らとの テストマッチ（2003年9月15日）
- Dボーイズ的アプ ローチ（2003年9月10日）
- 正月選手権にむけて 命削る時期（2003年9月7日）
- コーチの心得（2003 年9月6日）

- 韓国遠征日記（2003 年8月31日）
- 高校選手権の地区予 選（2003年8月20日）
- フラット崩しの本質（2003 年8月17日）
- 理論の実戦報告（2003 年8月13日）
- フラット崩しの 「解」（2003年8月9日）
- 夏休み練習行脚（2003 年8月4日）
- 菅平合宿 2：フラッ ト崩し（2003年7月25日）
- 菅平合宿 1（2003 年7月24日）
- 「ぼろチーム」の コーチ（2003年7月23日）
- コーチ VS 評論家（2003年7月21日）
- プレスはずしの攻撃（2003 年7月12日）
- 湘南高校 鈴木先生（2003 年7月4日）
- ジーコの監督手腕（2003 年6月20日）
- マスメディア（2003 年6月11日）
- フラットプラスプレ ス？（2003年6月8日）
- ジーコの資質（2003 年6月1日）
- 栄光ボーイ（2003 年5月24日）
- 李国秀との出会い（2003 年5月8日）
- 負けた原因（2003 年5月6日）
- この世のものとは思 えない：夢（2003年4月30日）
- とりくむテーマ（2003 年4月27日）
- コミュニケーション（2003 年4月26日）
- スポーツ環境（2003 年4月21日）
- 練習のなかでのこつ（2003 年4月14日）
- 練習・ゲーム分析（2003 年4月11日）
- 連動する、させる（2003 年4月10日）
- 奇妙な現象（2003 年4月7日）
- 勝負の不思議（2003 年4月6日）
- 局面の戦術と勝敗の 結果（2003年4月5日）
- 練習テーマの与え方（2003 年3月14日）
- ボールの走らせ方（2003 年3月6日）

- サッカースタイルの 原点 (2003年2月25日)
- コーチの戦術 (2003 年2月19日)
- コーチの仕事 (2003 年2月17日)
- おもしろいゲーム (2003 年2月12日)
- ワイルドライフ (2003 年2月10日)
- コーチングのテーマ (2003 年2月4日)
- 練習のありかた (2003 年2月1日)
- ライン崩しの深層 (2003 年1月29日)
- 「ライン崩し」と 「プレスはずし」 (2003年1月25日)
- コーチの道具 (2003 年1月23日)
- 攻撃サッカー (2003 年1月21日)
- 闘う魂 (2003 年1月20日)
- 最後はフォワード (2003 年1月2日)
- コーチの美学 (2003 年1月1日)

編集後記

葬儀に参列した人びとの話を聞いて、相川亮一の業績を日本のサッカー史に残すべきだと考え、この本を作ることを提案した。読売サッカークラブを通してしか彼を知らなかったが、神奈川県での仕事を合わせてみて、日本のサッカーが進むべき道を取り上げていた彼の全体像が分かってきた。(牛木素吉郎)

限られた時間と費用の中で相川コーチの多岐に渡る関係者からご協力をいただいて少しミステリアスなプロサッカーコーチの全体像を浮き彫りにする資料をまとめる事ができた。また、編集会議で牛木事務所をお借りする事ができた事に感謝。この資料が更なる日本サッカー界に足跡を残せば幸いである。(高橋)

各人の『相川さんへのおぼろげな想い出』を、『しっかりとした記憶と記録』に、この追悼本は代えてくれたと思う。時代を先んじた、読売サッカークラブ創世記の、クラブの雰囲気、人間模様を感じてくれると嬉しい。(竹本)

この本によつて「サッカーコーチ相川さん」の功績が後世に伝わることを祈ります。

もつとも「自分がやったこと、やろうとしたことはこんなもんじゃないぞ」と言われてしまうかもしれません。常に時代の2歩も3歩も先を歩もうとしている。相川さんでそんな人でしたから。(田所)

編集に僅かながらも協力できたことは、もう一度「サッカーコーチとは何か？」を考え直す機会にもなりました。この本の中には青春時代を「ザサッカーコーチアイカワサン」とかわれた人たちの素敵な想い出と相川イズムがちりばめられています。特にサッカーコーチを目指す人には是非読んでほしい本に仕上がっているのではないでしょうか。(千野)

座談会は、参加者の協力で順調に進行。録音した発言は、そのままワープロへ落として、大量の原稿を編集のプロへ。相川さんの足跡を残すお手伝いができたのかどうか。相川さん、ありがとうございます。合掌。(矢作)

相川亮一 ザ・サッカーコーチ

※ 非売品 (Copyright C 2011 All rights reserved)

◇ 発行日 平成二十三年（二〇一一年）八月二十七日

◇ 発行 『相川亮一追悼集』編集・発行委員会

相川知雄、牛木素吉郎、大住良之、加藤滋、坂本隆、澤井光彦
鈴木中、高橋正明、竹本一彦、田所俊文、千野徹、矢作典史

◇ 制作 〈株〉本郷プラザ

◇ 表紙デザイン 〈株〉トリゴニアデザイン

◇ 印刷 SBL 株式会社 ECO出版

◇ 連絡先 tomoaikawa7818@yahoo.co.jp

完